

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

経営体育成基盤整備事業 野井倉下段地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 井手上 A 遺跡 (1・2次)

2012年2月

鹿児島県志布志市教育委員会



井手上A遺跡 遺構完掘状況 航空写真



井手上A遺跡の台地(北西より)



井手上A遺跡 以南の台地(北北西より)



井手上A遺跡の位置



## 序 文

本市には多くの文化財が存在し、埋蔵文化財の包蔵地についても前川・安楽川・菱田川を中心に500カ所を超える多数の遺跡が確認されています。特に前川・安楽川沿いに縄文時代の遺跡が多いことから、「縄文銀座」と称されるほどです。また一方で、志布志は古くから港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁栄し、麓地区には多くの武家庭園・寺院庭園が遺されています。これらの庭園のうち、天水氏庭園・平山氏庭園・福山氏庭園は「志布志麓庭園」として国指定名勝となり、鳥濱氏庭園と清水氏庭園は国登録名勝となっています。さらに、志布志をめぐる興亡の歴史を示す中世山城の志布志城跡も国指定史跡に指定されています。

また本市南部の志布志湾沿岸部一帯は日南海岸国定公園の一部に指定され、沖合い約4kmの志布志湾のほぼ中央に浮かぶ枇榔島は亜熱帯性植物群落が、国の特別天然記念物に指定され、さらに志布志湾沿岸東部の海岸線は景勝に恵まれ、ダグリ岬を中心に陣岳山頂から海岸一帯にかけて亜熱帯性の樹木が繁茂する風光明媚な美しい景観を映し出しています。

この報告書は、志布志市教育委員会が主体となって、平成20・21年度において確認調査を、平成21・22年度に全面調査を行った成果をまとめたものであります。

調査の結果、井手上A遺跡からは縄文時代早期から近世にかけての遺物、遺構が確認され、特に弥生時代前期から後期末にかけての様々な遺物と、そのほぼ同時期に作られた堅穴建物、近世の遺跡と思われる溝状遺構が多数確認されています。

この発掘調査の成果が、今後の研究資料として活用されるとともに、広く文化財愛護思想の啓発普及等、地域の文化財として活用され、文化財に対する理解を一層深めることが出来ればと願っております。

最後に、発掘調査に従事していただいた地域住民の方々をはじめ、現場における調査から出土資料の整理・報告書の刊行に至るまで御指導・御協力いただきました県教育委員会文化財課をはじめとする各関係機関、多くの先生方や関係の方々へ深く感謝申し上げます、刊行の序文といたします。

平成24年 2月吉日

志布志市教育委員会  
教育長 坪田勝秀

## 例 言

- 1 本報告書は、経営体育成基整備事業の事業実施に伴い志布志市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県農政部の委託を受けて志布志市教育委員会が実施した。
- 3 井手上A遺跡の調査は、確認調査を平成20・21年度、本調査を21・22年度に行なった。整理作業・報告書作成は平成23年度に行い、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターに指導・助言を得た。
- 4 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 5 発掘調査における写真撮影は出口・相奥が行った。
- 6 発掘作業の実施にあたっては、周辺地権者のご理解と地元作業員のご協力により円滑に行なうことができた。
- 7 整理作業を篠原頼子、山元弓枝（志布志市教育委員会生涯学習課文化財管理室）で行った。
- 8 発掘調査・整理作業並びに報告書作成に際しては、以下の方々にご指導・ご教示を得た。記して感謝を申し上げます。  
西岡勝彦 古岡康弘（以上 鹿児島県立埋蔵文化財センター） 中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）
- 9 出土遺物の管理・保管は志布志市教育委員会で一括して取り扱い、今後文化財の啓蒙・普及に活用したい。

## 凡 例

- 1 本報告書に用いたレベル数値は、鹿児島県農政部が提示した事業実施計画図面の数値に基づくものである。
- 2 本報告書の土色・土器の色調について、数字及び英字で表記されているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準十色帖 2001年版」に準じて表記している。
- 3 遺物番号・各遺構番号は全て通し番号とし、本文及び挿図・図版中の番号と一致する。
- 4 周辺遺跡一覧に表記してある番号は「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている遺跡番号と対応する。
- 5 遺構記号については文化庁文化財部記念物課編集・発刊『発掘調査のてびき 一整理報告書編一』第VI章 遺構の記録 表9を参考として以下のとおり付してある。  
溝状遺構 SD 竪穴建物 SI 土器埋設遺構 SJ 土坑 SK 集石 SS 遺物集積 SU 硬化面 SX
- 6 図面上にある遺物マークについては、下記のとおり分類した。  
古代以降遺物（須恵器・土師器・陶磁器等） ※ 日向系胎土土器 \* 赤彩土器 φ 成川式土器 ▽ 中津野式土器 ▼ 弥生土器（後期後半） △ 弥生土器（前期・中期・後期） ▲ 弥生土器（時期不詳） □ 縄文晩期・後期土器 ○ 縄文前期土器 ● 縄文早期土器 ◎ 石器・軽石製品 ☆ 破砕礫・礫・軽石 □ 焼礫 ■ 炭化物 ・
- 7 土器観察表中に表記してある胎土の分類については、ルーペ観察によるものである。胎土の分類標記は下記の略号を用いている。  
「石・長」→石英・長石 「雲」→雲母 「角・輝」→角閃石・輝石  
「礫」→小礫 「赤」→赤褐色粒 「砂」→砂粒  
なお、「小礫」については直径2mm以上の粒状のもの、「砂粒」については直径2mm未満の粒状のものを指す。

井手土人遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 目次

巻頭カクワ 図版

井手土人遺跡の位置

何齊・八倒

第1章 調査に至る経緯と経過 1

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の地域 1

第3節 調査の経緯 1

第4章 遺跡の位置及び概要 5

第1節 所在地の概要 5

第2節 地形的環境の概要 5

第3節 遺跡周辺の歴史的環境 5

第5章 調査の経緯 8

第1節 発掘調査(1次)の概要 8

第2節 発掘調査(2次)の概要 8

第3節 発掘調査(1次・2次)の単位 8

第4節 出土遺物 8

第6章 全面調査(1次)の概要 12

第1節 全面調査(1次)の方法 12

第2節 全面調査(1次)の概要 12

第3節 全面調査(1次)の単位 12

第4節 全面調査(1次)の調査成果 12

1 方形周溝 12

2 溝状遺構 12

3 土坑 12

第7章 全面調査(2次)の概要 23

第1節 全面調査(2次)の方法 23

第2節 全面調査(2次)の概要 23

第3節 全面調査(2次)の単位 23

第4節 全面調査(2次)の調査成果 23

1 縄文時代前期の調査 23

2 縄文時代後期～晩期の調査 23

3 弥生時代の調査 23

4 古墳時代の調査 23

5 古代以降の調査 23

第6章 井手土人遺跡における自然科学分析 114

株式会社 古墳発掘研究所

第1節 井手土人遺跡全面調査(1次)における放射性炭素年代測定 114

第2節 井手土人遺跡全面調査(2次)における放射性炭素年代測定 114

第3節 井手土人遺跡全面調査(2次)における炭化炭素分析 114

第4節 井手土人遺跡(2次) S1土坑土器について 148

第5節 奈良大学 埋蔵文化財調査室 中村直子電装図 148

第6節 調査のまとめ 150

第1節 遺物 150

第2節 遺構 150

図版

表紙～巻頭

神 岡

第1章 1

第1節 全面調査(1次・2次) グリッド設定図 3

第2節 井手土人遺跡付添 遺跡位置図 3

第3章 5

第1節 周辺遺跡位置図 5

第2章 8

第1節 発掘調査(2次) 出土遺物 8

第2節 発掘調査(1次・2次)トレンチ位置図 11

第4章 12

第6節 全面調査(1次) V1b層上層 遺構抽出状況図 1

第7節 全面調査(1次) V1b層上層 遺構抽出状況図 2

第8節 全面調査(1次) 東壁土層断面図 1

第9節 全面調査(1次) 方形周溝1 平面・断面図及び遺物出土状況図 14

第10節 全面調査(1次) 方形周溝1 出土遺物 14

第11節 全面調査(1次) 方形周溝1 横断面抽出状況図 15

第12節 全面調査(1次) 方形周溝2 平面・断面図及び遺物出土状況図 18

第13節 全面調査(1次) 方形周溝2 出土遺物 18

第14節 全面調査(1次) SK1 出土遺物 17

第15節 全面調査(1次) SD1 平面・断面図 18

第16節 全面調査(1次) SD2 平面・断面図 19

第17節 全面調査(1次) SD3 平面・断面図 20

第18節 全面調査(1次) SD3 出土遺物 21

第19節 全面調査(1次) SK1・2・3・4・5・6 平面・断面図 21

第20節 全面調査(2次) 遺構抽出状況図 1/4 23

第21節 全面調査(2次) 遺構抽出状況図 2/4 24

第22節 全面調査(2次) 遺構抽出状況図 3/4 25

第23節 全面調査(2次) 遺構抽出状況図 4/4 26

第24節 全面調査(2次) FC10区 北壁土層断面図 27

第25節 全面調査(2次) 縄文前期 甕・土器土層断面図 28

第26節 全面調査(2次) 縄文前期 調査区及び遺物出土状況図 29

第27節 全面調査(2次) S5 2 平面・断面図 31

第28節 全面調査(2次) X層 出土石器 31

第29節 全面調査(2次) S53 竊出状況 平面・断面図 32

第30節 全面調査(2次) S51 平面・断面図 33

第31節 全面調査(2次) S J 1 平面・断面図 34

第32節 全面調査(2次) S51・S J 1 出土遺物 35

第33節 全面調査(2次) S J 1 出土遺物 36

第34節 全面調査(2次) 遺物出土状況図 36

第35節 曾根式土器 J1 2区 (拡大) 接合状況図 38

第36節 市和式土器 遺物出土状況図 39

第37節 黒川式土器 遺物出土状況図 39

第38節 入式土器 遺物出土状況図 41

第39節 縄文晩期上層 遺物出土状況図 41

第40節 縄文時代晩期土器 MN1 4区 (拡大) 遺物出土状況図 42

第41節 縄文晩期上層 FG1 3区 (拡大) 遺物出土状況図 42

第42節 縄文晩期土器 J1 4区 (拡大) 遺物出土状況図 42

第43節 包含層出土 縄文土器 1 2 42

第44節 包含層出土 縄文土器 2 44

第45節 全面調査(2次) S11 平面・断面図及び遺物出土状況図 45

第46節 全面調査(2次) S12 平面・断面図及び遺物出土状況図 46

第47節 全面調査(2次) S13 平面・断面図及び遺物出土状況図 47

第48節 全面調査(2次) S14 平面・断面図及び遺物出土状況図 48

第49節 全面調査(2次) S13・4 出土遺物 49

第50節 全面調査(2次) S15 平面・断面図及び遺物出土状況図 50

第51節 全面調査(2次) S J 2 出土遺物 51

第52節 全面調査(2次) S J 2 平面・断面図 52

第53節 全面調査(2次) S J 2 遺物接合状況図 52

第54節 弥生前期中層 遺物出土状況図 54

第55節 弥生前期中層の竊埋タイプ 遺物出土状況図 54

第56節 入来1式土器 遺物出土状況図 55

第57節 入来1式土器 遺物出土状況図 56

第58節 山ノ目1式土器 遺物出土状況図 57

第59節 山ノ目2式、馬場式土器併存タイプ 遺物出土状況図 57

第60節 高村式土器(山ノ目2式土器の竊埋タイプ) 遺物出土状況図 57

第61節 弥生中期土器 遺物出土状況図 59

第62節 弥生中期後半土器 遺物出土状況図 60

第63節 弥生中期後半土器 J6・7区 (上段) M15区 (下段) 接合状況図 60

第64節 弥生後期中層 遺物出土状況図 62

第65節 弥生後期中層 MN1 4区 (拡大) 接合状況図 62

第66節 弥生後期中層の竊埋タイプ 遺物出土状況図 62

第67節 高村式の竊埋タイプ 遺物出土状況図 62

第68節 高村式の竊埋タイプ KL15区 (拡大) 接合状況図 62

第69節 中津野式土器 遺物出土状況図 63

第70節 弥生土器 遺物出土状況図 64

第71節 弥生土器 BC3・4区 (拡大) 接合状況図 66

第72節 弥生土器 JK5・6区 (拡大) 接合状況図 66

第73節 弥生土器 JK10区 (拡大) 接合状況図 66

第74節 弥生土器 F11区 (拡大) 接合状況図 67

第75節 弥生土器 L13区 (拡大) 接合状況図 67

第76節 弥生土器 JK16区 (拡大) 接合状況図 67

第77節 弥生土器 K-M14・15区 (拡大) 接合状況図 68

第78節 包含層出土 弥生土器 1 69

第79節 包含層出土 弥生土器 2 69

第80節 包含層出土 弥生土器 3 71

第81節 包含層出土 成川式土器、馬場式土器 71

第82節 成川式土器 遺物出土状況図 75

第83節 曾根式土器 赤杉土器 遺物出土状況図 76

第84節 全面調査(2次) SU1 平面・断面図 79

第85節 全面調査(2次) SU1 接合状況図 79

第86節 全面調査(2次) SU1 出土遺物 79

第87節 全面調査(2次) SD1 甕壁土層断面図 78

第88節 全面調査(2次) SD1 平面・断面図 81

第89節 全面調査(2次) SD2・SD3・SD4 平面・断面図 82

第90節 全面調査(2次) SD6・SD7 平面・断面図 83

第91節 全面調査(2次) SD8・SD7 平面・断面図 84

第92節 全面調査(2次) SD8 平面・断面図 84

第93節 全面調査(2次) SD9・SD10・SD11・SD12 平面・断面図 87

第94節 全面調査(2次) SD9・SD10・SD11・SD12 断面図 88

第95節 全面調査(2次) SD13 平面・断面図 89

第96節 全面調査(2次) SD14・SD15 平面・断面図 89

第97節 全面調査(2次) SD16 平面図 91

第98節 全面調査(2次) SD16 断面図 91

第99節 全面調査(2次) SD16 甕壁土層断面図 92

第100節 全面調査(2次) SD17 18 平面・断面図 96

第101節 全面調査(2次) SD19 平面・断面図 96

第102節 全面調査(2次) SD19・30・31 平面・断面図 97

第103節 全面調査(2次) SD19 土層断面トレンチ 土層断面 98

第104號	全面調查(2次)	SD30・31	新南園	99
第105號	全面調查(2次)	SD20	平面・新南園	99
第106號	全面調查(2次)	SD21・2・23・24	平面・新南園	101
第107號	全面調查(2次)	SD21	東土層断面圖	101
第108號	全面調查(2次)	SD25	平面・新南園	102
第109號	全面調查(2次)	SD25	遺物出土状況	102
第110號	全面調查(2次)	SD26	平面・新南園	103
第111號	全面調查(2次)	SD27・36	平面・新南園	104
第112號	全面調查(2次)	SD36	平面・新南園 1	105
第113號	全面調查(2次)	SD36	平面・新南園 2	106
第114號	全面調查(2次)	SD28	平面・新南園	107
第115號	全面調查(2次)	SD29	平面・新南園	109
第116號	全面調查(2次)	SD33・34	平面・新南園	110
第117號	全面調查(2次)	SD内	出土遺物	110
第118號	全面調查(2次)	SD35	平面・新南園	111
第119號	全面調查(2次)	SD37・38	平面・新南園	111
第120號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 1	112
第121號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 2	113
第122號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 3	114
第123號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 4	116
第124號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 5	118
第125號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 6	119
第126號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 7	120
第127號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 8	121
第128號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 9	122
第129號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 7	125
第130號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 8	126
第131號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 9	126
第132號	全面調查(2次)	十坑	平面・新南園 10	131
第133號	全面調查(2次)	SX1・2・3・4・5・6	平面・新南園	132
第134號	全面調查(2次)	SX7	平面・新南園	134
第135號	全面調查(2次)	SX7	出土遺物	134
第136號	全面調查(2次)	SX7	出土遺物	135
第137號	土層部	遺物出土状況		136
第138號	土層部	C1区(拡大)	聯合状況	137
第139號	土層部	F11区(拡大)	聯合状況	137
第140號	築置部	遺物出土状況		139
第141號	包含層出土	土層部	遺物	140
第142號	包含層出土	出土遺物 1		142
第143號	包含層出土	出土遺物 2		143
第144號	SJ2出土層に埋没した土層部			149

写真1 井手上A遺跡の概観

第1表	周辺遺跡一覧	7		
第2表	埋没調査(1次)	調査結果表	8	
第3表	埋没調査(2次)	調査結果表	9	
第4表	埋没調査(2次)	4T出土土層	10	
第5表	埋没調査(2次)	川上石部 詳説表	10	
第6表	全面調査(1次)	方形周溝 1	出土遺物	16
第7表	全面調査(1次)	方形周溝 2	出土遺物	17
第8表	全面調査(1次)	SK1	出土遺物	17
第9表	全面調査(1次)	SD3	出土遺物	21
第10表	全面調査(1次)	十坑計測表		21
第11表	全面調査(2次)	Xa	層出土 石器計測表	31
第12表	全面調査(2次)	S51	出土遺物	35
第13表	全面調査(2次)	SJ1	出土遺物	37
第14表	全面調査(2次)	SJ1出土	石器計測表	39
第15表	全面調査(2次)	溝文土層	出土遺物	41
第16表	全面調査(2次)	S13	出土遺物	48
第17表	全面調査(2次)	S14	出土遺物	50
第18表	全面調査(2次)	S12	出土遺物	53
第19表	弥生土層	溝	出土土層	72
第20表	弥生土層	溝	出土土層	73
第21表	弥生土層	溝	出土土層	73
第22表	弥生土層	溝	出土土層	73
第23表	弥生土層	7号の溝	出土土層	74
第24表	弥生土層	溝式土層	出土土層	74
第25表	全面調査(2次)	SU1出土	土層部	77
第26表	全面調査(2次)	SU1出土	溝部	77
第27表	全面調査(2次)	SD1	出土遺物	81
第28表	全面調査(2次)	SD3	出土遺物	81
第29表	全面調査(2次)	SD6	出土遺物	86
第30表	全面調査(2次)	SD13	出土遺物	89
第31表	全面調査(2次)	SD16	出土遺物	94
第32表	全面調査(2次)	SD19	出土遺物	100
第33表	全面調査(2次)	SD25	出土遺物	101
第34表	全面調査(2次)	I層	土坑計測表	115
第35表	全面調査(2次)	II層	土坑計測表	115
第36表	全面調査(2次)	III層	土坑計測表	117
第37表	全面調査(2次)	SK101	出土土層	118

第38表	全面調査(2次)	SK136	出土土層部	118
第39表	全面調査(2次)	IV群A	土坑計測表	123
第40表	全面調査(2次)	IV群B	土坑計測表	127
第41表	全面調査(2次)	IV群C	土坑計測表	127
第42表	全面調査(2次)	IV群D	土坑計測表	129
第43表	全面調査(2次)	IV群E	土坑計測表	129
第44表	全面調査(2次)	IV群F	土坑計測表	129
第45表	全面調査(2次)	IV群G	土坑計測表	130
第46表	全面調査(2次)	V群A	土坑計測表	130
第47表	全面調査(2次)	V群B	土坑計測表	130
第48表	全面調査(2次)	V群C	土坑計測表	133
第49表	全面調査(2次)	SX7	出土土層部	135
第50表	全面調査(2次)	SX7	出土土層部	135
第51表	土層部	出土遺物		138
第52表	築置部	出土遺物		139
第53表	溝部	出土遺物		139
第54表	包含層出土	石器計測表		141

写真1 井手上A遺跡の概観

図版1	編年表(1次・2次)	
図版2	全面調査(1次)	方形周溝 1
図版3	全面調査(1次)	方形周溝 2 SD1 SK1
図版4	全面調査(2次)	SD2 SD3
図版5	全面調査(1次)	SK1 SK6 土層部 遺物出土状況
図版6	全面調査(2次)	弥生土層 弥生土層部 II
図版7	全面調査(2次)	弥生土層部 II
図版8	全面調査(2次)	弥生土層部 II
図版9	全面調査(2次)	SJ1
図版10	全面調査(2次)	SJ2
図版11	全面調査(2次)	溝文土層 I
図版12	全面調査(2次)	溝文土層 II
図版13	全面調査(2次)	溝文土層 III
図版14	全面調査(2次)	溝文土層 IV
図版15	全面調査(2次)	溝文土層 V
図版16	全面調査(2次)	溝文土層 VI
図版17	全面調査(2次)	溝文土層 VII
図版18	全面調査(2次)	溝文土層 VIII
図版19	全面調査(2次)	土坑 I
図版20	全面調査(2次)	土坑 II 横溝 横溝溝
図版21	全面調査(2次)	S51・3 SU1 土層部出土状況
図版22	溝文土層 I	
図版23	溝文土層 II	沟文土層 I
図版24	沟文土層 III	
図版25	沟文土層 IV	
図版26	沟文土層 V	
図版27	土層部・内堀土層部・築置部 I	
図版28	築置部 II・石部	

## 第I章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

鹿児島県農政部農地整備課（大隅地域振興局農林水産部曾於支所、以下「県農整備」）は、野井倉下段地区において経営体育成基盤整備事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財包蔵地の有無について鹿児島県教育委員会文化財課に照会した。

これを受けて鹿児島県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）と志布志市教育委員会文化振興課（当時 現志布志市教育委員会生涯学習課文化財管理室 以下「市文化財管理室」）が平成19年3月に埋蔵文化財分布調査を実施したところ、事業区内に遺物散布地として、井手上A遺跡・井手上B遺跡・上ノ段E遺跡・下段遺跡・和田上遺跡が存在することが判明した。

この分布調査の結果をもとに県農整備、県教育庁文化財課（以下「県文化財課」）、市文化財管理室は、埋蔵文化財の保護と事業の調査を図るため協議を行った結果、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下「確認調査」）を実施することとなった。

上記5遺跡の確認調査は県文化財課の指導・助言を受けて、志布志市教育委員会が調査主体となり、平成20年8月18日から11月7日に実施した。確認調査の結果、井手上A遺跡には事業区内に縄文時代早期・弥生時代中期・古墳時代の遺物包含層が存在することが判明した。

なお、井手上B遺跡・上ノ段E遺跡・下段遺跡・和田上遺跡の調査結果については志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）に述べているため、省略させていただきたい。

井手上A遺跡の調査結果を受けて、遺跡の取扱いについて県農整備、県文化財課、市文化財管理室で協議を行い、調査整備事業の推進に当たって、遺跡の現状保存は困難であると判断された箇所（調査対象面積14,800㎡）が存在するため、そのうち事業の進捗から緊急に調査を必要とする箇所2,000㎡を平成21年11月4日から平成22年2月4日にかけて全面調査（1次）を行い、本調査対象地内で詳細な遺跡範囲の把握を行うための確認調査（2次調査）を本調査と同時進行で行った。確認調査（2次）の結果、調査対象地の西側の一部（確認調査（2次）5T付近）は、遺物包含層・遺構とも確認されず、調査範囲の一部（800㎡）が縮小された。また、1T（確認調査2次 本調査K-9区付近）Xa層より打製石礫を含む遺物が確認され、この付近は開発による削平が行われるため、平成22年度においてK9区付近の縄文時代早期該当層の追加調査を行うこととなった。

平成22年度の全面調査（2次）は、志布志市教育委員会が調査主体となり、平成22年6月1日から平成23年2月23日まで行われた。その後整理作業を実施、平成23年度は報告書作成を行った。

### 第2節 調査の組織

調査主体者 志布志市教育委員会

（確認調査（1次） 平成20年度）

調査責任者	志布志市教育委員会	教 育 長	坪 田 勝 秀
調査調整	〃	生涯学習課長	小 辻 一 海
	〃	文化財管理監	米 元 史 郎
	〃	文化財管理室長	竹 田 孝 志
調査事務	〃	埋蔵文化財係長	小 村 美 義
	〃	主任 主 査	出 口 順 一 朗
	〃	主 査	大 塚 祥 晃
	〃	主 事 補	相 美 伊 久 雄
調査担当者	志布志市教育委員会	主任 主 査	出 口 順 一 朗

確認調査（1次）発掘作業員

有野エツ子 今西洋一 大迫 亨 岡村エチ子 加賀敏有喜 金子武信 桑畑 弘 小宇都智明 小平光子 小松範昭 園田信夫  
 嶺タケエ 田迫チズ 谷口チエ 谷口モギ 田淵孝夫 永野タミ 長野正富 永吉サエ 西 正和 服部富美子 服部昌之  
 原口ミツキ 平原和子 平原賢二 堀水久雄 馬原キヌ子 村久木マサ子 持永ハツ子 本宝富士男 森 勇 森 喜英 盛川忠義  
 森重容子 森山歌子 山角利行 山脇八重子 用皆サダ子 吉井弘子 吉元ユリ子

（以上 社団法人 志布志市シルバー人材センター）

（全面調査（1次）・確認調査（2次） 平成21年度）

調査責任者	志布志市教育委員会	教 育 長	坪 田 勝 秀
調査調整	〃	生涯学習課長	小 辻 一 海
	〃	文化財管理監	米 元 史 郎
	〃	文化財管理室長	竹 田 孝 志
調査事務	〃	埋蔵文化財係長	上 田 義 明

	＃	主任主査	出口順一朗
	＃	主査	大窪祥晃
	＃	主事	相美伊久雄
調査担当者	志布志市教育委員会	主任主査	出口順一朗

本調査（1次）・確認調査（2次） 発掘作業員

今西洋一 大迫 亨 岡村エチ子 岡村トミ子 金子武信 鎌下佳津子 鎌下スミエ 桑畑 弘 小平光子 小平洋子 立山ハツエ  
 谷ロチエ 谷ロモキ 田淵孝夫 西 正和 原山ミツエ 久平アヤ子 平原賢二 村久木マサ子 森 喜英 盛川忠義 森重容子  
 森山敬子 山脇八重子 用皆サダ子 吉井弘子 吉元ユリ子 若松孝雄

（全面調査（2次）） 平成22年度

調査責任者	志布志市教育委員会	教 育 長	坪 田 勝 秀
調査調整	＃	生涯学習課長	津 曲 兼 隆
	＃	文化財管理監	米 元 史 郎
	＃	文化財管理室長	竹 田 幸 志
調査事務	＃	埋蔵文化財係長	上 田 義 明
	＃	主任主査	山 口 順 一 朗
	＃	主 査	大 窪 祥 晃
	＃	主 査	相 美 伊 久 雄
調査担当者	志布志市教育委員会	主任主査	出口順一朗
	＃	主 査	相 美 伊 久 雄

本調査（2次） 発掘作業員

有川金男 大迫亨 岡村エチ子 岡村善博 小野典子 鎌下佳津子 鎌下スミエ 上山千春 北村優子 桑畑弘 小平洋子  
 小松範昭 迫口久美子 立山ハツエ 谷ロチエ 谷ロモキ 田淵孝夫 徳福モミ子 徳島敏光 長野正富 永吉サエ 西正和  
 林茂毅 原口ミツエ 東村一昭 久平アヤ子 平原賢二 別府清治 岡原キヌ子 三浦正人 村久木マサ子 森喜英 盛川忠義  
 森重容子 森山敬子 山脇八重子 用皆サダ子 吉井弘子 吉元ユリ子 若松孝雄

（報告書作成） 平成23年度

調査責任者	志布志市教育委員会	教 育 長	坪 田 勝 秀
調査調整	＃	生涯学習課長	米 元 史 郎
	＃	文化財管理室長	竹 田 幸 志
調査事務	＃	埋蔵文化財係長	上 田 義 明
	＃	主任主査	山 口 順 一 朗
	＃	主 査	大 窪 祥 晃
	＃	主 査	相 美 伊 久 雄
調査担当者	志布志市教育委員会	主任主査	出口順一朗
	＃	主 査	相 美 伊 久 雄

整理作業員：篠原順子・山元弓枝（市教育委員会生涯学習課文化財管理室臨時職員）

第3節 調査の概括

起 因 事 業 名：経営体育成基盤整備事業 野井倉下段地区

起 因 事 業 者：鹿児島県農政部

造 跡 名：井手上八造跡

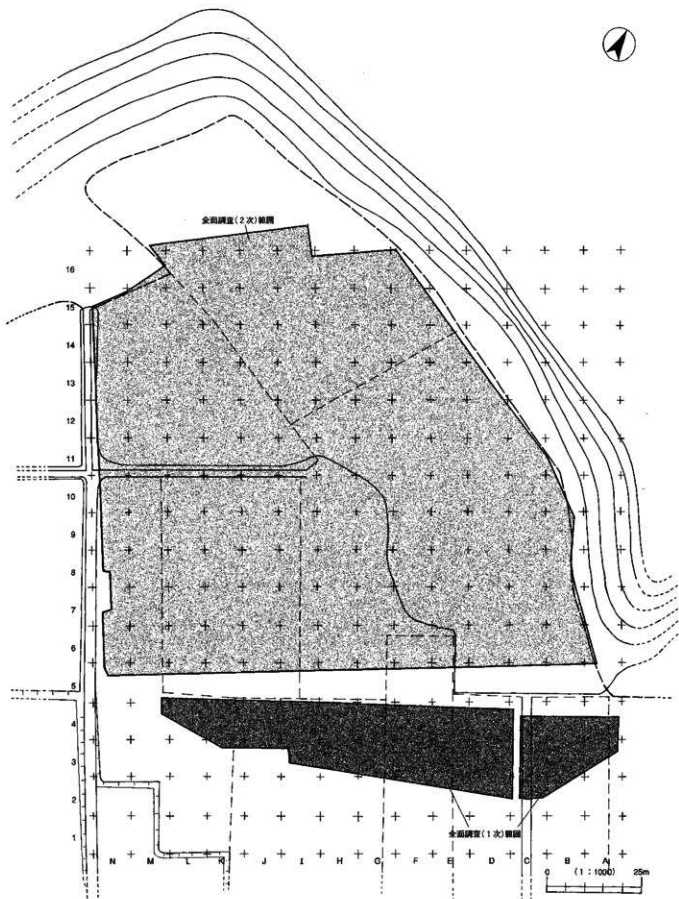
所 在 地：鹿児島県志布志市有明町野井倉字井手上

調 査 面 積：1次 2,000㎡（表而積）

2次 12,000㎡（表下面積）

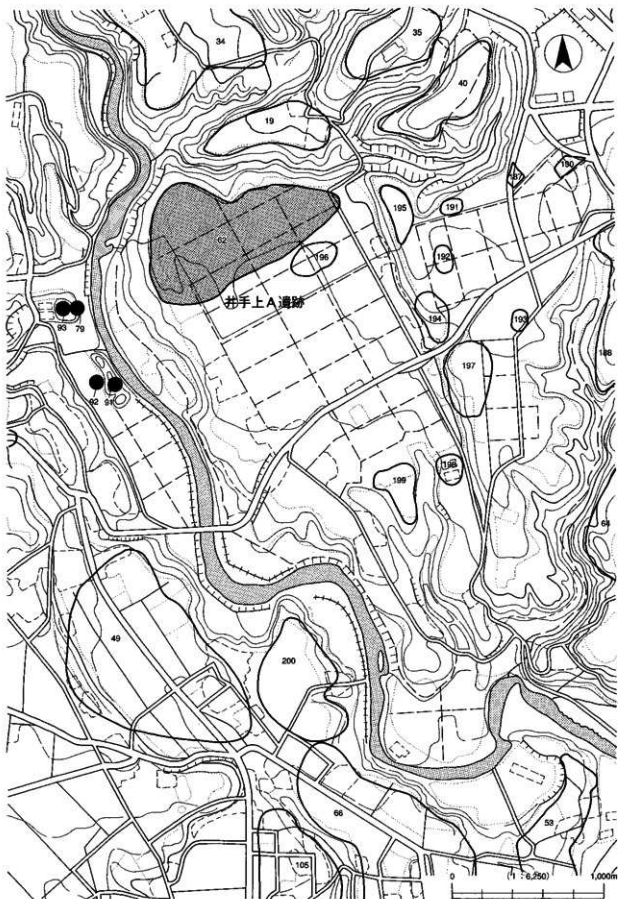
調 査 期 間：1次 平成21年11月4日～平成22年2月4日（58日）

2次 平成22年6月1日～平成23年2月23日（149日）



第1図 全面調査(1次・2次) グリッド設定図





第2圖 井手上A遺跡付近 遺跡位置圖

## 第II章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 志布志市の概要

志布志市は鹿児島県大隅半島の東部、志布志湾奥のほぼ中央に位置し、東部は宮崎県串間市、西部は大崎町、北部は曾於市と境をなしその一部は宮崎県都城市と接し、総面積は290km<sup>2</sup>であり、大崎町内に1.02km<sup>2</sup>の飛地を有している。

### 第2節 地形的環境の概要

市周辺の地形は、全体として志布志湾に向かって緩やかな勾配となっており、平野部が極端に少なく、標高100m付近から、大きく南部の台地と北部の山岳・丘陵地帯に二分される。

今回の調査対象となった有明地区南部の台地は安楽川・菱田川・田原川・肝属川などの緒川によって開析される標高約20～100mの火山噴出物の台地（シラス台地）が広がり、「原（ばる）」と表現される比較的平坦な台地が見られる。この台地を南北に貫流する河川に菱田川があり、この沿岸に河岸段丘が形成されている。この河岸段丘は三段階の段丘に大別され、台地上においては地下水位がシラス下部の深い位置にあり、第三段丘面は集落等の形成が困難で開田以前まではほとんど利用されず、現在は明治から昭和にかけて先人たちの開墾による野井倉開田・蓬原開田が拓がり、広域に跨る稲作地帯となっているが、シラス下部成いは降下経石層を流動する浅層地下水の露頭される段丘面の末端（崖脚）からの自然湧水の有無が集落立地の重要な因子であった。

また有明地区北部から東部にかけては標高100mのあたりから山岳地帯となり、志布志市内においては富田山（標高520m）をはじめ、霧岳（標高408m）、御在所岳（標高530m）などの山岳・丘陵地帯が広がる地域で、中世層を基盤として準平原化の後、周囲の台地が形成されたものといわれ、山地の開析は相当に進み、火山灰台地面を除いてほとんど平坦面を残していないため、起伏の多い丘陵が連なっている。そのため山岳・丘陵地帯の集落はこれまで谷間に点在していた。

井手上A遺跡は市南部の火山灰台地の菱田川沿いの東岸の河岸段丘の台地上にあり、菱田川と安楽川に挟まれたこの台地は通称「野井倉原（のいくらばる）」と呼ばれる。本遺跡は野井倉原の西端にあり、菱田川東岸の標高約80mの第2段丘面に立地する。

### 第3節 遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡周辺には菱田川の沿岸を中心にして多数の遺跡が存在する。（第3図）

第2段丘面の対岸には、市指定史跡である馬場地下式横穴〔69-86〕が存在する。この地下式横穴は昭和37年10月、道路工事中に道路掘削で発見されたもので、3基確認され玄室から鎌身・鉄剣・人骨等が出土した。さらに平成11年度にも地下式横穴が確認された対面の掘削工事中に、堅柱と見られる遺構が6基確認され、付近にも同様の地下式横穴が散在している可能性が指摘されている。また中世遺構として、馬場地下式横穴の東側に菱田川の西岸沿いに中世山城である蓬原城跡〔69-91〕、金丸城跡〔69-79〕、さらにその南側には片平城跡〔69-80〕が存在する。

さらに、本遺跡周辺の埋蔵文化財発掘調査の成果として、本遺跡を含む同台地上の第2段丘面南側、標高約30m付近に立地する上苑A遺跡〔69-165〕は、平成16年に農道整備事業による本調査を行い、縄文前期・縄文晩期・弥生中期・古墳・古代・中世の多時期に渡る遺物・遺構が確認され、特に段丘面の西端部に古墳時代の堅柱住居群と竈貫式に比定される土器及び在地性に富む成川式土器が共存する形で確認されている。

#### 【参考文献】

出口順一朗・東 徹志・中水 忍・中村直子・内山伸明 2008 『上苑A遺跡・穴倉B遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（1）志布志市教育委員会

有明町郷土史編纂委員会 1980 『有明町誌』有明町教育委員会



第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
09-6	夜籠A	野井倉字夜籠	台地	縄文(早-晩)	前半式、貝類・骨文	旧名:夜籠A
09-7	夜籠B	野井倉字夜籠・榎木	台地	縄文(早-晩)・弥生(前)	打製石斧・半砂式	旧名:夜籠B
09-12	高台	野井倉字高台・前田・下段	台地	縄文(中-晩)・弥生	土器・石籠	旧名:上高台
09-21	内段B	野井倉字内段	台地	縄文(晩)・弥生	土器類	旧名:内段A
09-46	横井	野井倉字横井・日輪・山ノ上	台地	弥生(中)	土器・石籠	旧名:平山
09-49	大瀬A	野井倉字大瀬・大瀬・小池	台地	縄文(晩)・弥生(中)・古墳	出水式、打製石斧	旧名:大瀬原・大瀬・大久保・大瀬
09-52	横道	野井倉字横道・坪山・横道	台地	弥生(前)・古墳	石籠・土器類	旧名:坪山
09-53	上段	野井倉字上段・菅・沼	台地	弥生(前)・古墳	石籠・土器類	旧名:上段
09-61	野井	野井倉字野井・谷・畑	台地	弥生	土器	旧名:野井
09-63	古井	野井倉字古井・野井	台地	縄文(晩)・弥生	中層式石籠・打製石斧	旧名:下野井倉
09-64	上段A	野井倉字上段・西原	台地	弥生・古墳	土籠・土器類	
09-66	杜明	藤原字杜明・菅ノ枝・大瀬・杖	台地	弥生(前)・縄文(早-晩) 弥生(中)・古墳・古代 中世・近世	イイナカノ・銅片・半山(山)式・菅原式・右 京式・貝類・骨文・山ノ上式・成川式・打 製石籠・横道・土器類・土籠器類・土籠 器類・石籠・石籠丁・製籠土器・自磨・青 銅・磨石(磨石)・石籠丁・石籠丁・石籠 器類・石籠器類・石籠器類・古墳・溝	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)-(11)
09-69	片平古墳	藤原字(杜明)・逆水	低地	古墳	円墳	旧名:片平
09-78	内段A	藤原字内段・山ノ上川原	台地	弥生	土器類	
09-79	金丸稲跡	藤原字神原	丘陵	中世(鎌倉)	溝槽・空堀 150m×200m	
09-80	片平跡	藤原字下永流・杜明	丘陵	中世(平安京)	溝槽 150m×200m	旧名:片平
09-82	大代	野井倉字大代・横道・大瀬・平	台地	縄文・古代	土籠・土器類	旧名:大瀬
09-83	平山	野井倉字平山・古川	台地	古代・中世	土器類・青銅	旧名:平
09-86	両瀬地下式瓦穴	藤原字小池・内城	台地	古墳	銅・金・人骨	両瀬地下式4. 1 瓦 穴名:両瀬
09-90	下段B	野井倉字下段・菅	台地	弥生	土器	
09-91	藤原跡跡	藤原字神原・出水	台地	中世(平安京)	溝槽・空堀・空堀・上層 180m×200m	両瀬地下式4. 4. 1 瓦 穴
09-92	高ノ上段内段跡	藤原字神原・出水	低地	中世(鎌倉)・近世	土籠槽・石籠・石籠	両瀬地下式4. 4. 1 瓦 穴
09-93	藤原跡跡跡跡	藤原字神原	台地	中世(鎌倉)・近世	土籠槽・石籠・石籠	両瀬地下式4. 4. 1 瓦 穴
09-104	上段	野井倉字上段・高台	台地	縄文(中-晩) 弥生(中)・古墳	前半式・神籠式・壺ノ神式・短針貝等文・黒 川式(海鏡)・東渡式・壺ノ穴作居・刻 立柱建物	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
09-105	杖	藤原字杖・外堀	台地	縄文(早-晩) 弥生(早-中)・古墳・近世	前半式・石籠式・下割式・壺ノ式・神籠 式・短針貝等文・壺ノ石籠・石籠・山 ノ上式・成川式・加藤式・壺ノ穴作居・大 石籠・刻立柱建物・柱頭・溝	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
09-114	横道古墳	藤原字人谷・金丸	台地	古墳	円墳	
09-116	横道	藤原字横道・人谷・金丸	台地	縄文(早-晩)・弥生(中) 古墳・古代	黒川式・山ノ上式・成川式・内蔵土器類・土 器類・土籠	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
09-122	藤原跡	藤原字春日原	台地	縄文・古墳		
09-124	天神ノ尾	伊藤町天神ノ尾	台地	縄文		
09-126	平A	野井倉字平山・下戸	台地	古墳		旧名:平
09-143	山ノ上	藤原字山ノ上	台地	古墳		旧名:平山
09-144	日輪	藤原字日輪・藤井・内城・小池	台地	弥生・古墳		
09-150	厚原古	藤原字厚原古・大迫・横道	台地	弥生(前)・縄文(中)・弥生 古墳	銅片・土器類・成川式・壺ノ穴作居	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
09-157	木倉	野井倉字木倉・田尻	台地	縄文・古代	土器類	
09-161	上段B	野井倉字上段・下段・上段上	台地	古代	土器類	旧名:大瀬・大代
09-162	下段A	野井倉字下段	台地	古代	土器類	
09-163	中牟田	藤原字中牟田・藤原	低地	古墳・古代	成川式・横道器類・土器類・古代東渡器類・壺 穴住居	旧名:大牟田
09-164	田尻下	野井倉字田尻下	台地	古代	土器類	
09-165	上段A	野井倉字上段・上高台・畑尾	台地	縄文(前-晩)・弥生(中)・古 代・中世	管溝式・黒色磨石土籠・貝類・骨文・厚目 貝等文・弥生中層土籠・山ノ上式・成川式・ 土器類・横道器類・古代東渡器類・壺穴住居 器類・銅片・壺穴器類・壺穴住居・壺穴土籠	古布古市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
09-166	横道	藤原字横道・竹ノ尾	台地	縄文(晩)・古墳		旧名:中野・内段B
09-182	横	野井倉字横・谷田・横道	台地	縄文・古墳		
09-183	中瀬	野井倉字中瀬・横道	台地	弥生・古墳	土籠・土器類	
09-184	東原	野井倉字東原	台地	弥生・古墳	土籠・土器類	
09-185	西原A	野井倉字西原・東原	台地	弥生	土器	
09-186	西原B	野井倉字西原・中原	台地	弥生・古墳	土籠・土器類	
09-187	上原	野井倉字上原・東原・西原	台地	弥生・古墳	土籠・土器類	
09-188	中原	野井倉字中原・西原	台地	弥生	土器	
09-189	西原道A	野井倉字西原道・上ノ段	台地	古代	土器類	
09-190	西原道B	野井倉字西原道	台地	縄文(晩)・弥生	土器	
09-191	上ノ段A	野井倉字上ノ段	台地	弥生	土器	
09-192	上ノ段B	野井倉字上ノ段	台地	弥生	土器	
09-193	上ノ段C	野井倉字上ノ段	台地	古代	土器類	
09-194	上ノ段D	野井倉字上ノ段・字中	台地	古代	土器類	旧名:井手山
09-195	上ノ段E	野井倉字上ノ段	台地	弥生	土器	旧名:井手山
09-196	下段	野井倉字下段	台地	弥生・古墳	成川式・土籠	
09-198	下段	野井倉字下段	台地	弥生・古墳	成川式・土籠	
09-199	内段上	野井倉字内段上・下段	台地	弥生(前)・縄文(中)・弥生 古墳	磨石刀・磨石器・土籠・土器類・石籠	
09-200	大瀬跡	藤原字大瀬・井手ノ上	台地	古墳		

### 第三章 確認調査の概要

#### 第1節 確認調査（1次）の概要

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するために、事業対象区域内の任意の地点に16トレンチを設定して実施した。トレンチの規模は2m×4mを基調とし、状況に応じて随時調査面積を拡大、縮小して調査を行った。調査員立ち会いの下、表土及び火山灰層であるIX層（IX a層・IX b層・IX c層を含む アカホヤ層）、XI層（サツマ火山灰層）を重機により除去、その他の層は人力による掘り下げ作業を実施した。包含層の残存状況は全体的に良好であったが、一部で削平が見られた。各トレンチの調査面積、出土・検出状況等の概要は下表のとおりである。

第2表 確認調査（1次） 調査結果表

トレンチ	規模 (m)	調査 表面積	遺物	遺構	包含層までの 深さ(m)	備考
1	2.0×4.0	8.0㎡	無	無	—	II層一部削平
2	2.0×4.0	8.0㎡	無	無	—	VI層まで削平 VII層も一部削平
3	2.0×3.9	7.8㎡	無	無	—	IIIb層まで削平 IV層も一部削平
4	2.1×4.1	8.61㎡	IX c層 破砕礫	無	IX c層 1.18	V層まで削平 VI層も一部削平
5	1.9×3.8	7.22㎡	III a層 弥生中期土器	無	III a層 0.90	II層まで削平 III a層も一部削平
6	1.9×4.1	7.79㎡	無	無	—	III層まで削平 IV層も一部削平
7	2.1×5.3	11.13㎡	III a層 入来式土器 弥生中期土器	無	III a層 0.17	II層まで削平 III a層も大きく削平が見られる。
8	1.5×4.0	6.0㎡	無	無	—	IIIb層まで削平 IV層も一部削平
9	2.0×4.0	8.0㎡	III a層 成川式土器 土師器・陶磁器 土坑1棟土 成川式土器・土師器 磨石・軽石製品	III b層上面 土坑 1基	II層 0.20	II層一部削平
10	2.0×4.2	8.4㎡	IX c層 石鏝?・破砕礫	無	IX c層 1.46	II層大きく削平
11	2.1×4.0	8.4㎡	無	無	—	IIIb層まで削平 IV層も一部削平
12	2.2×4.5	9.9㎡	無	無	—	II層まで削平 III b・IV層も大きく削平
13	2.1×3.9	8.19㎡	無	無	—	II層一部削平
14	2.0×3.9	7.8㎡	土坑2棟土 成川式土器・台石	III b層上面 土坑 1基	III a層 0.17	II層一部削平
15	2.0×4.1	8.2㎡	VII・VIII層 成川式土器・破砕礫	無	IV層 0.43	IV層まで削平 V層も大きく削平
16	2.0×4.0	8.0㎡	無	無	—	III-a層まで削平 III-b層も大きく削平

調査の結果、調査対象区域の北及び北西付近（5・7・9・14 T）に弥生時代中期・古墳時代の遺物包含層が確認され、9・14 Tでは土坑も2基確認されている。また15 Tでは層位が不自然ではあるが、VII・VIII層より古墳時代相当の成川式土器が確認され、層の落ち込み、或いは遺構に伴う遺物であることが考えられる。また9・10 Tからは縄文時代早期相当の層位から石鏝及び破砕礫が確認され、台地の北側の辺縁に縄文時代早期の遺跡が存在することが考えられる。

#### 第2節 確認調査（2次）の概要

確認調査（2次）は、事業対象区域内の遺跡の範囲を詳細に把握するために、事業対象区域内に幅2mのトレンチを

縦方向に長く延ばして、5箇所の特レンチ（以下「T」）を設定して、調査を実施した。確認調査（1次）と同様に表土及び火山灰層であるIX層（IX a層・IX b層・IX c層を含む アカホヤ層）、X I層（サツマ火山灰層）を重機により除去、その他の層は人力による掘り下げ作業を実施した。包含層の残存状況は全体的に良好であったが、一部で削平が見られた。

第3表 確認調査（2次） 調査結果表

トレンチ	調査面積 (㎡)	遺物	遺構	包含層までの 深さ(m)	備考
1	85.2	III a層 弥生中期土器 X a層 石鏃・破砕礫 炭化物	VI b層上面 土坑	III a層 0.12	II層まで削平 III a層一部削平
2	612.5	III a層 弥生中期土器 土師器 VI a層 磁石	III b層 土坑・溝状遺構 VI b層 土坑	III a層 0.36	II層一部削平 場所によりIII a層まで削平
3	69.0	III a層 弥生中期土器 X a層 石鏃・破砕礫 X b層上面 炭化物	III b層 土坑 溝状遺構 X b層 土坑	III a層 0.22	II層まで削平 III a層一部削平 場所によりIII b層まで削平
4	215.44	III a層 弥生中期土器	IV層上面 土坑・溝状遺構	III a層 0.18	II層まで削平 III a層一部削平
5	20.37	無	無	—	IV層まで削平 V層も大きく削平

確認調査（2次）の調査結果から、2・3・4 Tの、最浅部で地表より20cm前後の所から弥生時代中期の遺物が出土し、その下層から全体プランは確認できないものの相当数の遺構が確認された。このことにより突出した台地の辺縁に弥生時代中期の遺物包含層及び遺構が広がっている可能性が想定された。また1・3 Tからは縄文時代早期相当の焼礫・礫が多量に確認され、台地の辺縁の北端に縄文時代早期相当の集石・敷石状遺構を含む遺物包含層が広がっている可能性があることも考えられた。

### 第3節 確認調査（1次・2次）の層位

確認調査（1次・2次）時の標準土層は下記のとおりである。

層位	層色	土色・土質
第I a層	10YR4/1 褐灰色	表土層。層中に白色テフラ（N9/0 直径2mm程度）を含む硬質土。
第I b層	10YR3/1 黒褐色	通称：バン。I a層に様子は似るが、硬く締まった硬質層。
第II層	10Y2/1 黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない黒色土。
第III a層	2.5Y3/2 黒褐色	層中に微細な淡黄色粒子（5Y8/3 直径1～2mm程度）を多含する締まった層。弥生時代・古墳時代の遺物包含層である。
第III b層	7.5Y3/1 オリーブ黒色	層の様子はIII a層に似るが、より締まる層。所によりIII a・III b層の分層が困難な部分もある。
第IV層	10Y2/1 黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない黒色土。層にわずかに光沢が見られる。
第V層	7.5Y2/1 オリーブ黒色	層の様子はIV層に似るが、より締まる層。光沢は見られない。
第VI a層	10Y3/1 オリーブ黒色	層中に疎らに橙色バミス（7.5YR6/6 直径1～2mm程度）を含む締まった層。
第VI b層	10Y3/1 オリーブ黒色	層の様子はVI a層に似るが、含まれるバミスが多含な層。場所により含有されるバミスの濃度が異なる。

第VII層	2.5Y2/1 黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない黒色土。
第VIII層	5Y3/1 オリーブ黒色	通称 池田降下軽石層。黄褐色テフラ (10YR/6 直径5~20mm程度) が含まれ、やや粘性を持ち光沢のある硬く締まった層
第IX層	10YR6/6 明黄褐色	通称 アカホヤ層。層の下位に5~10mm大の明黄褐色テフラ (10YR/7/6) が層を成す硬く締まった層。
第X a層	5Y3/1 オリーブ黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない硬く締まった層。縄文時代早期の遺物包含層である。
第X b層	2.5Y3/1 黒褐色	層中に明黄褐色バミス (10YR6/8 直径1~2mm程度) を含む硬く締まった層。縄文時代早期の遺物包含層である。
第X c層	2.5Y3/1 黒褐色	X b層に層の様子が似るが、層中のバミスの直径が大きくなり (直径3~5mm程度)、比較的硬い層。
第X d層	2.5Y3/1 黒褐色	X c層に比べて層中のバミスの含有が最も多く、かなり硬化した層。トレンチによりX c層との分層が困難な場合もある。
第X e層	2.5Y3/2 黒褐色	層に含まれるバミスの量が少なくなり、層色も比較的淡くなる締まった層。
第XI層	10YR5/3 にぶい黄褐色	通称 サツマ火山灰層。硬化して締まった層。層中に黄色テフラ (2.5YR/6 直径1~10mm程度) が混ざり、ブロック状な塊が見られる。
第XII層	7.5YR6/3 にぶい褐色	層に滲りが見られ、粘性がある層。
第XIII層	7.5YR6/4 にぶい褐色	層にかなり強い粘性をもち、層中に小礫 (直径10mm大) が若干見られる。
第XIV層	10YR6/6 明黄褐色	XIII層に比べて比較的粘性が弱い、比較的小礫 (直径10mm大) を多く含む。
第XV層	7.5YR6/6 褐色	粘性が弱い、若干の粘りがある。層色も淡くなり、小礫が多含。
第XVI層	7.5YR6/8 褐色	シラスの2次堆積層と思われ、固く締まり、粘性もなくサラサラとした層。

#### 第4節 出土遺物

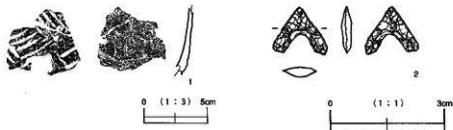
1は確認調査(2次)4TVII層で出土した管状式土器深鉢の胴部である。外面胴部に縦位の浅い沈線文を施し、内面に輪模みの接合痕を残す。2は確認調査(2次)1TXa層で出土したチャート製の打製石鏝である。挾入部が深く、比較的小型である。

第4表 確認調査(2次) 4T出土土器

発掘番号	遺物番号	発掘層	出土土層(遺物)	形状	用途	分類	土質				色 質 上層:片層 下層:内層	焼文・刷目 上層:片層 下層:内層	寸法 (cm)			備考	
							砂	粉	粘	石			口径	高さ	底径		
第4表	1	10Y1-10Y2	4T VII層	深鉢	炊器	管状式	○	○				10YR6/6 10YR6/6	沈線文			2.2	

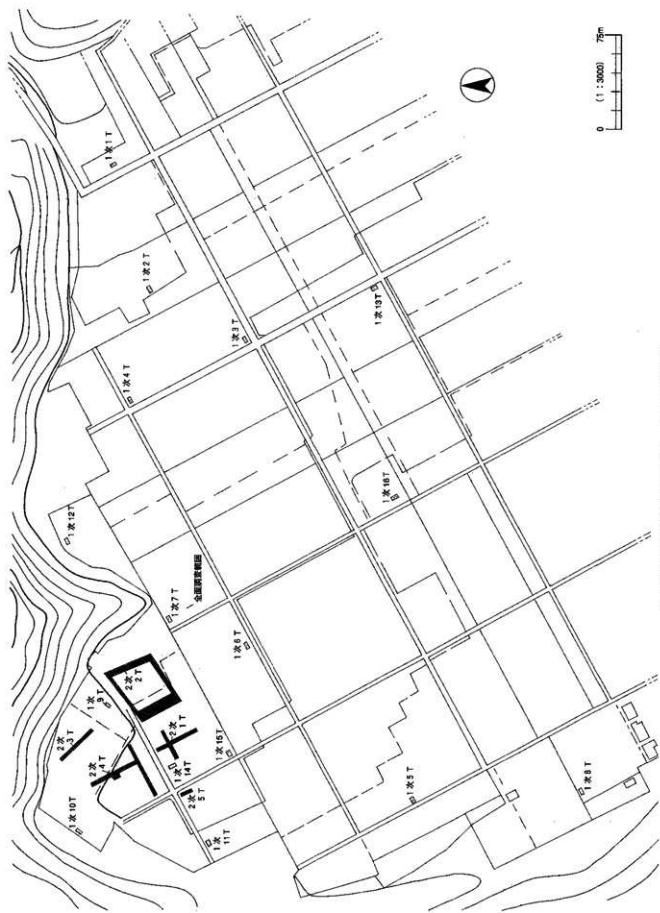
第5表 確認調査(2次) 出土石器 計測表

発掘番号	遺物番号	発掘層	出土土層(遺物)	器種	石質	寸法 (cm・g)				備 考
						最大長	最大幅	最大厚	重量	
第4表	2	10Y1	1TX a層	打製石鏝	チャート	1.25	1.4	0.25	0.2	25g



第4図 確認調査(2次) 出土遺物





第5図 株式会社(1次・2次) トレンチ位置図

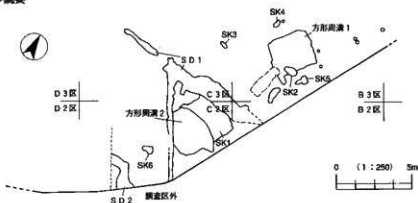
## 第IV章 全面調査（1次）の概要

### 第1節 全面調査（1次）の方法

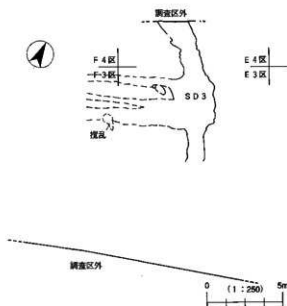
調査は、開場整備工事の工区によって調査対象区域を「A区」・「B区」に大別し、調査対象区域の東側（A区側）から行った。今回の本調査は工事と同時進行で行われ、調査が完了した区は随時工事に着手する手法で行われた。そのため、大別した「A区」・「B区」をさらに「A-1区」・「A-2区」、「B-1区」・「B-2区」…「B-12区」と便宜的に細分化し、工事の進捗に合わせた区をさらに設定した。表土・火山灰層（IX・XI・無遺物層（VIb・VII層）を調査員立会いの下、重機で除去し、II～VIa層、VIII層、Xa～e層を人力による掘り下げを行った。遺構の検出は、火山灰層直上のみだけでなく、調査の過程で層位毎の遺物出土量から判断し、随時遺構検出も行った。従って遺構検出は、IIIb層・VIb層・VIII層・Xb層・XI層で行った。

### 第2節 全面調査（1次）の概要

本調査の実施にあたり、表土の20cm部分は開場整備に伴う表土の確保のために、調査員立ち会いの下、工事業者が表土剥ぎを行った。以下の表土層及び無遺物層、火山灰層は調査員立ち会いの下、重機で慎重に削削した以外は、全て作業員による掘り下げを行った。層の残存状況はA～C4区は良好であったが、A～C2・3区、DE3・4区はIIIa層の一部まで削平を受け、F3・4区より西側はVIII層まで削平を受けていた。遺物は主に入来I式、入来II式土器を含む弥生時代中期前半相当の土器がIIIa層から出土し、II層からもわずかに遺物が確認された。VIb層上面で検出された遺構として、B3・D2区より方形竪溝2基、BC2及びC3区からSD2基、EF3・4区よりSD1基が、その他土坑が6基確認された。

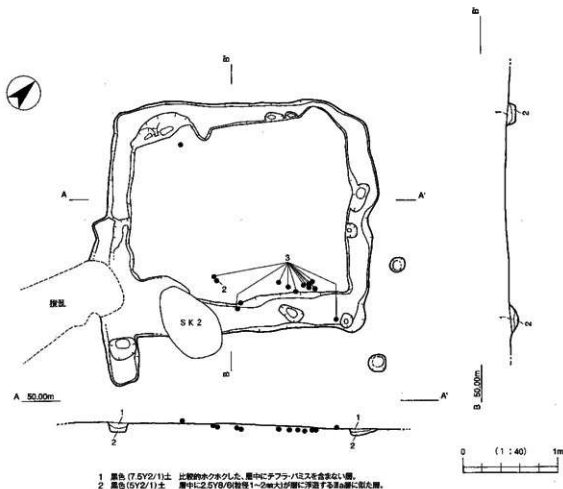


第6図 全面調査（1次）VIb層上面 遺構検出状況図 1



第7図 全面調査（1次）VIb層上面 遺構検出状況図 2





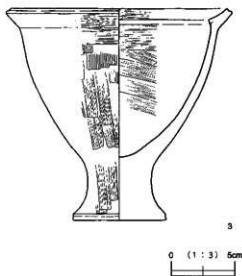
第9図 全面調査(1次) 方形周溝1 平面・断面図及び遺物出土状況図

#### 第4節 全面調査(1次)の調査成果

##### 1 方形周溝

##### ① 方形周溝1 (第9図)

方形周溝1はB3区で検出された。検出層はVIb層である。この遺構は表土を除去した直下で確認され、検出した段階では方形に巡る周溝部分と、その中心にやや硬化した混じりの見られる層(以下「硬化層」)が検出された。遺構の長軸は2.84m、短軸は2.42mと隅丸長方形のプランを持つ。長軸は南東-北西軸である。南端には周溝の張り出し部分がある。周溝の幅は一定ではなく、極端に狭くなる場所もあるが、概ね0.26~0.32mの横幅を持つ。周溝部分から遺物は確認出来なかったが、周溝内の硬化層の南東端から充実高台をもつ小型の壺(3)が集中して出土した。この遺物は、硬化層埋土内にまで埋もれていた。硬化層上面で検出を行ったが、柱穴等は確認出来なかった



第10図 全面調査(1次) 方形周溝1 出土遺物

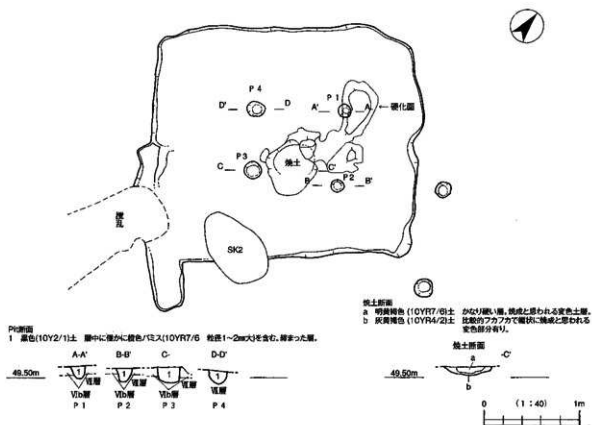
ため、周溝・硬化層の掘り下げを行ったところ、遺構のほぼ中央に0.6×0.52mのほぼ楕円形の焼土痕と思われる変色部位とその北東際に新たな硬化面が確認できた。(第11図)さらに、この硬化面を除去した後、床面の再検出を行ったところ、柱穴らしい円形プランが4基確認できた。

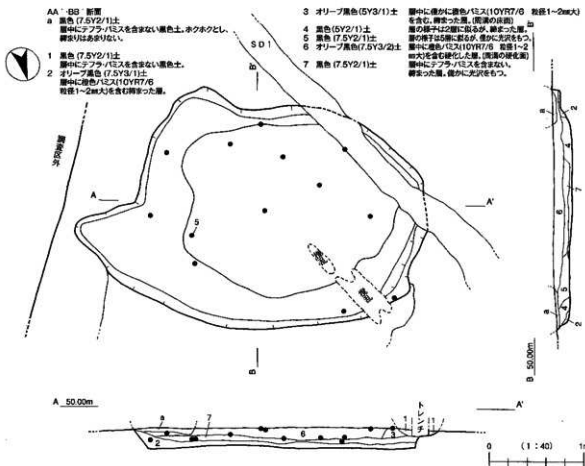
これらの結果から方形周溝1は堅穴建築物の可能性が高く、周溝と思われた部分は床面がやや深くなった部分が検出段階で溝状に見えたものであることがわかった。また出土結果から弥生時代中期後半の遺構であることが考えられる。

なお、方形周溝1の焼土付近で出土した炭化物2点を、加速器質量分析法(Accelerator Mass Spectrometry)による放射性炭素年代測定を実施した結果、BC170~AD30、BC340~320、210~40の年代値が得られた。詳細については第VI章に述べる。

### 方形周溝1出土遺物

3は甕である。一部に欠損は見られるものの、ほぼ完形である。口縁部内面屈曲部に張出しが肥厚気味に突出し、屈曲した口縁部は平坦部が短く延びる。また口唇端部は明瞭な窪みを形成する。胴部はやや急に窄まるように内湾し、底部は充実高台である。これらのことから、この遺物は黒髮式土器の特徴に入来Ⅱ式土器の特徴が重なった遺物であると言え、入来Ⅱ式土器の新段階に位置づけられると思われる。





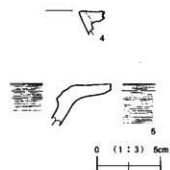
第12図 全面調査(1次) 方形周溝2 平面・断面図及び遺物出土状況図

第6表 全面調査(1次) 方形周溝1 出土遺物

調査 番号	番号	図記 番号	出土区 画土層 (図記)	種類	形状	分類	形 状					色 質 上段 : P4d 下段 : P4d	出土・埋没 上段 : P4d 下段 : P4d	数量 (個)		備考	
							石 ・ 土	瓦 ・ 瓦	土 ・ 器	土 ・ 器	土 ・ 器			土 ・ 器	土 ・ 器		土 ・ 器
第14図	X	71	94区遺構 E1層 300-302 303 300-307	瓦	2角	入土直上土 層(埋没)	○	○					埋没・ハリス 土層・2層分ナブ	27.0	2.9	28.9	埋没・ハリスの埋没も 埋没・ハリスの埋没も 埋没・ハリスの埋没も

② 方形周溝2 (第12図)

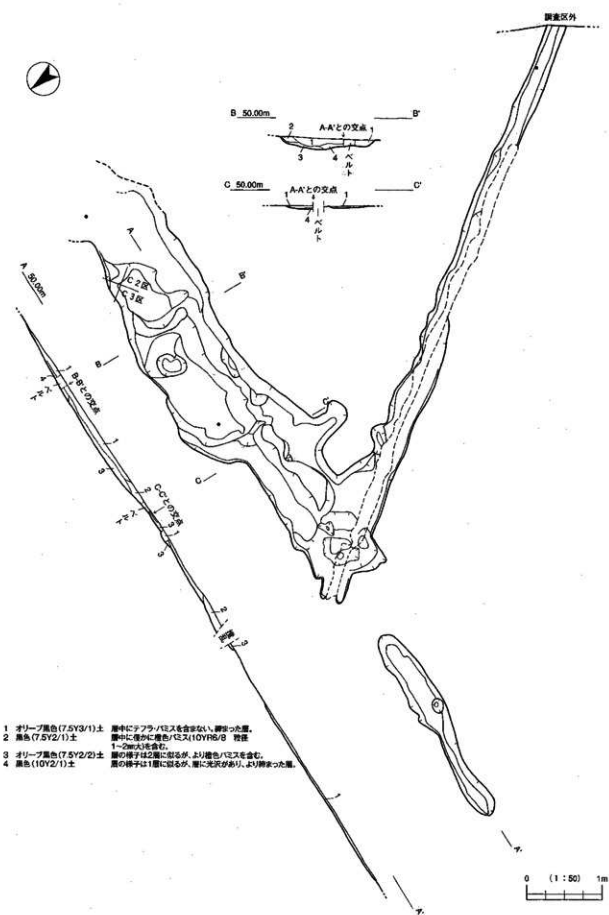
方形周溝2はC2区で検出された。検出層はVIb層上面である。この遺構も方形周溝1と同様に表土を除去した直下で確認され、検出した段階ではやや楕円に近い方形に巡る周溝部分と、その中心にやや硬化層が検出された。SD1に切られ、SK1を切っている。遺構の長軸は2.75m、短軸は2.24mとやや形の崩れた隅丸長方形のプランを持つ。長軸は南東-北西軸である。東端には周溝の張り出し部分がある。周溝の幅は一定ではなく、極端に狭くなることもあるが、概ね0.21~0.59mの幅を持つ。最初検出された硬化層上では柱穴等は確認出来なかったため、周溝・硬化層の掘り下げを行ったが、柱穴等の建物の付属遺構は確認できなかった。遺物は小片が多く、遺構内に疎らに出土し、埋没段階での流入したものと思われ、床着の遺物は確認できなかった。埋上上位において口唇部に浅い刻目をもつ



第13図 全面調査(1次) 方形周溝2 出土遺物







- 1 オリーブ黒色(7.5V3/1)土 層中にタフアラ/リスを含まない、硬かった層。
- 2 黒色(7.5V2/1)土 層中に僅かに褐色/リス(10YR8/8) 粒状 1-2mm大)を含む。
- 3 オリーブ黒色(7.5V2/2)土 層の様子は大層になるが、より褐色/リスを含む。
- 4 黒色(10Y2/1)土 黒の粒子は1層に似るが、層に欠片があり、より硬かった層。

第15図 全面調査(1次) SD1 平面・断面図

## 2 溝状遺構

全面調査（1次）で確認された溝状遺構は3基確認された。

調査区内は、近年実施された構造改善により、場所により遺物包含層が削平を受け、VIb・VII層まで削平を受けているところが見受けられた。そのため、遺構深度により検出面から遺構床面までが比較的浅い調査結果となった。以下各溝状遺構（以下「SD」と表記）の様子を順次述べてい。

### ① SD1（第15図）

SD1はBC2・3区から検出された。検出層はVIb層上面である。遺構は南東から北西軸に直線的に延びる部分（長軸部分）と、途中から北北東から南南西に分岐するように直線的に延びる部分（分岐軸）、さらに長軸部分と同軸に並ぶ土坑状に検出された部分とに検出された。長軸部分の南東端は、途中から検出が判然としなかったため、削平により遺構が消滅したと思われ、分岐軸の南南西端は調査区外に延びる。また方形周溝2とSK1を切る。長軸部分の遺構幅は1.24mでその幅は多少の蛇行が見られるものの、長軸部分全体に維持されている。分岐部分の遺構幅は、南南西端から北北東に延びるに従い、やや広がる様相を見せ、幅狭なところで0.3m、最も幅広なところで0.7mを測る。長軸部分と分岐軸の埋土に顕著な違いが見当たらないため、2つの軸は関連性をもっている可能性が高い。また長軸部分の床面は硬化を確認することが出来ず、遺構の性格は不明である。

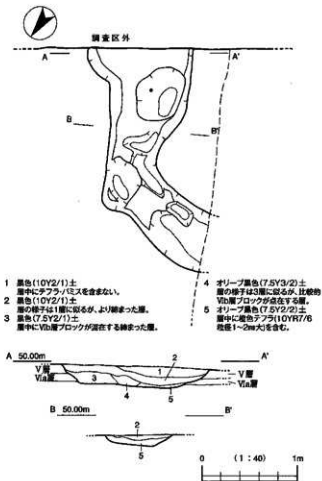
なお、遺構内からは4点の遺物が確認された。礫類1点、弥生土器3点である。溝の埋没段階で流入した可能性もあり、また、方形周溝2、SK1を切っていることから、遺構の使用時期は弥生時代中期後半以降の可能性もあるが、判然としない。

### ② SD2（第16図）

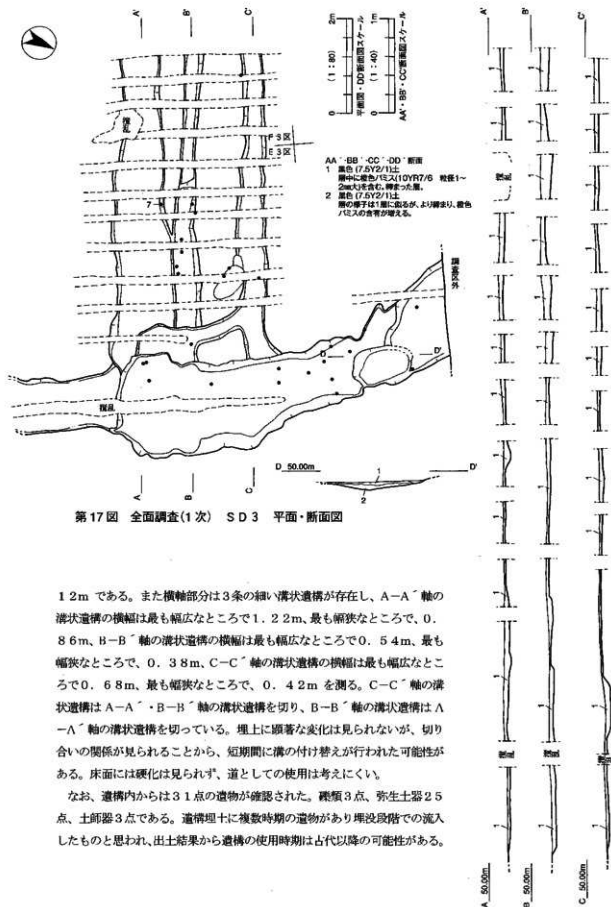
SD2はC2区から検出された。検出層はVIb層上面である。SD2は弧状に検出され、検出範囲が狭く、北西端が攪乱層により破壊されているため、遺構の向きについては判然としない。SD2の横幅は0.5～0.58mを測り、遺構深度も浅い。遺構内からは礫類1点が確認されたのみであった。遺構の性格・使用時期については不明である。

### ③ SD3（第17図）

SD3はE3・4区で検出された。検出層はVIb層上面である。遺構は1つの軸は南南東から北北西軸（縦軸部分）に延び、もう1つの軸は西北西から東南東軸（横軸部分）に延び、T字に交わる形状をもつ。遺構は現代の深耕による攪乱を受けている。縦軸部分は遺構の横幅が、最も幅広なところで2.12m、最も幅狭なところで、1.



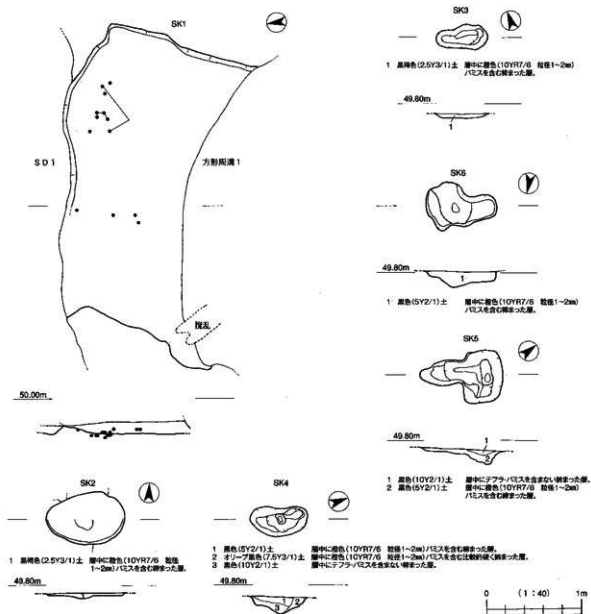
第16図 全面調査(1次) SD2 平面・断面図



1.2mである。また横軸部分は3条の細い溝状遺構が存在し、A-A'軸の溝状遺構の横幅は最も幅広ところで1.22m、最も幅狭なところで、0.86m、B-B'軸の溝状遺構の横幅は最も幅広ところで0.54m、最も幅狭なところで、0.38m、C-C'軸の溝状遺構の横幅は最も幅広ところで0.68m、最も幅狭なところで、0.42mを測る。C-C'軸の溝状遺構はA-A'・B-B'軸の溝状遺構を切り、B-B'軸の溝状遺構はA-A'軸の溝状遺構を切っている。埋上に顕著な変化は見られないが、切り合いの関係が見られることから、短期間に溝の付け替えが行われた可能性がある。床面には硬化は見られず、道としての使用は考えにくい。

なお、遺構内からは31点の遺物が確認された。雑類3点、弥生土器25点、土師器3点である。遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと見られ、出土結果から遺構の使用時期は古代以降の可能性がある。



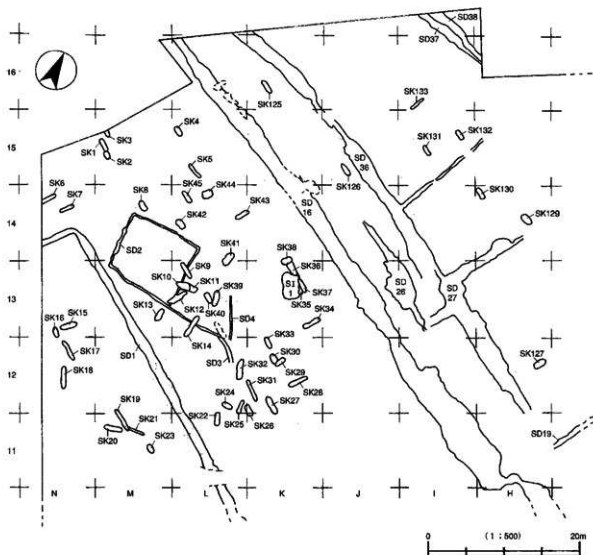


第19図 全面調査(1次) SK1・2・3・4・5・6 平面・断面図

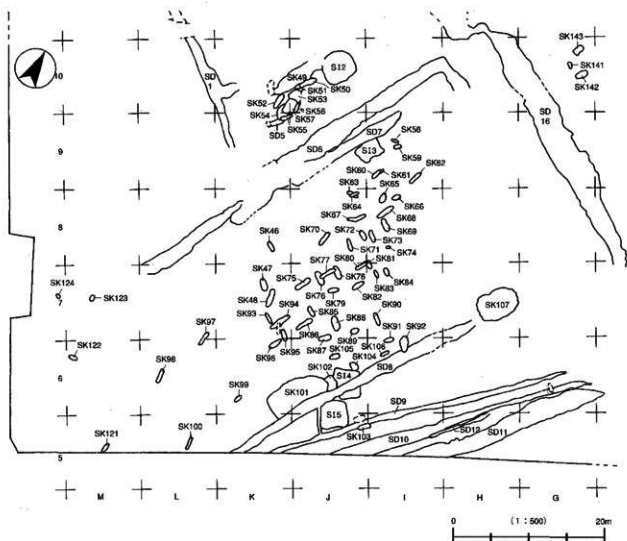
## 第V章 全面調査（2次）の概要

### 第1節 全面調査（2次）の方法

本調査は、調査範囲に存在する基準点を元に、10mメッシュのグリッドを設定、全面調査（1次）の調査範囲を含む南東隅から南北方向に1～20区、東西方向にA～O区のグリッドを設定し、それぞれの調査区を「A1区」、「A2区」…と呼称した。全面調査（2次）はA5区から行われ、表土を調査員立会いの下、重機で除去した。なお縄文早期相当の遺物包含層が存在するJK8・9区は、表土の外、VIb～IX層を調査員立会いの下、重機で除去した。人力による掘り下げはII・IIIa・IIIb・VIa層、JK8・9区においては遺物包含層が削平されるXa・Xb層の掘り下げを行った。遺構検出は、VIa層、IX層（アカホヤ火山灰層）、Xc層で行った。



第20図 全面調査（2次）遺構検出状況図 1/4



第 21 図 全面調査(2次) 遺構検出状況図 2/4

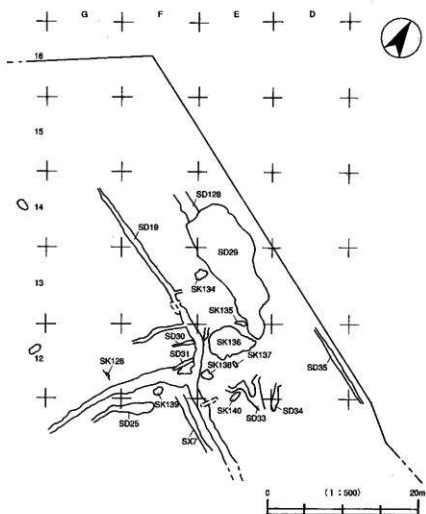
## 第 2 節 全面調査(2次)の概要

遺物包含層の残存状況は比較的良好であったが、現在見ることのできる地形は高低差の少ないフラットであるのに、元地形はかなり起伏のある地形と思われ、場所により遺物包含層が削平を受けVIb・VII層まで削平を受けているところが見受けられた。

IX層(アカホヤ火山灰層)より上位層の包含層における遺物出土状況は、縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代前期から弥生時代終末、古墳時代初頭及び後期、古代、近世と長期に亘る遺物が確認された。各時期の具体的な遺物出土状況については第4節に後述する。

J12区VII層上面より散石状に検出された集石(SS1)が確認され、縄文時代前期の管煙式土器(9~11)の小片が共存している。また、F13・14区VIa層上面より土器埋設遺構1(SJ1)から縄文時代晩期相当の入缶式土器(13)がほぼ完形で横倒しの状態で出土し、その周囲には別個体の入缶式土器、縄文時代晩期土器が重なるように確認された。SJ1で出土した入缶式土器(12・14~16)のうち、顕著に煤が付着した土器(12)を分析した結果、歴年代がBC1260~1





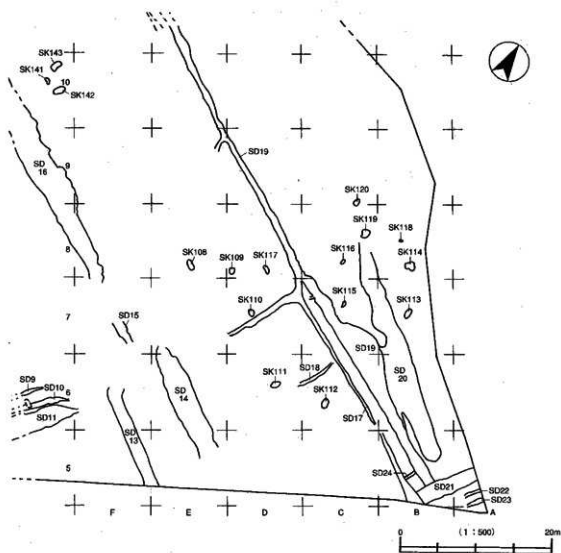
第22図 全面調査(2次) 遺構検出状況図 3/4

050の数値を示した。またその隣のグリッドE14区からは縄文晩期土器が多数出土し、土器片に包まれるように炭化物が確認された。この炭化物は自然科学分析の結果、コナラ属の堅果類の果皮や穀斗が欠落した子葉の破片であり、その歴年代はBC1200~1000の数値を示した。詳細については第4節で述べる。また、L13区Ⅲa層上面より土器埋設遺構2(SJ2)から、中津野式土器に似る弥生後期後半土器のほぼ完形の甕(32)、壺(33)、鉢(34)が重なるように出土した。また、E12区Ⅱ層より

り古代相当の須恵器(90~93)、土師器(90)が破砕し小片となった状態で確認された。

IX層(アカホヤ火山灰層)より下位層の調査範囲はJK8・9区であり、包含層の遺物出土状況は、Xa層より多数の破砕礫・焼礫、遺物数は少ないが打製石鏃、貝殻刺突文土器の小片が確認された。また、K8区Xb層上面より集石(SS2)が、J8区Xb層上面より散石状の集石(SS3)が検出され、SS2から出土した1点、SS3から出土した5点の炭化物を分析した結果、SS2炭化物の歴年代はBC8220~7960、SS3炭化物の歴年代はBC7470~7250の数値が得られた。詳細については第4節で述べる。

この他の遺構は、Ⅱ層上面において硬化面7基、Ⅲa層上面において欵状遺構3基、Ⅵa層上面において堅穴建物5基、Ⅲa・Ⅵa層上面において土坑143基、溝状遺構37基、が確認された。堅穴建物は立地的に元地形の高いと思われるJK5~13区の範囲に検出されており、それより東側に確認はできなかった。また溝状遺構は調査区全体に検出されており、軸方区から若干の時差が判別できるものと思われ、土坑についても埋土状況によりⅠ~Ⅵ層に分類できると思われる。詳細については第4節で述べる。



第23図 全面調査(2次) 遺構検出状況図 4/4

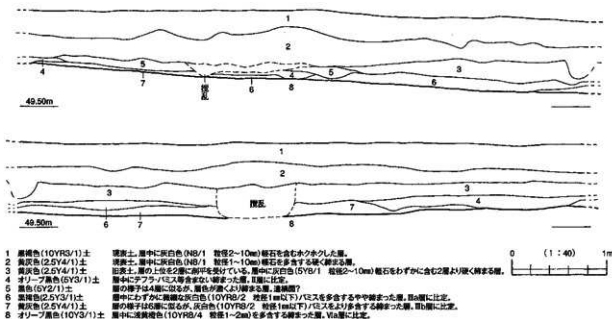
### 第3節 全面調査(2次)の層位

全面調査(2次)の標準土層は下記のとおりである。II層については全体的な地積はしておらず、かなり削平を受けている。IV・V層・VI層は全面調査(2次)においては削平ではなく、上位層は自然堆積が確認できるものの、欠如したように全く存在しなかった。

#### 基本土層

層位	層色	土色・土質
第I a層	5Y2/1 黒色	表土層。層中に白色テフラ (N9/0 直径2mm程度) を含むホクホクした層。
第I b層	5Y2/1 黒色	旧表土層。層中に灰白色テフラ (10YR8/1 直径2~10mm程度) を多含する締まった層。場所により3~4層程分層が可能。
第II層	10Y2/1 黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない黒色土。層の削平が如実である。この上面で硬化面が検出。古代の遺物包含層。
第III a層	2. 5Y3/2 黒褐色	層中に微細な淡黄色粒子 (5Y8/3 直径1~2mm程度) を多含する締まった層。場所によりIII b層と分層が困難な場合がある。弥生時代の遺物包含層。

第Ⅲb層	7.5Y3/1 オリーブ黒色	層の様子はⅢa層に似るが、より締まる層。層上位が遺構検出面。場所によっては明確な堆積が見られず、Ⅲa層と混在するところが見られる。
第Ⅳ層	10Y2/1 黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない黒色土。層にわずかに光沢が見られる。2次調査においては層が存在していない。
第Ⅴ層	7.5Y2/1 オリーブ黒色	層の様子はⅣ層に似るが、より締まる層。層に光沢は見られない。2次調査においては層が存在していない。
第Ⅵa層	10Y3/1 オリーブ黒色	層中に疎らに橙色バミス (7.5YR6/6 直径1~2mm程度) を含む締まった層。縄文時代後期~晩期の遺物包含層。
第Ⅵb層	10Y3/1 オリーブ黒色	層の様子はⅥa層に似るが、バミスがより多含で締まる層。層上位が遺構検出面。
第Ⅶ層	2.5Y2/1 黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない黒色土。2次調査においては層が存在していない。
第Ⅷ層	5Y3/1 オリーブ黒色	通称 池田降下礫層。 黄褐色テフラ (10YR/6 直径5~20mm程度) が含まれ、やや粘性を持ち光沢のある硬く締まった層。層上位が遺構検出面。縄文時代前期の遺物包含層。
第Ⅸ層	10YR6/6 明黄褐色	通称 アカホヤ層。 層の下部に5~10mm大の明黄褐色テフラ (10YR7/6) が層を成す硬く締まった層。
第Ⅹa層	5Y3/1 オリーブ黒色	層中にテフラ・バミスの類を含まない硬く締まった層。縄文時代早期の遺物包含層。
第Ⅹb層	2.5Y3/1 黒褐色	層中に明黄褐色バミス (10YR6/8 直径1~2mm程度) を含む硬く締まった層。層の上位に集石2基を確認。
第Ⅹc層	2.5Y3/1 黒褐色	X b層に層の様子が似るが、層中のバミスの直径が大きくなり (直径3~5mm程度)、比較的硬い層。
第Ⅹd層	2.5Y3/1 黒褐色	X c層に比べて層中のバミスの含有が最も多く、かなり硬化した層。
第Ⅹe層	2.5Y3/2 黒褐色	層に含まれるバミスの量が少なくなり、層色も比較的淡くなる締まった層。
第ⅩI層	10YR5/3 にぶい黄褐色	通称 サツマ火山灰層。 硬化したかなり締まった層。層中に黄色テフラ (2.5YR/6 直径1~10mm程度) が混ざり、ブロック状な塊も見られる。



第24図 全面調査(2次) F G10区 北壁土層断面図

#### 第4節 全面調査(2次)の調査成果

##### 1 縄文時代早期の調査

本調査の縄文時代早期の調査は、開場整備により遺物包含層の保護が出来ない範囲のみの調査となった。従って確認調査(2次)で、縄文時代早期の遺物が確認された1・3Tのうち、3Tは遺物包含層までが深く、開場整備を行っても保護層が確保できるため、全面調査は行わず、1Tの範囲のみの調査を実施することとなった。十の字に設定した確認調査(2次)1Tのうち、トレンチ南側からは遺物は確認できず、トレンチ西側のK9区から打製石鏃(2)1点と鏃が確認されたことから、この付近を広げて調査を実施することとなった。なお、縄文時代早期層の広がりを確認するために、L9区、H16・7区に下層確認のトレンチを設定して調査を実施したが、遺物・遺構は確認できなかったことから、縄文時代早期層の広がり、元地形の最も高いと思われるJK8・9区に広がっていることが想定され、IX層(アカホヤ火山灰層)を調査員立ち会いの下、重機で除去し、IX層直下からXb層までを人力による掘り下げを行った。遺物包含層は比較的薄く、Xa・Xb層とも12cmを測る。遺物は主に鏃であり、K8・9区での一集団と、J8・9区で一集団の、調査範囲を二分するような出土状況であった。出土鏃は小鏃であり、ほとんどが焼鏃であった。なお、調査区内の遺物は鏃1497点、打製石鏃(8)1点、炭化物10点、貝類刺突文土器の小片2点であった。

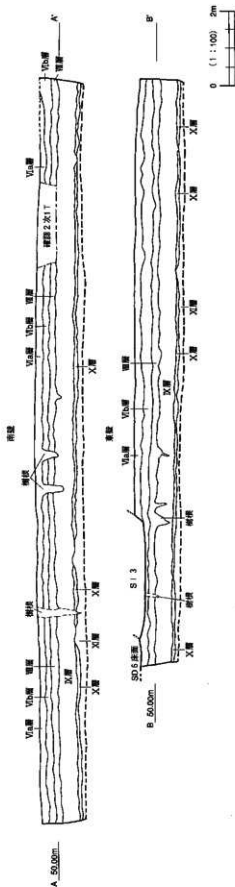
##### (1) Xb層検出遺構の調査

##### A 集石 (以下遺構番号は「SS」と表記)

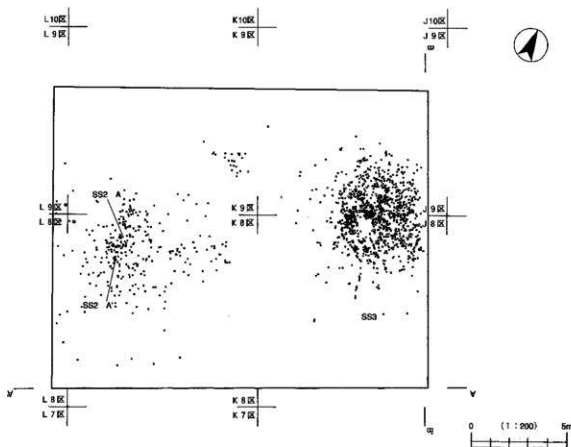
Xb層上面では2基の集石が確認された。

##### ① SS2 (第27図)

SS2はK8区で検出された。礫密度は密で、集石を構成する礫は230個確認された。出土礫の総重量は15515.6g、長径0.68m、短径0.61mの範囲内に大小の層が不規則に3層程度積み重なるように検出された。出土礫は主に角礫で、破砕した状態であり、礫の平均径は5.



第25図 全面調査(2次) 縄文早期層 調査区 南壁・東壁土層断面図



第26図 全面調査(2次) 縄文早期層 調査区及び遺物出土状況図

6cm、平均重量は67.5gを測り、礫の一部に赤みを帯びるものも見られ、集石内には炭化物が微妙ながら出土したが、焼土は確認することはできなかった。また、集石の直下に0.86m×0.73mを測る楕円形の掘り込み部分が礫の集中部分に重なるように検出され、上部の集石を構成する同様の小礫が掘り込み内に落ち込んでおり、集石との関連性があると思われる。また、SS2の北側には同様の小礫が多数出土していたが、その広がりにはK8区からK7区に向かって礫になる傾向があり、これらのSS2を構成していた小礫が流れ込んだ可能性がある。

SS2からは炭化物の外、貝殻刺突文が施文される土器の小片が2点確認されており、縄文時代早前期前葉の集石の可能性はある。

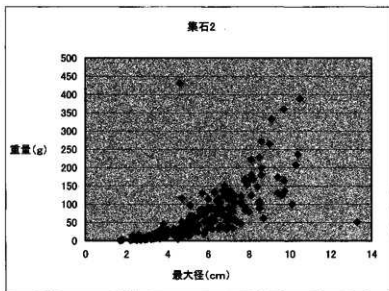
なお、SS2内で出土した炭化物を、加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry) による放射性炭素年代測定を実施した結果、BC8220～7960の年代値が得られた。詳細については第VI章に述べる。

## ② SS3 (第29図)

SS3はJ8・9区で検出された。礫密度はやや密であるが、当初散石状に出土していたため、集石としての認識はなかったが、礫が集中するJ8区から炭化物9点が出土したことから集石として整理した。集石を構成する礫は1943個確認された。出土礫は主に角礫で、破碎した状態であり、出土礫の総重量は48974.5g、礫の平均径は4.3cm、平均重量は25.2gを測り、焼土は確認することはできなかった。また、集石の直下に掘り込みは確認できなかった。集石の規模は長径9.

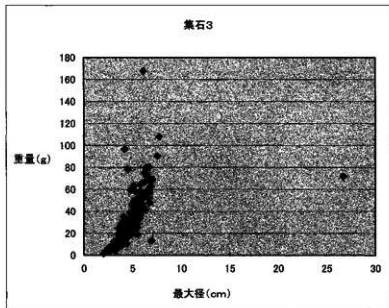
### 集石2

総個数	230個
礫平均径	約5.6cm
総重量	15515.6g
平均重量	約67.5g



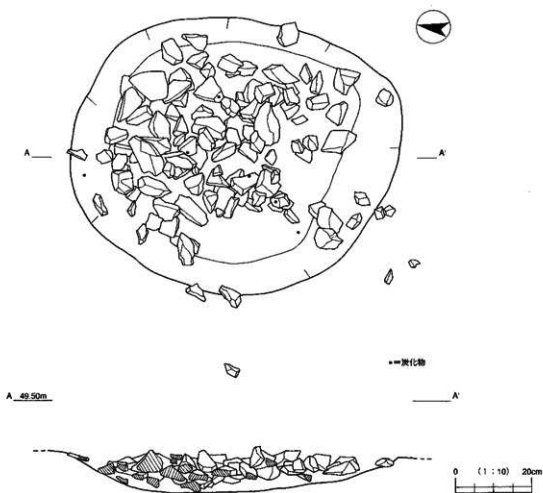
### 集石3

総個数	1943個
礫平均径	約4.3cm
総重量	48974.5g
平均重量	約25.2g



1 m × 7.4 mであり、その形状は楕円形であり、楕円形の中心付近に小礫が層厚に出土し、広範囲に小礫が多数出土した。

なお、遺構内に遺物は確認できなかったが、SS3内で出土した炭化物を、加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry) による放射性炭素年代測定を実施した結果、BC 7470~7250の年代値が得られた。このことから、SS2とSS3の使用時期にはかなりの時期差があることがわかった。詳細については第VI章に述べる。

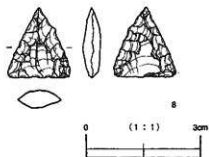


第27図 全面調査(2次) SS2 平面・断面図

(2) 包含層出土遺物

本調査で出土した礫はSS2、SS3を構成する礫であり、土器片はSS2内から出土した2点のみであり、包含層出土遺物として、Xa層より出土した打製石礫について述べる。

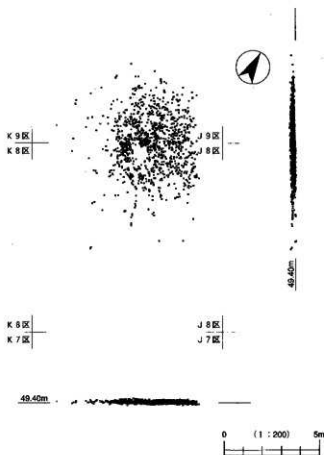
8は頁岩製の打製石礫である。挾入部はほとんどなく、比較的厚みのある石礫である。



第28図 全面調査(2次) Xa層出土石器

第11表 全面調査(2次) Xa層出土 石器計測表

探検隊号	番号	出処番号	出土区	出土層 (地層)	製法	石質	質量 (m・g)			備考	
							最大長	最大幅	最大厚		
第28図	8	1237	SS2	Xa層	打製石礫	頁岩	1.85	1.98	0.65	1.1	28P



第29図 全面調査(2次) SS3 礫出土状況 平面・断面図

## 2 縄文時代前期～晩期の調査

縄文時代の遺構は、J12区より集石1基、F13・14区より土器埋設遺構(以下「S J」と表記)が1基検出された。

### (1) 集石

#### ① SS1(第30図)

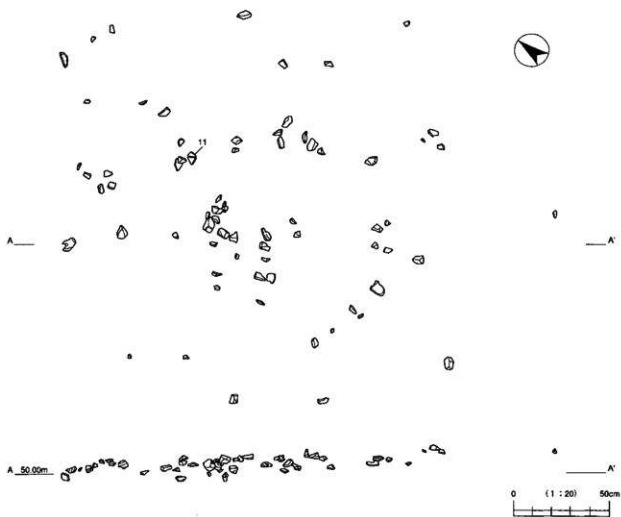
集石1はJ12区より検出された。検出層はⅧ層上面である。礫密度は疎であり、集石を構成する礫は57個確認された。出土礫は主に角礫で、破砕した状態であり、出土礫の総重量は2365.0g、礫の平均径は5.0cm、平均重量は41.5gを測り、焼土は確認することはできなかった。また、集石の直下に掘り込みは確認できなかった。集石の規模は長径が2.59m、短径2.08mの楕円形を呈する範囲に、散石状に礫が散らばる。

集石内に炭化物や焼土は確認できなかったが、集石内には22点の管埴式土器が共存していた。このことからSS1は縄文時代前期の遺構であると思われる。

#### SS1出土遺物

9～11は管埴式土器の深鉢胴部である。9は外面に横位の浅い沈線文を施し、内面に輪縁みの接合痕が残る。10は外面に縦位・横位の浅い沈線文が幾何学文様を施し、胎土中に比較的石英を多含ます。11は外面に縦位・横位の浅い沈線文が幾何学文様を施す。

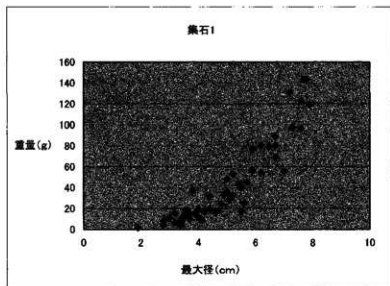


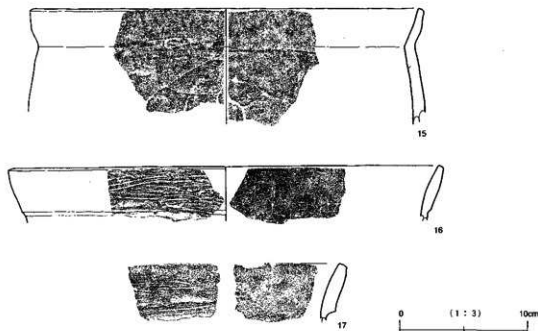


第30図 全面調査(2次) SS1 平面・断面図

集石1

総個数	57個
縦平均径	約5.0cm
総重量	2365.0g
平均重量	約41.5g





第33図 全面調査(2次) S J 1 出土遺物

第12表 全面調査(2次) S S 1 出土遺物

調査番号	発掘層	出土位置(座標)	器種	形状	分類	土質				色澤	焼成・調製	長さ (cm)		備考	
						硬	質	細	砂			口径	底径		
第12表	3	F13・F14区	J13区	陶器	砂質土	○	○			○	土質: 赤土 上段: 赤土 下段: 赤土	口径	底径	4.4	骨の跡
第12表	10	F13	J13区	陶器	砂質土	○	○			○	土質: 赤土 上段: 赤土 下段: 赤土	口径	底径	5.8	
第12表	11	F13	J13区	陶器	砂質土	○	○			○	土質: 赤土 上段: 赤土 下段: 赤土	口径	底径	6.0	

## (2) 土器埋設遺構

### ① S J 1 (第31図)

S J 1はF13・F14区より検出した。検出層はVIa層である。遺構範囲の長径は0.76m、短径は0.64mであり、遺構内から182点の土器片が積み重なるように出土した。遺構の上位に完形の入式土器(13)が倒れた状態で出土し、その下位と周囲には入式土器50点、縄文晩期土器65点、砂岩製の五角形打裂石鏃(18)が1点確認された。出土した土器は2次焼成を受けたような器壁の赤変や、遺物の脆弱化が見受けられた。

### S J 1出土遺物

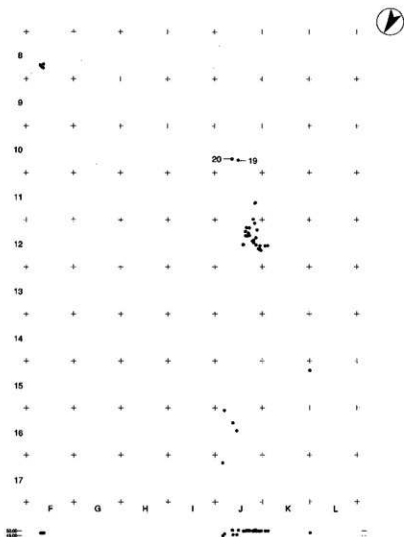
12～17は人佐式土器の深鉢である。12は口唇端部がやや丸みを帯びる調整であり、口縁部下位がやや肥厚気味に膨らみをもつ。口縁部は「く」の字状口縁で逆「八」字のように直行して開く。頸部内外面の屈曲部に明瞭な稜は見られず、ゆるやかな調整が施されている。器形はやや上下に伸びるような形で、土器の最大径は口縁部にある。底面外部はわずかに張り出しをもつ平底である。この遺物のない外面には煤が顕著に付着していたため、加速器質量分析法(Accelerator Mass Spectrometry)による放射性炭素年代測定を実施した結果、BC1260～1050の年代値が得られた。詳細については第VI章で述べる。13は口唇端部が二段階に端部を揃えるように調整し、口縁部下位に肥厚気

味の膨らみは見られない。口縁部は「く」の字状口縁で逆「八」字のように直直して開く。頸部外面に揃み出したような突起が頸部全体を走り、頸部の屈曲部は鋭角に曲がるが、内外面に明瞭な稜は見られない。器形は12と比べて圧縮されたように器高が低く、土器の最大径は口縁部にある。底面はやや丸みを帯びる平底であり、その外面には煮沸痕を思わせる小円状の剥離痕が見られる。胎土中に含まれる石英は比較的大きい。14・15は口縁部から胴部が残存する。14は口唇端部が平らに揃える調整であり、口縁部下位に肥厚気味の膨らみが見られる。口縁部は「く」の字状口縁で逆「八」字のように直直して開くが、口縁部の傾きはやや緩やかである。頸部はやや器壁が薄くなり、内外面の屈曲部に明瞭な稜は見られず、ゆるやかな立ち上がりが見られる。器形はやや上下に伸びるような形で、最大径は胴部にある。15は口唇端部が平らに揃える調整であり、口縁部下位に肥厚気味の膨らみが見られるが、口縁部が比較的短めで、口縁部は「く」の字状口縁でやや内湾気味に直直して開くが、口縁部の傾きはやや緩やかである。口縁部の形状から、最大径は胴部にあると思われる。16・17は口縁部が残存する。16は口唇端部がわずかに丸みを帯びる調整であり、口縁部下位がやや肥厚気味に膨らみをもつ。口縁部は「く」の字状口縁で逆「八」字のように直直して開く。17は口唇端部が丁寧に平坦面が作られており、口縁部下位がやや肥厚気味に膨らみをもつ。口縁部は「く」の字状口縁で逆「八」字のように直直して開く。

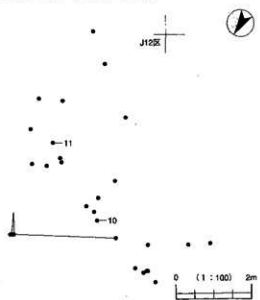
18は砂岩製の打製石鏝である。五角形鏝であり、縄文時代晩期特有の形態を呈している。挟入部が浅い挟りをもつ薄手の石鏝である。右肩が一部欠損している。

第13表 全面調査(2次) S J I 出土遺物

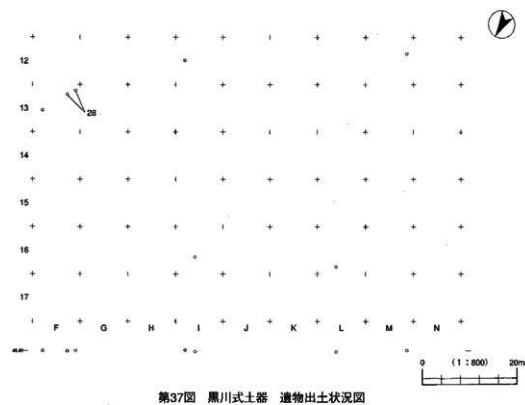
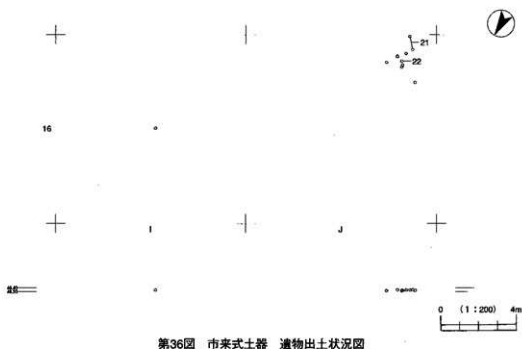
調査 番号	遺物 番号	出土地 (埋蔵)	種類	形状	分類	器 身					口 縁		備 考				
						口 径	口 高	口 厚	口 形	口 縁	口 縁	上段: 外山 下段: 内山		口 縁	口 縁		
第1回	12	第3遺跡 第10-17 第14-16号 第17-19号 第20-22号 第23-24号 第25-26号	土器(土)	片断	入形式	○	○				○	1. 器身 2. 口縁部	1. 器身 2. 口縁部	21.9	6.1	23.9	内山: 器身(口縁部)
第1回	13	130-4 130-6 130-7 130-8 130-9	土器(土)	片断	入形式	○	○				○	1. 器身 2. 口縁部	1. 器身 2. 口縁部	21.2	7.2	28.3	内山: 器身(口縁部) 内山: 器身
第1回	14	17-130 130-13 130-12	土器(土)	片断	入形式	○	○				○	1. 器身 2. 口縁部	1. 器身 2. 口縁部	16.2	-	17.3	内山: 器身(口縁部)
第1回	15	17-130 130-13 130-12	土器(土)	片断	入形式	○	○				○	1. 器身 2. 口縁部	1. 器身 2. 口縁部	20.0	-	21.1	内山: 器身
第1回	16	8 12(2)	土器(土)	片断	入形式	○	○				○	1. 器身 2. 口縁部	1. 器身 2. 口縁部	21.1	-	4.3	内山: 器身
第1回	17	36 37	土器(土)	片断	入形式	○	○				○	1. 器身 2. 口縁部	1. 器身 2. 口縁部	-	-	4.1	内山: 器身(口縁部) 内山: 器身



第34图 管烟式土器 遺物出土状況図



第35图 管烟式土器 J12区(拡大) 接合状況図



第14表 全面調査(2次) S J1出土 石器計測表

探検番号	発見 番号	目録 番号	出土区	出土層 (深部)	種類	石質	計測 (mm・g)			備考	
							最大長	最大幅	最大厚		重量
黒川式	18	SJ1-30	FH区	SJ1 風土	行刺刀鏃	砂岩	2.4	1.8	0.35	1.7	C線群

### (3) 包含層出土遺物

縄文時代の包含層出土遺物として、管埴式土器、市来式土器、黒川式土器、入佐式土器、その他分類不明の縄文晩期土器が出土した。それぞれの分類による出土状況を図化し示す。

#### ① 管埴式土器 (第43図)

管埴式土器はF8、J10～12、J16・17、K12、L15区で44点出土し、(第34・35図)うち接合した遺物2点を図化した。主に出土したのはK12区であり、SS1が検出された調査区である。本調査で出土した管埴式土器比較的小片なものも多く、5点のみ接合することが出来た。出土が多く見られたJ12区は標高的には周辺より高いところであり、上層の削平が顕著なところでもあったことから、遺物が失われた可能性もある。

19は深鉢胴部が残存し、外面に横位の浅い細沈線文が施され、胎土中に小礫を多含する。20は深鉢底部が残存し、底部外面(接地面)に蜘蛛の巣状の浅い細沈線文が施され、胎土中に程の大きい石英、小礫を多含する。

#### ② 市来式土器 (第43図)

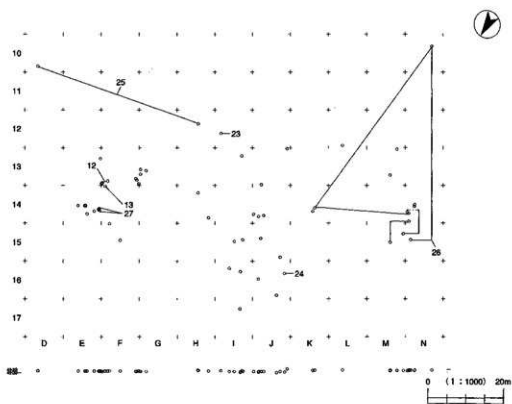
市来式土器はJ16区で10点出土し、(第36図)うち接合した遺物2点を図化した。出土状況はほぼJ16区の南隅に一箇まりで出土し、その範囲を立地的にみると、調査対象範囲の北側に位置し、台地の北端部に近い。

21・22は深鉢口縁部が残存する。いずれも口縁部が断面三角形に肥厚し外反する形状をもつ。21は口縁部内面に斜位の貝殻刺突文→2条の凹線文→斜位の貝殻刺突文を施文し、場所により凹線文がなく、貝殻刺突文のみのところも見られる。外面は口縁部上位が区曲し、明瞭な稜が見られ、その下位は斜位・横位の条痕文を施文する。22は口縁部内面に斜位の貝殻刺突文→2条の凹線文→斜位の貝殻刺突文を施文し、外面は屈曲部がなく稜は不明瞭で、外面上位にごく浅い沈線文が2条見られる。

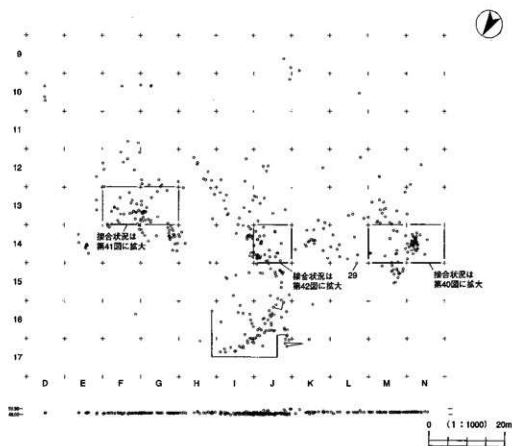
#### ③ 入佐式土器 (第43・44図)

入佐式土器はD10、E7・13・14、F13～15、G13、H12・14、I12・13・15・16、J7・13～16、K14、L12、M13・15、N10・14・15区で156点出土し、(第38図)うち接合した遺物5点を図化した。主に出土した範囲は、EF13・14、IJ15・16、N14・15区の3箇所地点に在り、いずれの出土範囲は、調査対象範囲の北側に位置し、台地の北端部に近い立地である。特にF13・14区より入佐式土器、縄文晩期土器の遺物集積が見られたS J1があり、北側に延びる台地の突端に入佐式土器を伴う遺構の存在も考えられる。

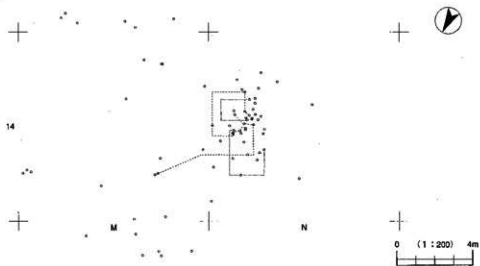
23～25は深鉢口縁部が残存する。23は口縁部が「く」の字状口縁で逆「八」字のようにやや内湾気味に直行して開く。口縁部の肥厚はそれほどではないが、頸部は器壁が極端に薄く整形されている。24は口縁部が逆「八」字のようにやや開き気味に直行して開く。口唇部は丸くおさめ。25は口縁部が逆「八」字のように直行して開く。口唇部は平坦面に浅い窪みが存在する。26は深鉢頸部から胴部が残存する。頸部の屈曲部は外反気味に鋭角に曲がり、頸部内面に明瞭な稜が施される。胴部下位の破断面は輪積の接合部分と思われる。胎土中に比較的雲母が多含で粒が大きい。27は胴部が残存し、外面に頸部の立ち上がり部分がわずかに残存し、緩やかに立ち上がる様相があり、稜は見られない。胴部内外面屈曲部は「く」の字状に顕著に立ち上がり、内面に輪積の接合痕が見られる。胴部外面上位は「率」ナデであり、その下位は「や」ナデで調整される。



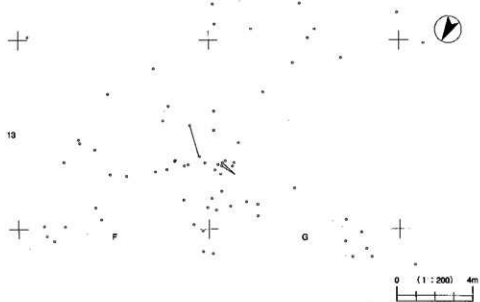
第38図 入佐式土器 遺物出土状況図



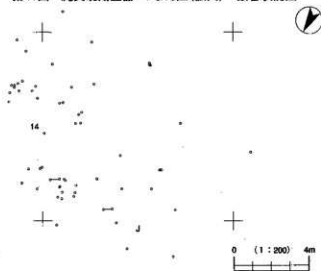
第39図 縄文晩期土器 遺物出土状況図



第40图 縄文晚期土器 MN14区(拡大) 接合状況図

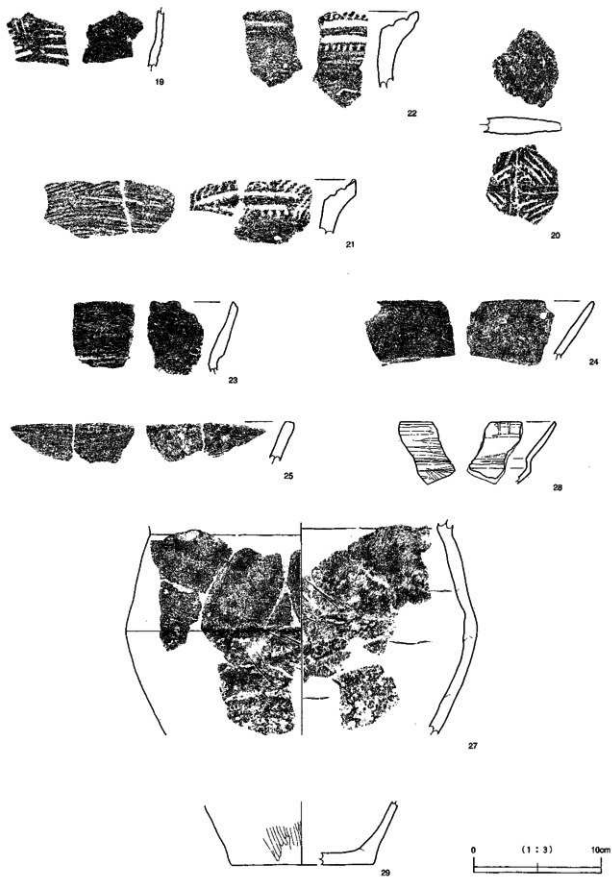


第41图 縄文晚期土器 FG13区(拡大) 接合状況図



第42图 縄文晚期土器 J14区(拡大) 接合状況図





第43図 包含層出土 縄文土器 1



### 3 弥生時代の調査

#### (1) 竪穴建物

全面調査(2次)では、竪穴建物(以下「S1」)と表記)は5基確認された。前項でも述べたが、竪穴建物は立地的に元地形の高いと思われるJK5~13区の範囲に検出されており、それより東側に確認はできなかった。

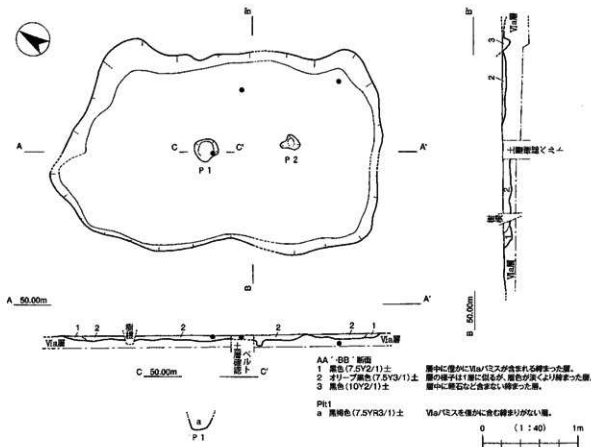
#### ① S11 (第45図)

S11はK13区より検出された。検出層はVIa層である。遺構の平面プランは隅丸長方形であり、長軸は3.30m、短軸は2.04mを測る。長軸の向きは南東から北西軸に延び、S14・5の軸に似る。SK36・37に切られ、SK35を切る。遺構深度は最も深くても0.08mであり、床面に若干の凹凸は見られるが、ほぼフラットな床面である。床面に硬化層は確認できず、Ah等の張床は見られないやや締まった層であった。床面上を検出した結果、2基の柱穴(P1・2)が確認できた。P1とP2の間隔は0.90mを測る。

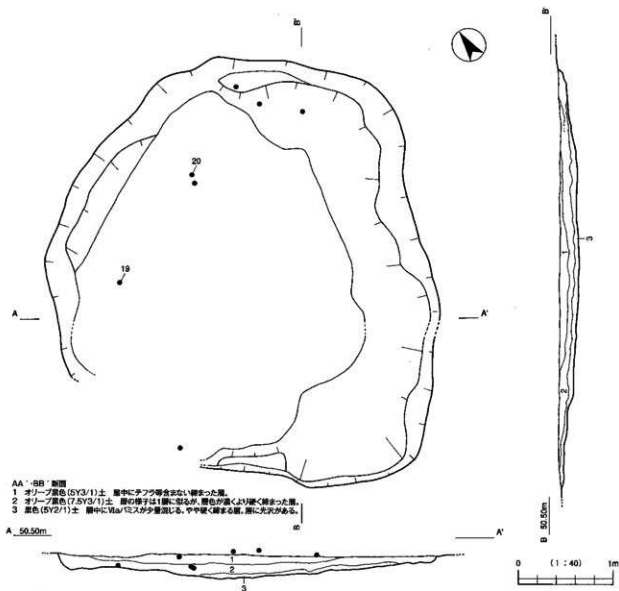
遺物は、床着遺物が3点確認された。礎1点、胎土中に小礫を多含する弥生土器2点である。出土結果からS11は弥生時代の竪穴建物の可能性がある。

#### ② S12 (第46図)

S12はJ10区より検出された。検出層はVIa層である。遺構の平面プランはやや変形の隅丸長方形であり、遺構の南西隅はSK49に切られる。長軸は4.44m、短軸は4.00mを測る。長軸の向きは南西から北東軸に延びる。遺構深度は、遺構の中央付近が最も深く0.45mを測り、床面に硬化層は確認できず、Ah等の貼床は見られないやや締まった層であった。床面上を検出したが、



第45図 全面調査(2次) S11 平面・断面図及び遺物出土状況



第46図 全面調査(2次) SI2 平面・断面図及び遺物出土状況図

柱穴などの付属遺構は確認できなかった。

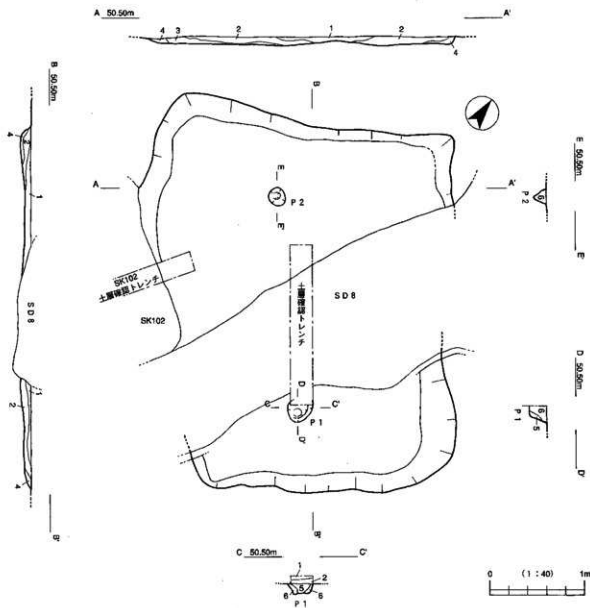
遺物は、床着遺物が7点確認された。礫3点、管埴式土器3点、弥生土器4点であった。管埴式土器についてはSI2の北西側のJ11・12区に多数出土しており、SI2の埋没段階で流入した可能性が高い。このことからSI2は弥生時代の竪穴建物に可能性が高い。

### ③ SI3 (第47図)

SI3はJ10区より検出された。検出層はVIa層である。遺構の平面プランは隅丸長方形であり、遺構の北隅はSD7に切られる。長軸は3.50m、短軸は2.78mを測る。長軸の向きは南南西から北北東軸に並び、SI2の軸に似る。遺構深度は、0.12mを測り、ほぼフラットな床面である。床面にはやや硬化が確認でき、Ah等の貼床は見られない。床面上を検出した結果、遺構の中央からやや南西に柱穴が1基(P1)確認できた。P1は深く0.60mを測る。

遺物は床着遺物が2点、埋土中から16点確認された。いずれの遺物も弥生土器と思われる小片であり、出土結果からSI3は弥生時代の竪穴建物に可能性が高い。



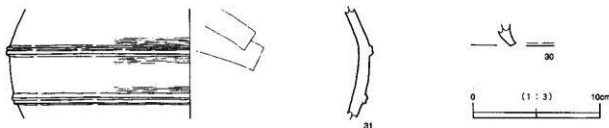


AA'-BB' 断面

- 1 黒色 (5Y2/1) 土
- 2 オリーブ黒色 (5Y3/1) 土
- 3 オリーブ黒色 (5Y3/1) 土
- 4 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 土
- 5 黒色 (10Y2/1) 土
- 6 オリーブ黒色 (7.5Y2/2) 土

- 層中に字アラス等含まない、焼まつた層。
- 層中にVla/VIsを含む、やや焼まつた層。
- 層の種子は3層に似るが、おり/VIsの含有が増え、より焼まつた層。
- 層中に灰色VIs(2.5Y3/2) 程度1-2mm程度を含むよく焼まつた層。
- 層中に字アラス等見られないやや焼まつた層。
- 層中にVla/VIsが含まれるやや焼まつた層。

第48図 全面調査(2次) S14 平面・断面図及び遺物出土状況図



第49図 全面調査(2次) SI 3・4 出土遺物

④ SI 4 (第48図)

SI 4はJ 6区より検出された。検出層はVIa層である。遺構の平面プランはやや変形の隅丸長方形であり、遺構の中央をSD 8に、遺構の南西側をSK 10 2に切られる。長軸は3. 8 6m、短軸は3. 2 9mを測る。長軸の向きは南東から北西軸に延び、SI 1・5の軸に似る。遺構深度は、0. 1 0mを測り、ほぼフラットな床面である。床面にはやや硬化が確認でき、Ah等の貼床は見られない。床面上を検出した結果、遺構の長軸方向に沿うように、柱穴が2基(P 1・2)確認できた。いずれの柱穴の深度は浅く、P 1は0. 1 8m、P 2は0. 1 4mを測り、P 1とP 2の柱間は2. 3 0mを測る。

遺物は埋土中から3点確認され、いずれも弥生土器であった。うち1点は弥生時代後期以降に見られる台形突帯をもつ壺胴部(31)が確認された。この遺物は包含層、SK 10 1・10 2の遺物と接合することから、遺構の埋没段階で流入したと思われる、その結果からSI 4の使用時期は弥生時代後期以降の可能性がある。

SI 4出土遺物

31は弥生後期土器の壺胴部である。胴部に貼付台形突帯が2条残存し、穿孔と思われる楕円形の欠け部分が見られる。

第17表 全面調査(2次) SI 4 出土遺物

発掘 番号	番号	発掘 番号	出土区 出土層 (遺物)	種類	形状	分類	土						色 質 上段: 赤土 下段: 赤土	出土・埋没 上段: 赤土 下段: 赤土	位置 (m)			備考				
							心 土	表 土	裏 土	底 土	側 土	溝 土			溝 土	溝 土	溝 土		溝 土	溝 土		
発掘 番号	31	2147・2149 4539・4543	弥生後期 赤土	壺 胴部	楕円形	壺	○	○					○	○	1. 80m	1. 40m	2. 30m	2. 30m	3. 00m	3. 00m	3. 00m	弥生後期土器の壺胴部

⑤ SI 5 (第50図)

SI 5はJ 5・6区より検出された。検出層はVIa層である。遺構の平面プランは隅丸方形と思われるが、遺構の北西隅をSD 8に、南東隅をSD 9に切られるため判然としない。長軸は3. 7 2m、短軸は3. 4 6mを測る。長軸の向きは南東から北西軸に延び、SI 1・4の軸に似る。遺構深度は0. 1 6mを測り、遺構の北東・北・北西隅にかけて、床面より一段高いベッド状遺構があり、床面はほぼフラットである。床面にはやや硬化が確認でき、Ah等の貼床は見られない。床面上を検出した結果、遺構の短軸方向に沿うように、柱穴が2基(P 1・3)、床面の北西に1基(P 2)が確認できた。いずれの柱穴の深度は浅く、P 1は0. 1 0m、P 2は0. 0 6m、P 3は0. 1 6mを測り、P 1とP 3の柱間は1. 5 2mを測る。

遺物は床着遺物が2点、埋土中から31点確認された。種類3点、弥生土器30点である。埋土中



第50図 全面調査(2次) S15 平面・断面図及び遺物出土状況図

遺物からはS14の埋土中から確認された台形突帯をもつ蓋胴部が3点確認されており、遺構の埋没段階で流入したと思われる。その結果からS15の使用時期も弥生時代後期以降の可能性がある。

## (2) 土器埋設遺構

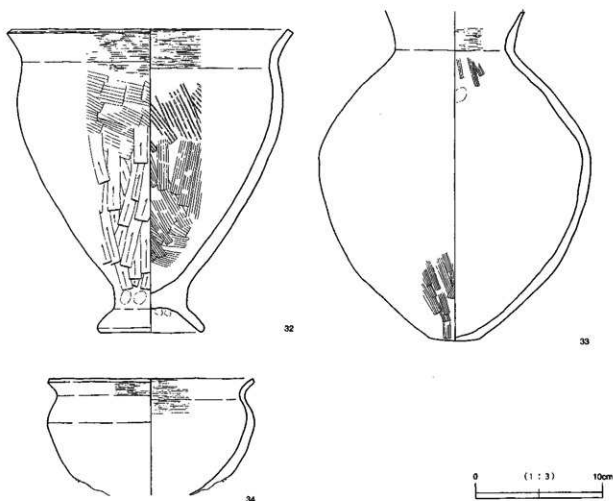
### ① SJ2 (第52区)

SJ2はL13区より検出した。検出層はⅢa層である。遺構範囲の長径は1.27m、短径は0.92mであり、遺構内から71点の土器片が積み重なるように出土した。遺構の長軸方向は西南西から東北東軸に延び、遺構の西側に遺物が重なるよう出土した。遺構の上位にはほぼ完形の中津野式土器に似た甕(32)、壺(33)が潰れた状態で出土し、その下位には鉢(34)が同様に潰れた状態で確認された。出土遺物の取り上げを行い、検出面の精査を実施したところ、掘り込み面らしき変形楕円形のプランが遺物集中部分に重なるように検出され、上部の遺物集積を構成する同様の遺物が掘り込み内に落ち込んでおり、遺物集積との関連性があると思われる。また、甕(32)の内外面の一部

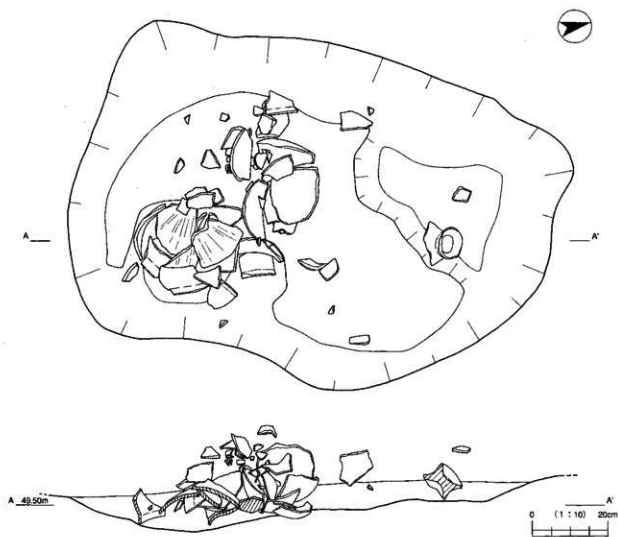


に焼成後の焼成（2次焼成）のような褐色（7.5YR 4/3）化部分が見られ、鉢（34）についても度重なる焼成によるものか、胎土の橙色（7.5YR 7/6）化が断片的に見られ、また胎土中に気泡状のセルが所々に見られる。

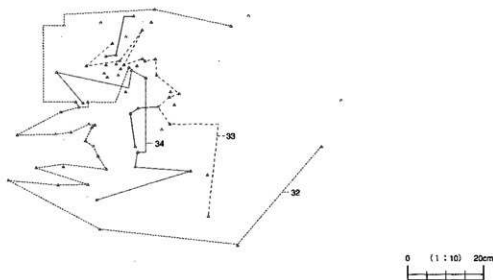
なお、S J 2内に出土した甕（32）は、中津野式土器に見られる底部のウエスト部がスリムに絞られ、脚部が長く伸びるのが一般的なのに対し、出土した遺物は底部のウエスト部はタイト気味で、脚部も比較的短脚であり、口縁部の立ち上がりも中津野式土器に比べやや弱いが、口縁端部を平たく整える特徴は弥生後期後半以降の遺物に見られる兆候である。また壺（33）は、底部の平坦面はわずかに存在するだけで、ほぼ丸底に近い特徴は中津野式土器に見られる特徴である。鉢（34）は中津野式土器に見られる口縁端部を平坦にする整形・調整が比較的粗であることから中津野式土器への移行期の遺物である可能性がある。この遺物所見については鹿児島大学埋蔵文化財調査室 中村直子准教授のご指導を受け、S J 2から出土した土器群を「高付式の新段階」の様式として分類し纏めることとし、第Ⅶ章に鹿児島大学埋蔵文化財調査室 中村直子准教授に草稿をいただき、詳細を述べる。



第51図 全面調査（2次） S J 2 出土遺物



第 52 図 全面調査(2次) S J 2 平面・断面図



第 53 図 全面調査(2次) S J 2 遺物接合状況図



② 刻目突帯文土器の範疇タイプ

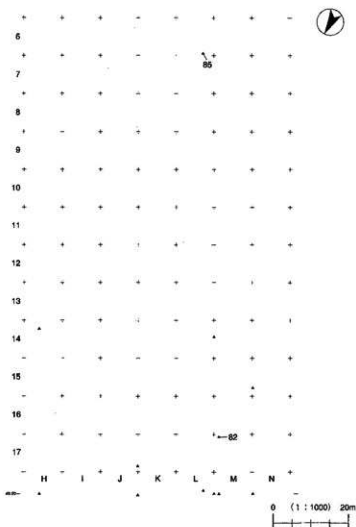
(第78図)

刻目突帯文土器の範疇タイプと思われる口唇部外面に刻目をもたない三角突帯が貼り付けられた土器群である。典型的な刻目突帯文土器とは異なり、突帯に刻目はなく、器壁は薄く、内外面は横ナゲ調整が施される。弥生前期から中期頃に比定される。K5、L5・6、N10区に8点出土し、(第55図)うち4点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の南西側に出土し、主にKL5区にある程度の遺物の広がりがあるように思える。

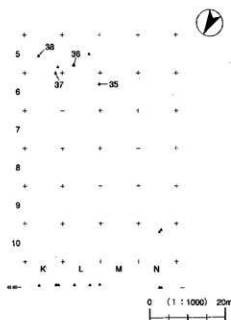
35から38は頸口縁部が残存する。35は傾きが不明だが、口唇部と口縁部に横位から縦位に続く三角突帯と縦位の突起が交互に貼り付けられ、三角突帯・突起とも指先で擠んで成形している。胎土中に比較的石英を多含する。36は口縁部がやや開いて直行し、口唇部よりやや下に横位の貼付突帯がある。37は傾きが不明だが、36と同様に口唇部よりやや下に横位の貼付突帯がある。38は傾きが不明だが、口唇部に横位の貼付三角突帯と縦位の突起を持つ。

③ 入来I式土器 (第78図)

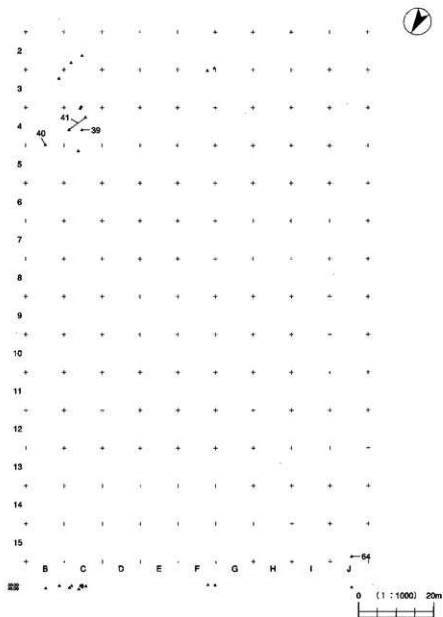
弥生時代中期初頭に比定される入来I式土器はB3・4、C2~5、F2、J15区で13点出土し、(第56図)うち接合した遺物3点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の南東側に出土し、主にBC2~4区にある程度の遺物の広がりがあるように思える。



第54図 弥生前期土器 遺物出土状況図



第55図 刻目突帯文土器の範疇タイプ 遺物出土状況図

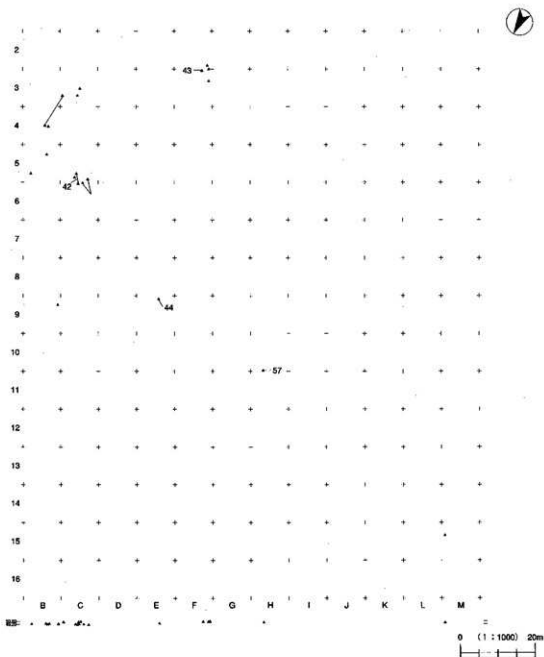


第56図 入来Ⅰ式土器 遺物出土状況図

39から41は壺口縁部が残存し、いずれの口縁部は内傾する。39は口唇部の平坦面はやや長く延び、口唇端部外面は窪みを強調して調整する。胴部に2条の貼付三角突帯が見られる。40はかなり内傾し、平坦面は短く、断面三角形を呈する。口唇端部外面に刻目を施す。三角突帯は見られない。41は平坦面が短く、断面台形を呈する。口唇端部外面に刻目を施し、胴部に1条の貼付三角突帯が見られる。64は壺底部が残存する。底部外面根出し部分に稜が見られ、底面は上底を呈する。

④ 入来Ⅱ式土器 (第78図)

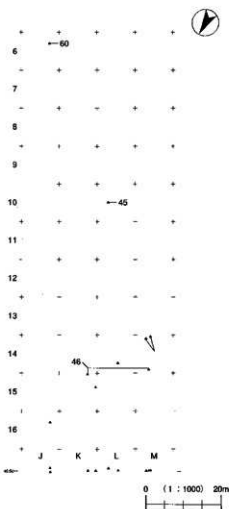
弥生時代中期前半に比定される入来Ⅱ式土器はB4・5・9、C2・5・6、E9、F2・3、H10、M15区で19点出土し、(第57図)うち接合した遺物3点を図化した。出土数が少ないため、



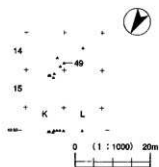
第57図 入来Ⅱ式土器 遺物出土状況図

明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の南東側に出上し、主にBC3～5区にある程度の遺物の広がりがあるように思える。また入来Ⅰ式の出土状況にも似る遺物の広がりである。

4 2から4 4は壺口縁部である。4 2・4 3は口縁部が内湾気味であるが、入来Ⅰ式土器に比べてやや外側に傾く。4 2・4 3は口唇部の平坦面が短く、断面台形を呈する。口唇端部はやや下向きで、その外面に窪みがあるが、刻目は見られない。4 2は胴部が底部に向って急に窄まるように内湾し、その底部には2条の貼付三角突帯が見られる。4 3は胴部外面上位に細沈線が刻まれる。4 4は口唇部が内傾するが、口唇部の平坦面が長く伸び、断面台形を呈する。口唇端部はやや下向きで、その外面に窪みがあるが、刻目は見られない。5 6・5 7は壺底部が残存する。5 6は充塞高台であり、底部の張り出しが見られ、底面中央に意図的に付けられた窪みが見られる。5 7は底部の張り出しはなく、底面中央に意図的に付けられた窪みがあり、体部に比べて底部が小さい。胎土中に石英を多含する。



第58図 山ノロⅡ式土器 遺物出土状況図



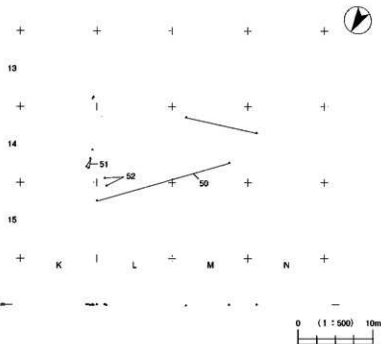
第59図 山ノロⅡ式・黒髷式土器折衷タイプ 遺物出土状況図

⑤ 山ノロⅡ式土器

(第78図)

弥生時代中期後半に比定される山ノロⅡ式土器は、J 6・16、J 15・16、L 10・14、M 14区に9点出土し、(第58図)うち接合した遺物2点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の北西側に出土し、主にKLM 14・15区にある程度の遺物の広がりがあるように思え、その広がりが北西側に向かって広がるように思える。

45・46は「く」の字状口縁であり、口縁部の断面は長方形に近い形状であり、屈曲部の近いところでやや肥厚する。45は口唇部の平坦面はやや短く、口唇端部外面に窪みがあり、口縁部内面の屈曲部には明瞭な稜をもつ。貼付三角突帯が比較的上位の口縁部直下にある。胎土中に径の大きい石英の含有が多い。46は口唇端部外面に窪みがあり、口縁部内面の屈曲部に



第60図 高付式又は山ノロⅡ式土器の範嘴タイプ 遺物出土状況図

は明瞭な稜をもつ。残存する胴部の器厚から器壁は薄いと思われる。60は壺口縁部が残存する。口唇端部はごく狭い平坦面をもち、口唇上部に平坦面をもつ。口縁部は外反すると思われ、口縁部内面屈曲部の張出しが顕著である。

⑥ 黒髪式土器模倣土器 (第79図)

弥生時代中期後半に比定される黒髪式土器であるが、胎土が在地のものであり、搬入品ではなく、在地色の強い模倣土器の可能性はある。I13、J13、L12区に4点出土し、うち2点を図化した。出土遺物数も少なく、ごく限られた範囲での出土であるため、遺構に絡む遺物であった可能性も否めない。

47・48は壺口縁部であり、47は口縁部内面の屈曲部がしゃくり上がり、その屈曲部がかなり強調するように肥厚する。口唇部に向かって弧を描いて反り上がり延びる。口縁部の断面は長方形を呈する。48は口唇部が欠損し、口縁部がかなり内傾する。47と屈曲部のしゃくり上がる部分はなく、胴部に2条の貼付三角突帯が見られる。

⑦ 山ノ口Ⅱ式土器・黒髪式土器折衷タイプ (第78図)

K14・15、L14区に8点出土した (第59図) このタイプの遺物は、短い口縁部が「く」の字状に外反し、胴部に貼付刻目突帯がある山ノ口Ⅱ式に見られる特徴と、口縁内面の屈曲部が肥厚し、口縁部直下に貼付刻目突帯をもつ黒髪式に見られる特徴が見られる遺物である。うち1点を図化した。弥生時代中期後半に比定される遺物と思われる。出土遺物数も少なく、ごく限られた範囲での出土であるため、遺構に絡む遺物であった可能性も否めない。

49は壺口縁部から胴部が残存する。口唇端部を丁寧成形し、平坦面をもつ。胎土中に含まれる雲母は1mm程度の小さいものであり、明赤褐色 (5YR 5/6) 粒を僅かに含む。

⑧ 高付式又は山ノ口Ⅱ式土器の範疇タイプ (第79図)

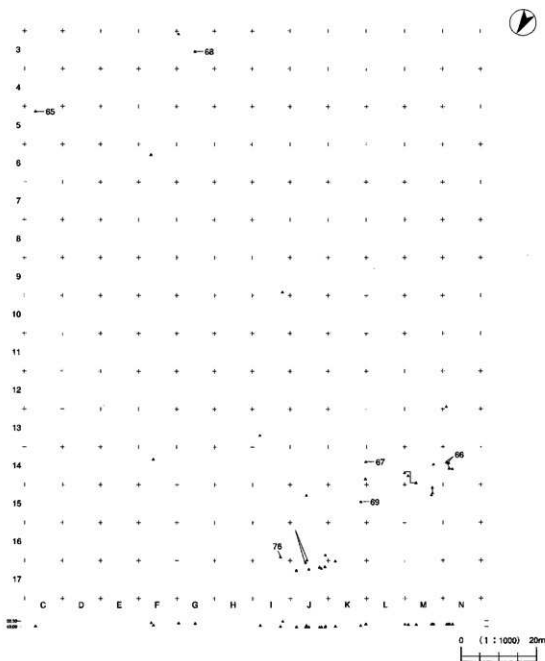
K13・14、L14・15、M14、N14区に12点出土した (第60図) このタイプの遺物は、短い口縁部が「く」の字状に外反し、胴部に貼付刻目突帯がある山ノ口Ⅱ式に見られる特徴と、口縁部外面の屈曲部にごく近いところに貼付三角突帯をもつ高付式に見られる特徴が見られる遺物である。うち接合した遺物3点を図化した。弥生時代中期後半から後期にかけて比定される遺物と思われる。出土遺物数も少なく、ごく限られた範囲での出土であるため、遺構に絡む遺物であった可能性も否めない。

50は壺口縁部が残存する。口唇端部は丸くおさま、口縁部断面はほぼ長方形に近い。口縁部内面の屈曲部には稜は明瞭ではなく、貼付三角突帯は2条見られる。胴部は底部に向けてゆるやかに内湾する様相である。51・52は壺胴部が残存する。口縁部は欠損し、貼付三角突帯は2条見られ、口縁部内面の屈曲部には稜は明瞭ではない。50～52は同一個体の可能性がある。

⑨ 弥生中期土器 (第79・80図)

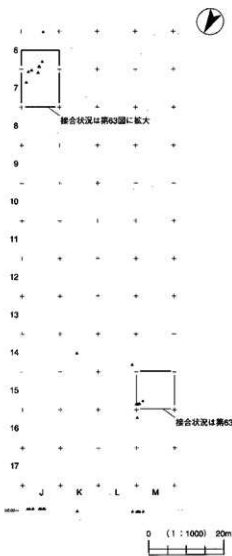
弥生中期土器と思われる土器群は、C5、F6、G3、I9・I3・16、J15～17、K14～17、M14・15、N12・14区で33点出土し、(第61図) うち接合した遺物6点を図化した。遺物は調査範囲の北西側に出土し、主にI・J16・17区、LMN14区の2箇所点に在し、ある程度の遺物の広がりが北西側に向かって広がるように見える。



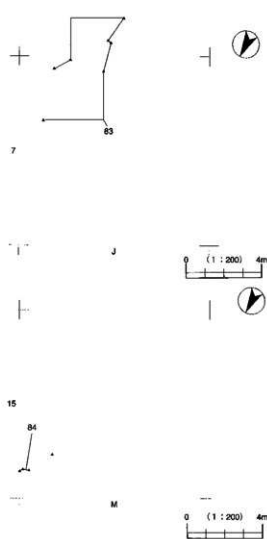


第61図 弥生中期土器 遺物出土状況図

65～69は壺底部が残存する。65・66は胴部が「八」の字形に内湾しながら大きく広がる様相をもち、底面は丸みを帯びる。65は底面端部の張出しは少なく、底面はやや粗い成形を施す。66は内外に焼成によるものと思われる器面の亀裂が多く、底面の器壁は比較的薄い。67は胴部が開いて直行し、底面は平底である。底面端部の張出しはないが屈曲部は見られる。68は胴部が「八」の字形にやや内湾しながら大きく広がる様相をもち、底面端部の屈曲部は明瞭ではなく、底面もやや狭まる。胎土中の石英・雲母が多含する。69は胴部が大きく開いて直行する様相が見られ、底面は平底で器壁が厚い。底面端部の張出しはないが屈曲部は見られる。胎土中に砂粒状の混入材が多含する。76は鉢口縁部が残存する。11唇端部をやや平たく成形し、口縁部は屈曲しながら外反する。



第62図 弥生中期後半土器 遺物出土状況図

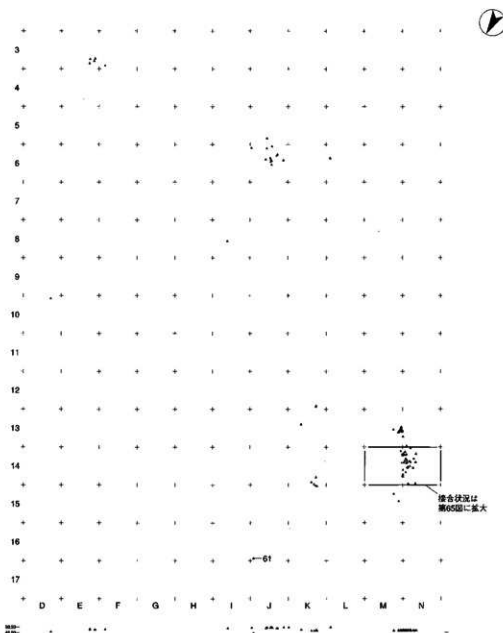


第63図 弥生中期後半土器  
J 6・7区(上段) M15区(下段) 接合状況図

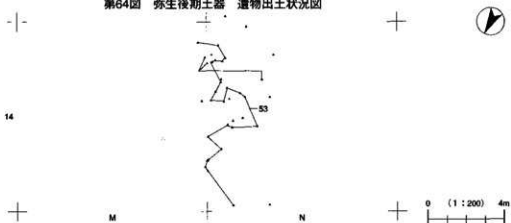
⑩ 弥生中期後半土器 (第80図)

弥生中期後半土器と思われる土器群は、J 5～7、K 14、L 14、M 15・16区で15点出土し(第62・63図)うち接合した遺物3点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の西側に疎らに出土し、主にJ 6・7区、M 15・16区の2箇所に点在し、ごく限られた範囲での出土であるため、遺構に絡む遺物であった可能性も否めない。

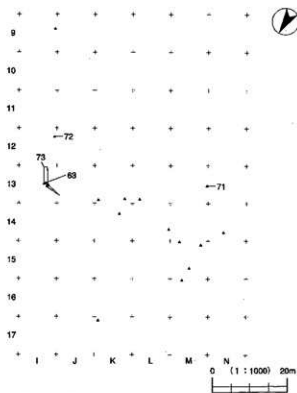
70は壺底部が残存する。胴部はやや内傾する様相を見せながら内湾し、底面端部の張出しはなく、底面屈曲部もやや省略気味にまとめる。底面はやや狭く、底面内部は肥厚し、厚い器壁の底部をもつ。胎土中に径の大きい石英が多含する。83は無痕壺である。口唇端部は粗いが平坦を意識した調整を施し、口縁部は内傾する。胴部に3条の浅い縦沈線が刻まれ、緩やかに内湾しながら底部に向う。底面は上底を早し、平坦面はもたない。全体の成形は不定で、作りが粗である。胎土中に赤褐色(2.5 YR 4/6)粒が多含し、胎土自体も本遺跡から出土した遺物とは全く異なるにぶい橙色(7.5 YR 6/4)を呈すことから搬入品の可能性がある。84は長頸壺の胴部である。頸部がやや締まり気



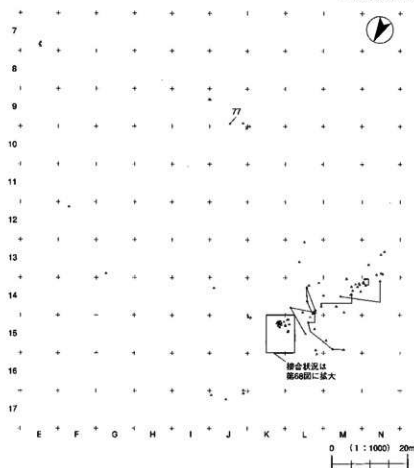
第64図 弥生後期土器 遺物出土状況図



第65図 弥生後期土器 MN14区(拡大) 接合状況図



第66図 弥生後期後半・後期末土器 遺物出土状況図



第67図 高付式の新段階タイプ 遺物出土状況図

味で、口縁部に向っての立ち上がりはやや開く様相がある。胴部は緩やかに内湾し、内面には輪積みの接合痕が見られる。

① 弥生後期土器 (第79図)

弥生後期土器と思われる土器群は、D10、E3、F3、J16、L5、18、J5・6・16、K9・12~15、L6、M13~15、N13・14区で51点出土し、(第64・65図)うち2点を図化した。遺物は主にM13・14区、J5・6区、EF3区の3箇所に着在し、特に出土が顕著なM13・14区は調査対象範囲の北西側に位置し、台地の北端部に近い立地である。

53は頸口縁部から胴部が残存する。後期土器の北候であるII層端部を丁寧に整え、口縁部外面にわずかに圧みが見られる。口縁部の平坦面は短く、口縁部の断面は長



第68図 高付式の新段階タイプ K L 15区 (拡大) 接合状況図

方形であり、口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し、口縁部内面屈曲部に稜は明瞭ではない。胴部は緩やかに窄まり、最大径は口縁部にある。胎土中に小礫が顕著に多含する。61は壺口縁部から頸部が残存する。口唇端部が平坦に鈍められ、口縁部はやや外反する。縮れ部分から口縁部の立ち上がりは短い。

⑫ 弥生後期後半・後期末土器 (第80図)

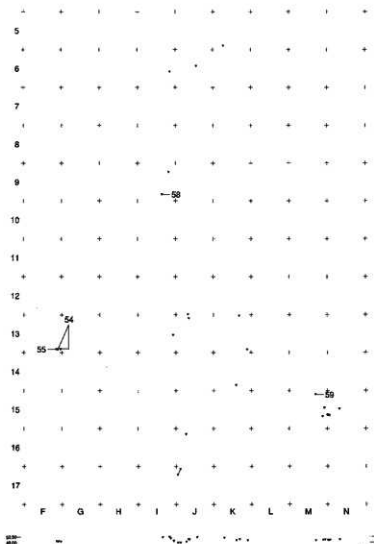
弥生後期後半・後期末土器と思われる土器群は、I9・12・13、K13・14・17、L13・14、M15・16、N14区で18点出土し、(第66図)うち接合した遺物4点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の北西側に出土し、遺物は主にKLM13～15区にある程度の遺物の広がりがあるように思える。

63は壺口縁部が残存する。口唇端部が丸くおさめられ、口縁部は開き気味に外反する。71・72は壺底部が残存する。71は胴部が内傾気味に直行し、底面端部の突出しはなく、底部屈曲部もかなり省略気味にまとめる。

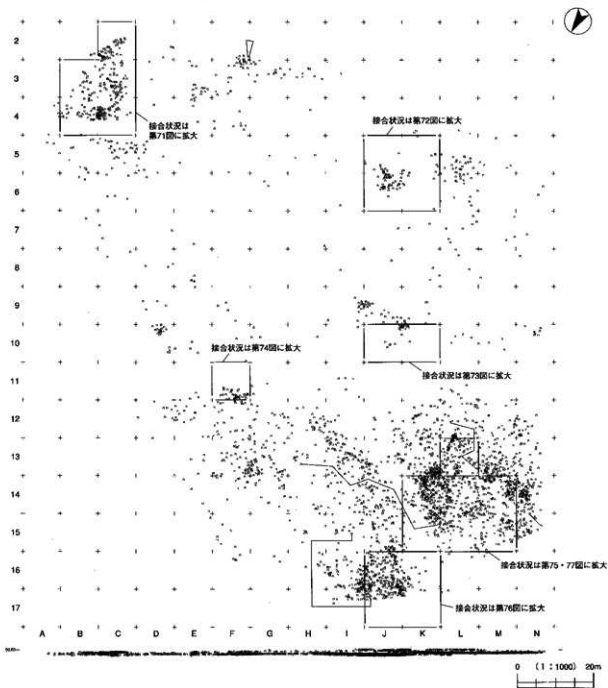
底面はかなり狭くなる。72は71より底面がかなり狭くなり、底面端部の張出しはなく、底部屈曲部もやや省略気味にまとめる。71・72は底面の形状から後期後半遺物の兆候の見られる遺物である。73は壺胴部から底部が残存する。胴部の器壁は比較的薄手で、胴部は窄まるように丸くおさまり、底部に向かってかなり内湾する。底面は丸底であり、接地面は小さい。胴部内面に輪積みの接合痕が見られる。また63と同一個体と思われる、底面の形状から63・73は後期末遺物の兆候の見られる遺物である。

⑬ 高付式の新段階タイプ (第79・80図)

SJ2で出土したタイプの土器群は、E7、F12、G13、I9、J9・10、L4・16・17、K9・



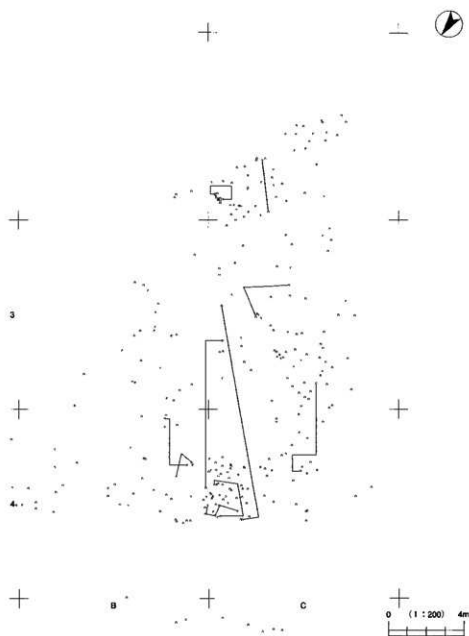
第69図 中津野式土器 遺物出土状況図



第70図 弥生土器 遺物出土状況図

15、L13~16、M14・15、N13・14区で93点出土し、(第67・68図)うち接合した遺物2点を同化した。遺物は調査範囲の北西側に集まって出土し、遺物は主にLMN14・15区に遺物の広がりがあるように思える。

62は壺口縁部から胴部が残存する。口唇端部は丁寧に平坦面が作られ、窪みをもつ。口縁部はやや外反し、縷れ部分から口縁部の立ち上がりは短い。頸部縷れ部分は稜が確認できるほど、明確な調整が施される。胴部は緩やかに内薄し、器壁は薄い。胎土中に小礫を含む混入材が多含する。77は鉢口縁部から胴部が残存する。口唇端部を平たく成形するがやや粗く、口縁部はやや外反気味に立ち上がり、胴部の張りも緩やかである。

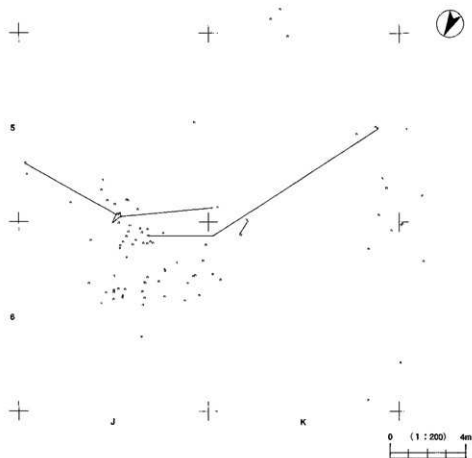


第71図 弥生土器 BC 3・4区 (拡大) 接合状況図

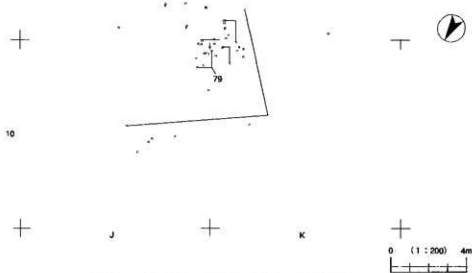
④ 中津野式土器 (第79図)

弥生時代後期後半に比定される中津野式土器は、F13、I6・9、J6・12・13・16・17、K5・13・14、M15、N15区に23点出土し、(第69図)うち接合した遺物4点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、遺物は調査範囲の北西側にまとまって出土し、主にMN15区にある程度の遺物の広がりがあるように思える。

54・55は頸口縁部が残存し、口唇端部は丸くおさめられ、口縁部は緩やかに外反する。54は口縁部外面に斜位の擦過痕が見られる。55は口縁部外面に斜位の擦過痕らしい調整が見えるが明確ではない。58は胴部から底部が残存する。胴部はやや緩やかに内湾気味に立ち上がり、胴部と底部



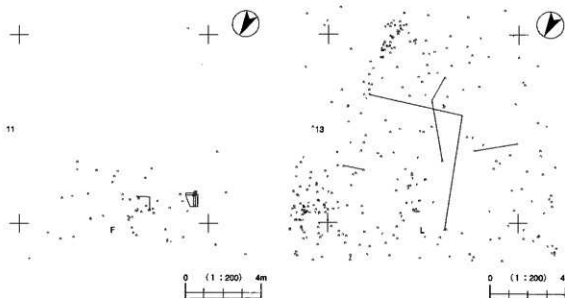
第72図 弥生土器 J K 5・6区(拡大) 接合状況図



第73図 弥生土器 J K 10区(拡大) 接合状況図

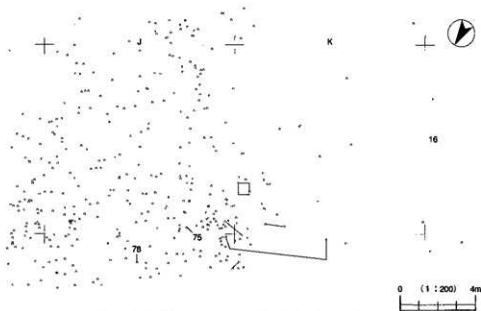
の縁れ部分は稜が確認できるほど、明確な調整が施される。脚の縁れは従来のものより肉厚であり、在地化したタイプと思われる。作出された脚は短く、僅かに外反する。脚端部は平坦面をつくり、窪みが見られ、外面がやや肥厚気味である。59は脚部が残存する。58と同様に脚の縁れは従来のものより肉厚であり、在地化したタイプと思われる。作出された脚は短く、僅かに外反する。脚端部は丸くおさめる。





第74図 弥生土器 F11区 (拡大) 接合状況図

第75図 弥生土器 L13区 (拡大) 接合状況図

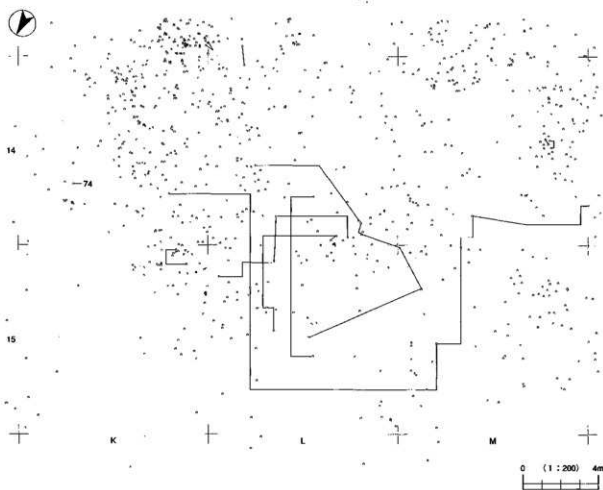


第76図 弥生土器 J K 16区 (拡大) 接合状況図

⑬ 弥生土器 (第80図)

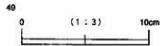
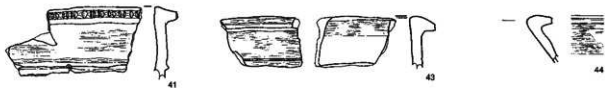
弥生土器は遺物が小片で分類が不可能であったもので、胎土、調整の様子から弥生土器と思われる土器を指す。弥生土器は調査範囲のほぼ全域にわたって3327点出土し、(第70～77図)、うち6点を図化した。主な出土範囲はAB2～4区、JKL5・6区、JK9・10区、D～N12～17区に広がり、特にD～N12～17区は遺物密度も濃く、調査対象範囲の北西側に、ある程度の遺物の広がりが北西側に向かって広がるように思える。

74は壺口縁部である。口唇部の張出しは小さいが、口唇部の平面に波状文を施した後、ボタン状の突起を付けたものである。75は壺底部である。底面にボタン状の突起を付けたものと思われ、

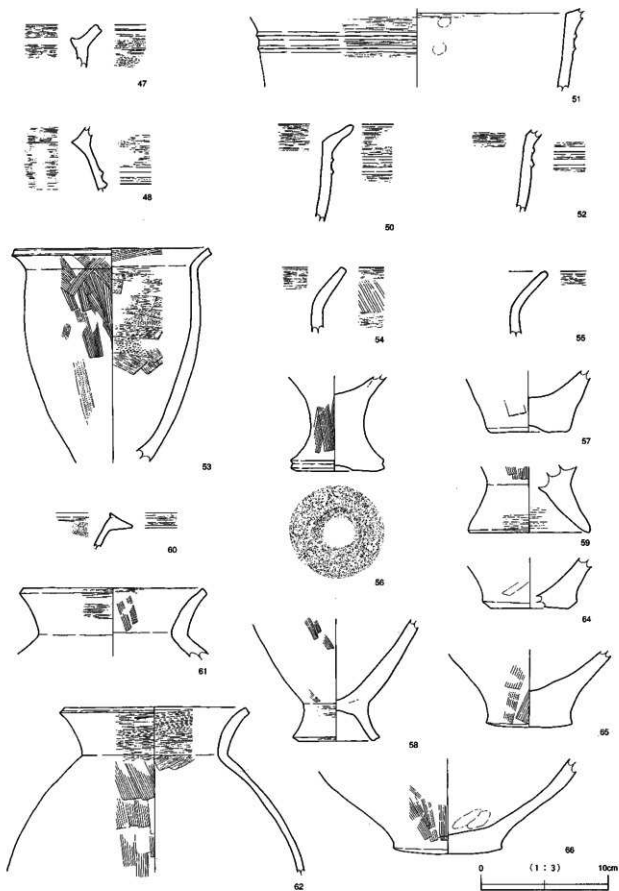


第77図 弥生土器 K～M14・15区（拡大） 接合状況図

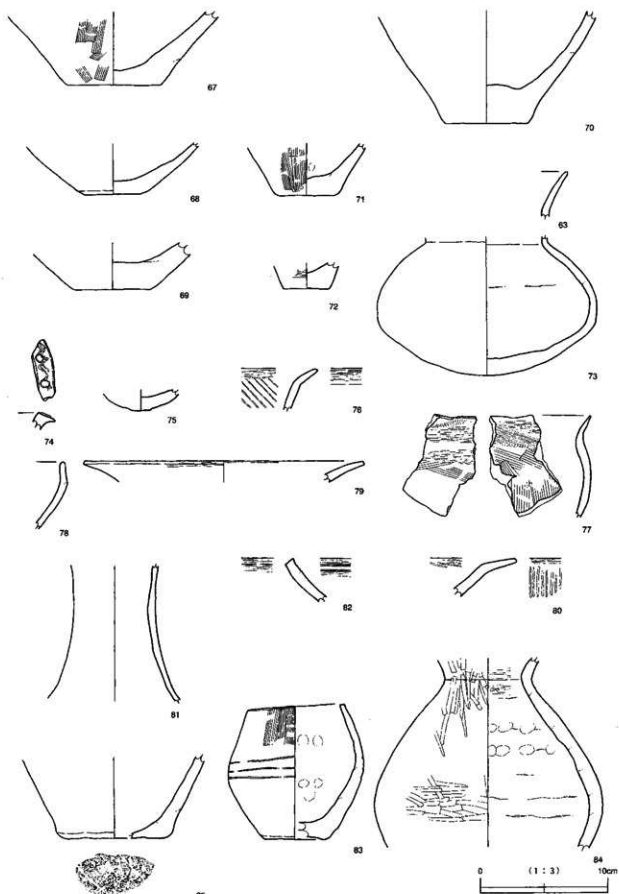
接地面は狭い。78～81は高坏である。78は高坏口縁部から胴部が残存する。口唇部は丸くおさまり、口縁部は浅い「く」の字で屈曲し段を形成して内傾する。79・80は口縁部が残存する。79は口唇部が丸くおさまり、口縁部は外反する。80は口唇部がやや平坦に成形され、口縁部は「く」の字で屈曲し口唇部に向って直行する。81は脚部が残存する。器壁が薄手で、底面に向って緩やかに開く。胎土中に小礫が顕著に多含する。



第78图 包含層出土 弥生土器 1



第79图 包含層出土 弥生土器 2



第80图 包含層出土 弥生土器 3



第20表 弥生土器 壺 出土遺物

調査番号	発見番号	出土状況 (発掘)	種類	形状	分類	胎土							色 質 上段：内面 下段：内面	底文・刷痕 上段：内面 下段：内面	出土 (m)		備考			
						石 瓦	灰 土	赤 土	黒 土	赤 土	赤 土	赤 土			口徑	底径				
第19区	80	2325	高1区 弥生土層	壺	口縁部 山ノ内式	○							1996A 1996B 1996C 1996D	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	3.7	口縁部の内面に赤土を 施す	
第19区	41	2057	高1区 弥生土層	壺	口縁部 弥生土層	○							1996E 1996F 1996G	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	5.4	口縁部の中程 に赤土を施す	
第19区	42	2058	高1区 弥生土層	壺	口縁部 弥生土層	○							1996H 1996I 1996J	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	13.0	—	11.1	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	43	2059	高1区 弥生土層	壺	口縁部 弥生土層	○							1996K 1996L 1996M	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	3.6	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	44	4772	高1区 弥生土層	壺	底面 人形1式	○							1996N 1996O 1996P	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	4.9	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	45	2067	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1996Q 1996R	赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	4.6	8.1	口縁部の内面に 赤土を施す		
第19区	46	1810・1816 1817・1827 2062	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1996S 1996T 1996U 1996V	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	5.6	2.1の赤土を 施す	
第19区	47	903	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1996W 1996X 1996Y	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	7.6	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	48	1式未定 480	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1996Z 1997A 1997B	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	4.4	4.0	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	49	909	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997C 1997D 1997E	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	6.9	2.7	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	50	142・440	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997F 1997G 1997H	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	6.4	5.0	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	71	9	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997I 1997J 1997K	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	4.9	1.5	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	72	118	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997L 1997M 1997N	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	2.6	2.1	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	73	122・127	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997O 1997P 1997Q	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	10.9	—	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	74	2068	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997R 1997S 1997T	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	1.4	—	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	75	2066	高1区 弥生土層	壺	底面 弥生土層	○							1997U 1997V 1997W	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	1.3	1.3	口縁部の内面に 赤土を施す

第21表 弥生土器 鉢 出土遺物

調査番号	発見番号	出土状況 (発掘)	種類	形状	分類	胎土							色 質 上段：内面 下段：内面	底文・刷痕 上段：内面 下段：内面	出土 (m)		備考		
						石 瓦	灰 土	赤 土	黒 土	赤 土	赤 土	赤 土			口徑	底径			
第19区	76	2070	高1区 弥生土層	鉢	口縁部 弥生土層	○							1997X 1997Y 1997Z	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	3.2	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	77	2069	高1区 弥生土層	鉢	口縁部 弥生土層	○							1998A 1998B	赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	8.1	口縁部の内面に 赤土を施す

第22表 弥生土器 高坏 出土遺物

調査番号	発見番号	出土状況 (発掘)	種類	形状	分類	胎土							色 質 上段：内面 下段：内面	底文・刷痕 上段：内面 下段：内面	出土 (m)		備考		
						石 瓦	灰 土	赤 土	黒 土	赤 土	赤 土	赤 土			口徑	底径			
第19区	78	388	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998C 1998D 1998E	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	5.0	—
第19区	79	1967・1967	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998F 1998G 1998H	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	21.8	—	1.7	—
第19区	80	4761	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998I 1998J 1998K	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	3.0	口縁部の内面に 赤土を施す
第19区	81	3548・1947 2073	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998L 1998M 1998N	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	10.1	口縁部の内面に 赤土を施す

第23表 弥生土器 その他の器種 出土遺物

調査番号	発見番号	出土状況 (発掘)	種類	形状	分類	胎土							色 質 上段：内面 下段：内面	底文・刷痕 上段：内面 下段：内面	出土 (m)		備考			
						石 瓦	灰 土	赤 土	黒 土	赤 土	赤 土	赤 土			口徑	底径				
第19区	82	399	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998O 1998P 1998Q	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	3.4	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	83	1970・1971 2074・2022	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998R 1998S 1998T	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	3.2	4.8	10.4	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	84	1931・1932 482	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998U 1998V 1998W	赤土・ナガ 赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	14.9	口縁部の内面に 赤土を施す	
第19区	85	2072	高1区 弥生土層	高坏	口縁部 弥生土層	○							1998X 1998Y	赤土・ナガ 赤土・ナガ	上段：内面 下段：内面	—	—	2.6	4.4	口縁部の内面に 赤土を施す

#### 4 古墳時代の調査

全面調査（2次）では、古墳時代の遺構は確認することは出来なかった。

##### (1) 包含層出土遺物

古墳時代の包含層出土遺物として、成川式土器、笹貫式土器が確認された。

##### ① 成川式土器（第81図）

成川式土器はF11・12、J13・15・16、K13・14、L13・14、M15区で24点出土し、（第82図）うち接合した遺物3点を図化した。出土数が少ないため、明確な出土範囲は言及できないが、主に出上したのは調査範囲の北西側に広がっているように思われる。

86は雙口縁部が残存する。口唇部を丸くおさめ、口縁部は先端がかすかに外反する。胎土中に雲母・石英が多含する。87・88は傘口縁部である。87は口唇部が丸くおさまり、口縁部が大きく外反する。88は口唇部を平たく成形し、浅い窪みが見られ、口縁部が大きく外反する。

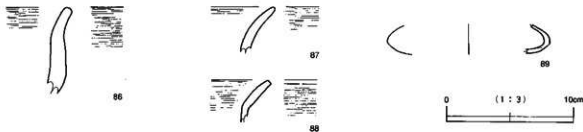
##### ② 笹貫式土器（第81図）

笹貫式土器はI17、J17、K9、L12～15、M14・15区で47点出土した。この遺物の中に外面に赤彩を施した遺物が15点確認された。これらの遺物はLM14・15区で確認され、（第83図）うち接合した遺物1点を図化した。出土遺物数も少なく、ごく限られた範囲での出土であるため、遺構に絡む遺物であった可能性も否めない。

89は小型埴輪部が残存する。胴部がかなり内湾し、その胴部の所々に赤褐色（2.5YR4/6）の塗布が見られる。胎土中に比較的小礫を多含する。

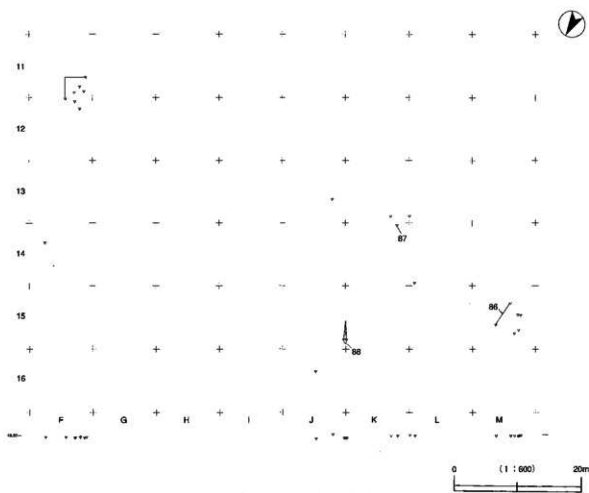
第24表 成川式土器・笹貫式土器 出土遺物

調査区	遺物番号	出土式土器(遺物)	器種	形状	分類	胎土						色 質 上段・内面 下段・外面	裏文・裏脚 上段・内面 下段・外面	数量 (個)			備考	
						赤	黒	黄	緑	青	紫			白	赤	黒		
第15区	86	成川式土器 口唇部・口縁部	壺	口唇部	成川式土器	○	○					○	2000-2100 2200	黄トクマツツ 赤トクマツツ	—	—	1	内面に赤彩を施した遺物
第15区	87	成川式土器 口唇部・口縁部	壺	口唇部	成川式土器	○	○					○	2000-2100 2200	黄トクマツツ 赤トクマツツ	—	—	1	内面に赤彩を施した遺物
第15区	88	成川式土器 口唇部・口縁部	壺	口唇部	成川式土器	○	○					○	2000-2100 2200	黄トクマツツ 赤トクマツツ	—	—	1	内面に赤彩を施した遺物
第15区	89	成川式土器 口唇部・口縁部	壺	口唇部	成川式土器	○	○					○	2000-2100 2200	黄トクマツツ 赤トクマツツ	—	—	1	内面に赤彩を施した遺物

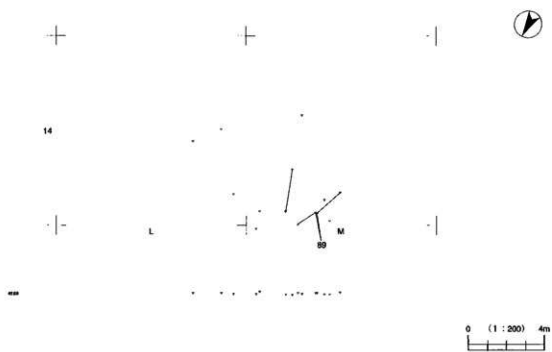


第81図 包含層出土 成川式土器・笹貫式土器





第82図 成川式土器 遺物出土状況図



第83図 笹貫式土器 赤採土器 遺物出土状況図

## 5 古代以降の調査

### (1) 遺物集積

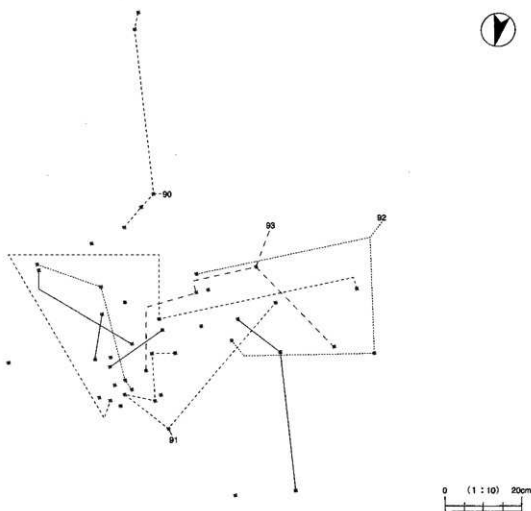
全面調査(2次)では、遺物集積(以下「SU」と表記)が1基確認された。

#### ① SU1(第84図)

SU1はE12区より検出された。検出層はII層である。遺構の平面プランは隅丸長方形であり、長軸は1.36m、短軸は1.00mを測る。長軸の向きは南南東から北北西軸に延び、遺構の掘り込みは確認できなかった。遺構内遺物は古代須恵器38点、古代土師器7点、軽石2点、焼磯1点が出土し、遺構のほぼ中央で敵目痕のある古代須恵器(91・93)が4層ほどに重なり、その南側に古代土師器の坏(90)が潰れた状態で出土した。



第84図 全面調査(2次) SU1 平面・断面図



第 85 図 全面調査(2次) SU1 接合状況図

**SU1内出土遺物**

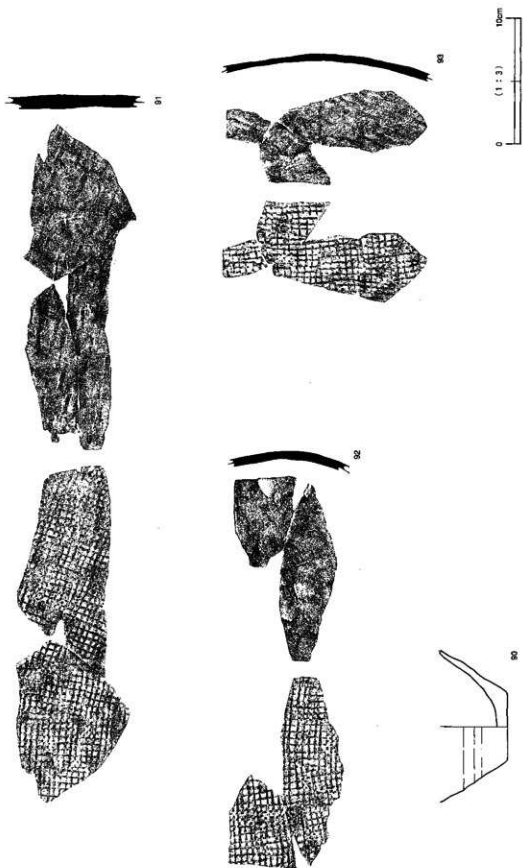
90は土師器の坏である。半損の状態で、口唇部が欠損する。体部はほぼ直線的に立ち上がり、底部屈曲部もやや省略気味にまとめる。91～93は同一個体と思われ、外面は格子状の敷き目目で調整され、内面は平行当て具の痕跡が見られる。器壁は薄く、胴部の張りは弱い。

第 25 表 全面調査(2次) SU1出土 土師器

調査番号	図号	図記番号	出土区画 出土層 (埋蔵)	種類	形状	分類	土					数量 (個)		備考	
							赤	黄	黒	青	白	口部	底面		
表85図	90	490・491 490・492 474	512区 301 瓦層	坏	半損	1個群					○	○	1	1.3	出土区画90のG. 910 5号埋蔵層の4に表対 照可能か?

第 26 表 全面調査(2次) SU1出土 須恵器

調査番号	図号	図記番号	出土区画 出土層 (埋蔵)	種類	形状	分類	土					数量 (個)		備考		
							赤	黄	黒	青	白	口部	底面			
表85図	91	492・493 493・494 493・494	512区 301 瓦層	坏	半損	3個群	赤土色	7.000%	なし	褐色	2.000%	黒色	0.000%	0	14.4	91・92と同一個体 埋蔵層不明
表85図	92	493・494 494	512区 301 瓦層	坏	半損	2個群	赤土色	7.000%	なし	褐色	2.000%	黒色	0.000%	0	1.4	91・92と同一個体 埋蔵層不明
表85図	93	494・494 493・493	512区 301 瓦層	坏	半損	2個群	赤土色	7.000%	なし	褐色	2.000%	黒色	0.000%	0	14.2	91・92と同一個体 埋蔵層不明



第96圖 全面調査(2次) S U 1 出土遺物

## (2) 溝状遺構

全面調査（第2次）で確認された溝状遺構は調査範囲のほぼ全域にわたって37基確認された。

全面調査（第1次）の調査結果同様に、近年実施された構造改善により、場所により遺物包含層が削平を受け、Ⅵb・Ⅷ層まで削平を受けているところが見受けられた。そのため遺構深度により検出面から遺構床面までが比較的浅い調査結果となった。

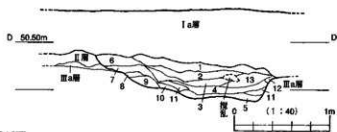
### ① SD1（第88図）

SD1はK9・10区、L9～12区、M12・13区から検出された。検出層はⅢa層上面である。遺構は南東から北西軸に直線的に延び、北西端から南西方向にはほぼ直角に曲がる形状である。遺構の横幅は1.28～2.00mほどでその幅は遺構全体に維持されている。南東端は削平を受けていると思われ、先細りに検出された。層の掘り込みはⅡ層から確認できた。（第87図）遺構の性格は土層断面において水成堆積層は確認できないことから水路使用ではなく、また床面に一部に硬化面は確認されたが全体的には見られず、道として頻繁に使用されたものではないと思われる。

なお、遺構内からは64点の遺物が確認された。磁類（焼酎・蛭石を含む）40点、縄文晩期上層3点、弥生土器20点、肥前焼小片1点である。遺構埋土に複発時期の遺物がありこれらの遺物は、溝の埋没段階で流入したものと思われる、出土結果から遺構の使用時期は近世以降と思われる。

### SD1出土遺物

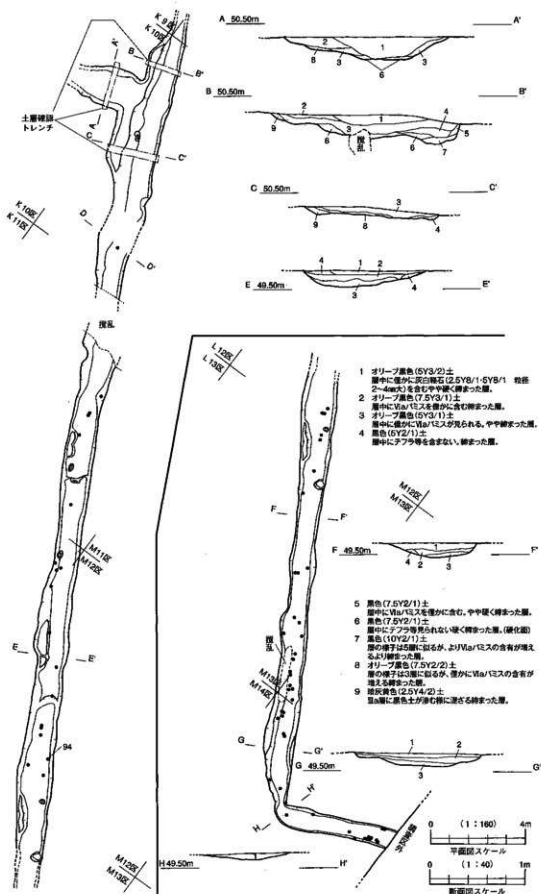
94は近世の肥前焼底部が残存する。小片であり高台部分と思われる部分が欠けているが陶と思われる。内面に2条の細線の文様が施される。



DD 断面

- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1 オリーブ黒色(5Y3/1)土    | 層中に灰白蛭石(10Y6/1 粒径2~6mm)を含む層になった層。            |
| 2 オリーブ黒色(7.5Y3/1)土  | 層の縁子は1層に広がるが、灰白蛭石の含有が減少。1層よりも薄まった層。          |
| 3 オリーブ黒色(7.5Y3/1)土  | 層中テフラ等見られない。跡まりはあるが、2層よりはかなり見られにくい層          |
| 4 黒色(6Y3/1)土        | 層の縁子は5層に広がるが、よく層まった層。層の厚さ1層に広がる。             |
| 5 オリーブ黒色(7.5Y2/2)土  | 層中に骨かに明茶褐色(10Y6/6 粒径1~2mm)を含む層になった層。層に若干穴あり。 |
| 6 オリーブ黒色(6Y3/1)土    | 層中にテフラ等見られない層になった層。                          |
| 7 褐色(7.5Y2/1)土      | 層中に骨かに灰白蛭石(5Y3/1 粒径3~5mm)を含む層になった層。層に穴ありがある。 |
| 8 褐色(7.5Y2/1)土      | 層の縁子は5層に広がるが、骨かに多く含まれる。層に穴ありがある。             |
| 9 土褐色(7.5Y2/1)土     | 層の縁子は5層に広がるが、骨かはない層になった層。7層よりも厚さは低い。         |
| 10 黒褐色(2.5Y3/2)土    | 層中にテフラ等見られない層になった層。(Ⅲa層の遺物?)                 |
| 11 黒色(5Y2/1)土       | 層中にテフラ等含まない層になった層。                           |
| 12 暗灰褐色(2.5Y4/2)土   | Ⅲa層に褐色土が混む層に混ざる層になった層。                       |
| 13 オリーブ黒色(7.5Y3/1)土 | 層の縁子は3層に広がるが、やや柔らかい層。                        |

第87図 全面調査(2次) SD1 南壁土層断面図



第88図 全面調査(2次) SD1 平面・断面図

第27表 全面調査(2次) SD1 出土遺物

調査 番号	番号	記録 番号	出土区 (層別)	種類	形状	分類	胎土			胎土・器壁 上段：内面 下段：内面	底文・脚文 上段：内面 下段：内面	寸法 (cm)			備考	
							赤土 色	白土 色	灰土 色			口径	底径	高さ		
第117表	別	396	Ⅲa層中	磁?	底面	底面	胎土色 赤土	白土	灰土	—	—	胎土	—	—	1.1	品別?

② SD2・3 (第89図)

SD2はL12～14区、M13・14区、SD3はL12・13区から検出された。いずれも検出層はⅢa層上面である。SD2はほぼ東西、南北軸に方向に方形に廻り、南西端が南側に延びる。遺構の一部は、SK9・10・12・14に切られ、SD3を切っている。SD3は南西から北東方向に延び、北東端がSD2に切られている。SD3・4の横幅はいずれも幅狭で0.24～0.38mを測り、遺構深度も0.02～0.06mと浅い。

なお、SD2からは弥生土器と思われる4点の遺物が、SD3からは入式土器1点、弥生土器1点、土師器1点が確認された。切り合いの関係から、SD3がSD2より以前に使用された遺構であると判断できるため、SD3の出土結果から古代以降に使用された可能性も否めない。このことからSD2についても古代以降の使用の可能性もある。

SD3出土遺物

95は土師器の壺口縁部と思われる。小片であるため器壁の薄さから鉢の可能性もある。胎土中に赤褐色(2.5YR4/6)粒を多含する。

第28表 全面調査(2次) SD3 出土遺物

調査 番号	番号	記録 番号	出土区 土層 (層別)	種類	形状	分類	胎土						色 澤 上段：内面 下段：内面	底文・脚文 上段：内面 下段：内面	寸法 (cm)			備考
							赤 土 色	白 土 色	灰 土 色	赤 土 色	白 土 色	灰 土 色			口径	底径	高さ	
第117表	別	312	L13区 Ⅲa層上	磁?	円筒形	上段	○					胎土色 赤褐色	胎土色 赤褐色	—	—	1.28	胎土中に赤褐色 2.5YR4/6粒を多 含する	

③ SD4 (第89図)

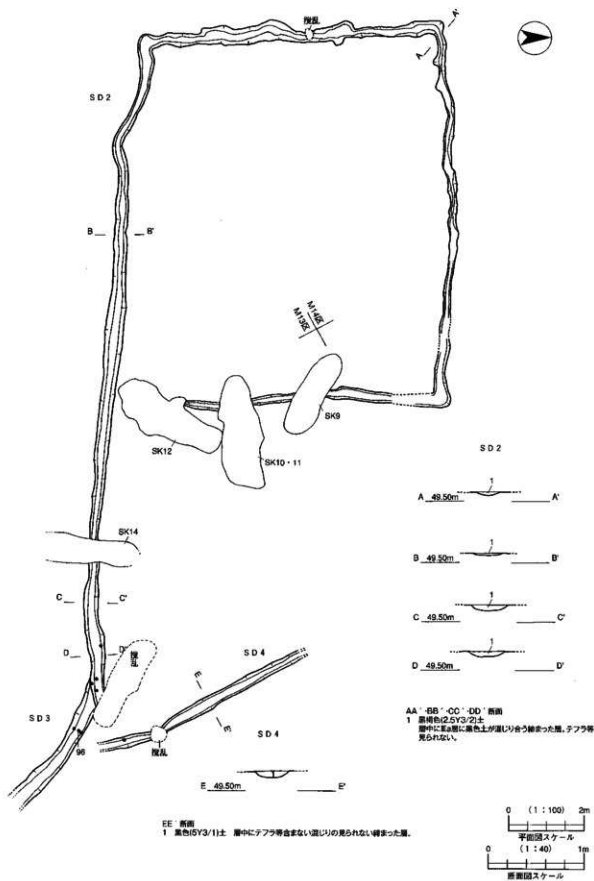
SD4はL12・13区から検出された。検出層はⅢa層上面である。遺構は東北東から西南西軸に直線的に延びる。SD4はSD2・3と同様に遺構の横幅が狭小で0.25～0.40mを測り、遺構深度も0.06mと浅い。床面に硬化面等見当たらず、遺構の性格は不明である。

なお、SD4からは遺物は埴貫式土器が1点確認され、遺構の使用時期については古墳時代後期以降の可能性もある。

④ SD5 (第121図)

SD5はK9区で検出された。検出層はⅥa層上面である。遺構は北西から南東軸に直線的に延び、南東端をSK54・55に切られ、北西端は攪乱により切られているため、全体の形状は判然としなないが、遺構の構造から溝状遺構として整理した。遺構の横幅は0.70～0.80mを測り、遺構深度は0.05mと浅い。床面に硬化面等見当たらず、遺構の性格は不明である。

なお、SD5からは礫1点のみ確認されており、遺構の使用時期については不明である。



第 89 図 全面調査(2次) SD2・SD3・SD4 平面・断面図

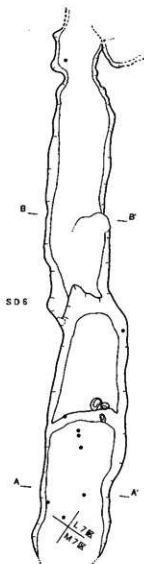




平高 新築区10AA'-BB'

- 1 浅黄褐色(10Y7.5/4)砂土 層中に一部に黒色土が混じる。ホウ層。(柱径2~5cm大)  
 4 黒褐色(2.5Y3/1)土 層の様子に3層に似るが、黒色がより暗く厚層。  
 5 黒褐色(2.5Y3/1)土 層の様子は2層に似るが、比較的砂の含有が多い。

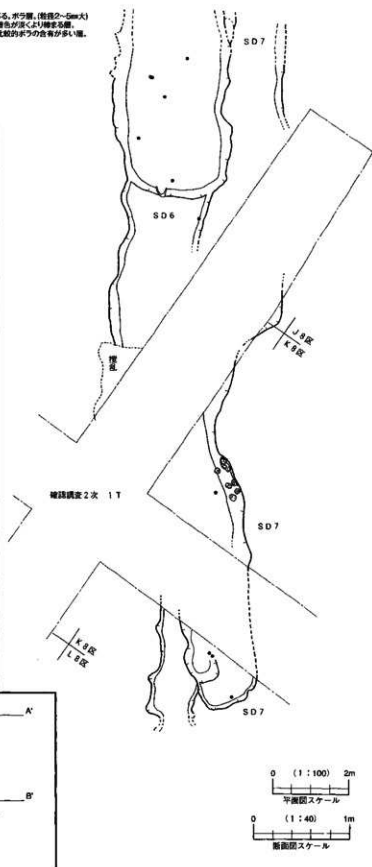
K 9 区  
L 9 区



A 50.50m



B 50.50m



雑瓦

K 8 区  
L 8 区

0 (1:100) 2m

平面図スケール

0 (1:40) 1m

断面図スケール

第90図 全面調査(2次) SD6・SD7 平面・断面図 1



⑤ SD6・7 (第90・91図)

SD6はIJ9・10区、K8・9区、LM7・8区、SD7はIJ9・10区、K8・9区で検出され、いずれも検出層はVIa層である。SD7がSD6を切る状態で、並列するように検出され、西南西から東北東方向に直線的に延び、SD6の東北東端が南東方向にほぼ直角に曲がる形状である。SD6は遺構の横幅が1.82～2.80mとやや広く、遺構深度も0.26～0.37mと比較的深く、埋土上位にボラ層が層厚に堆積する場所もある。また、遺構の北半分からは床面に硬化面と思われる層が続き、道として使用されたと思われる。SD7は遺構の横幅はSD6と変わらないが、遺構深度は0.10～0.15m程度と浅い。検出した段階で硬化面と思われる層が露出し、SD6と同様に道として使用されたと思われる。

SD6からは24点の遺物が確認された。種類(焼礫を含む)11点、石器1点、縄文晩期土器1点、弥生土器9点、龍門司系薩摩焼1点(96)、鉄製品1点である。SD1と同様に遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと認められ、出土結果から遺構の使用時期は近世以降と思われる。またSD7はSD6を切っていることから、SD7の使用時期についても近世以降の可能性がある。

なお、SD7からは6点の遺物が確認され、種類(焼礫を含む)4点、弥生土器2点が出土した。

SD6出土遺物

96は龍門司系薩摩焼の碗底部である。高台はやや開いて直行し、短脚である。胴部外面に白化粘土のコーティングされた部分が見られ18C後半頃のものと思われる。

第29表 全面調査(2次) SD6 出土遺物

検出番号	方位	出土層	出土時期	種類	形状	分庫	検出位置		検出深度		検出層		備考
							東	西	上	下	上	下	
96	南	VIc	近世	碗	底部	陶器	2.910	2.910	0.00	0.00	1.4	1.1	龍門司系土器96

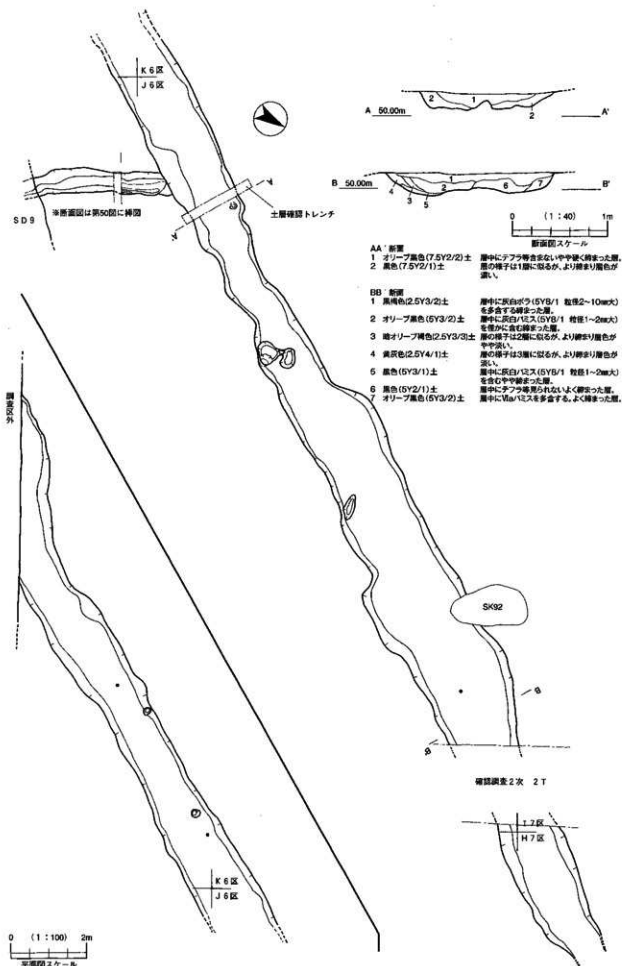
⑥ SD8 (第92図)

SD8はHI9・10区、K8・9区、LM7・8区で検出された。検出層はVIa層である。SK92に切られ、SI4・5、土坑101・102を切っている。一部にJ5・6区と同様の埋土である枝分かれ部分があるが、南西から北東軸に直線的に延び、その軸方向はSD6にほぼ平行に並ぶ様相を見せる。遺構の横幅は1.42～2.50mと、やや起伏も見られるがほぼ平均的に横幅が維持されている。遺構床面には硬化とまではいかないが、やや締まった層が見られ、道としての使用の可能性はある。

なお、SD8からは31点の遺物が確認された。種類(焼礫を含む)12点、弥生土器18点、中津野式土器1点である。遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと認められ、軸方向がほぼ同じことからSD6・7とほぼ同時期に使用されていた可能性がある。

⑦ SD9・10・11・12 (第93図)

SD9はJK5区、I5・6区、GH6区、SD10はG6区、H5・6区、IJ5区で、SD11はF6区、GH5・6区、I5区、SD12はH5・6区、I5区で検出された。検出層はいずれもVIa層である。これらの遺構はほぼ胴軸方向に並び、南西から北東軸に直線的に延び、近くで検出されているSD8とはやや東側に傾く軸方向であるため、SD8との関連性は低いと考えられる。



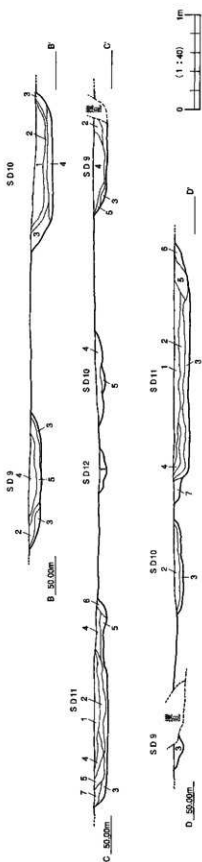
第92図 全面調査(2次) SD8 平面・断面図



SD9の横幅は1.00～1.28mでほぼ同じ幅を維持して検出されたが、SD10は横幅が広いところで2.16mであるが、北東に向かうに従い遺構幅は狭くなり、北東端で先細りの様相を見せる。SD11は横幅が幅広くところで3.12m、南西端側は2.0mを測り、北東端は急激に窄まるように検出された。この先細りの様相は遺構使用時期の周辺地形と、構造改善事業によって削平されたことが関係しており、SD9～12の北東側は7層上面まで削平が見られていた。SD9～11はいずれの床面もやや縮まる、またはさらによく縮まる層が見られることから、道としての使用の可能性がある。

SD12はSD10に沿って検出され、SD10を切っている。遺構の横幅は0.34mで、遺構深度も0.08mと浅く、検出された長軸方向の範囲も狭い。床面に硬化した層は確認できなかった。

なお、SD9からは2点の遺物が確認され、礎1点、弥生土器1点、SD10からは3点の遺物が確認され、礎1点、弥生土器1点、黒陶片と思われる陶器片1点、SD11からは7点の遺物が確認され、礎4点、弥生土器2点、土師器片1点が出土した。SD8との軸方向のズレから多少の時期差はあると思われるが、SD10から出土した黒陶片と思われる陶器片から、同軸をもつSD9～12は近世以降に使用されたことが考えられる。



SD9 BB-CO 断面  
1-3は遺構の層相を示す形  
4 オール・遺色 (0.9/2) 土  
5 遺色 (2.5/3.1) 土  
6 遺色 (2.5/3.1) 土  
7 遺色 (2.5/3.1) 土

SD10 BB-CO 断面  
1-3は遺構の層相を示す形  
4 オール・遺色 (0.9/2) 土  
5 遺色 (2.5/3.1) 土  
6 遺色 (2.5/3.1) 土  
7 遺色 (2.5/3.1) 土

SD11 CC-DO 断面  
1 遺色 (2.5/3.1) 土  
2 遺色 (2.5/3.1) 土  
3 遺色 (2.5/3.1) 土  
4 遺色 (2.5/3.1) 土  
5 遺色 (2.5/3.1) 土  
6 遺色 (2.5/3.1) 土  
7 遺色 (2.5/3.1) 土

SD12 CC 断面  
1 遺色 (2.5/3.1) 土  
2 遺色 (2.5/3.1) 土  
3 遺色 (2.5/3.1) 土  
4 遺色 (2.5/3.1) 土  
5 遺色 (2.5/3.1) 土  
6 遺色 (2.5/3.1) 土  
7 遺色 (2.5/3.1) 土

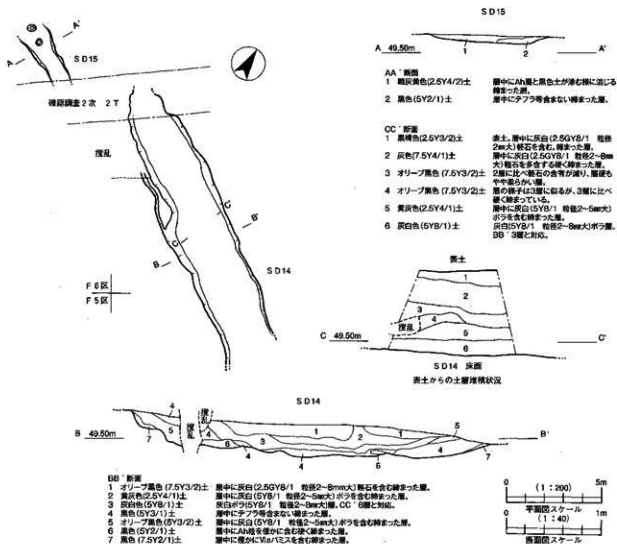
第94図 全面調査(2次) SD9・SD10・SD11・SD12 断面図



遺構の南東側は検出が出来なかった。遺構深度は深いところで0.32mを測り、埋土上位にはSD6で見られたようなボラ層が顕著に堆積していたことから使用時期は近世以降の可能性がある。また、C-C'断面で見られるように、ボラ層が表土層に削平されている形跡が見られる。(第96図) いずれにしても今後の近辺の調査により、ボラ層の自然堆積層の類例を待たなければ、遺構の使用時期については詳細が得られない。遺構床面には層中にA h粒を僅かに含む硬く締まった層が貼束に似る様に堆積していた。従って道としての使用の可能性がある。遺構内から遺物は確認できなかった。

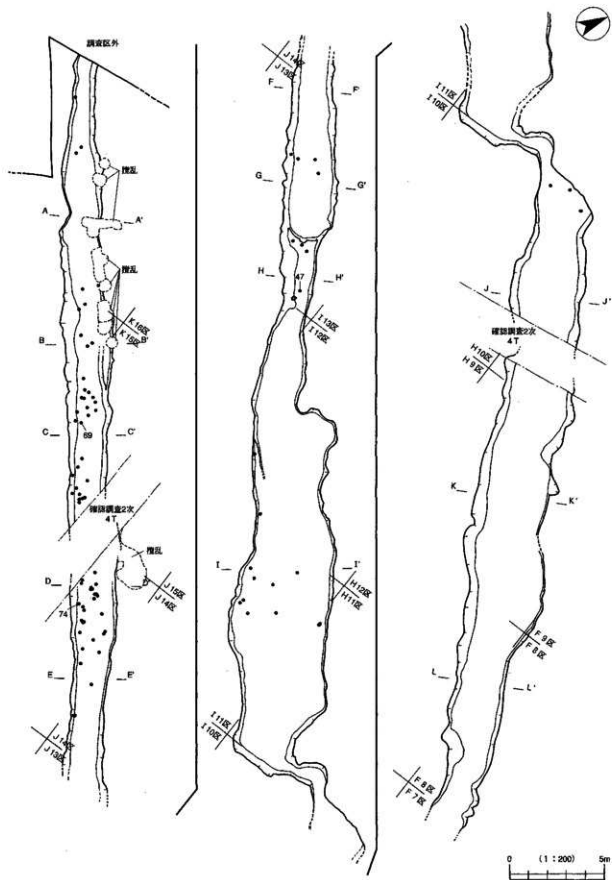
⑩ SD15 (第96図)

SD15はF7区で検出された。検出層はVIa層である。SD16と同軸に並び、SD14とは平行に並ぶ位置関係である。遺構はごく短く、横幅は南東端が狭く1.00mであり、北西端は1.5mと北西に向かうに従い、遺構幅が広くなる様相がある。遺構床面にはSD14の床面で見られるような層中にA h粒を含む締まった層が貼束に似る様に堆積していた。従って道としての使用の可能性

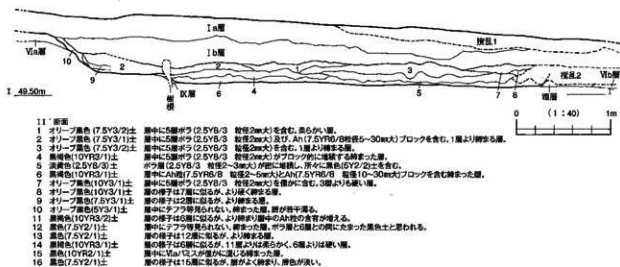


第96図 全面調査(2次) SD14・SD15 平面・断面図





第97図 全面調査(2次) SD16 平面図



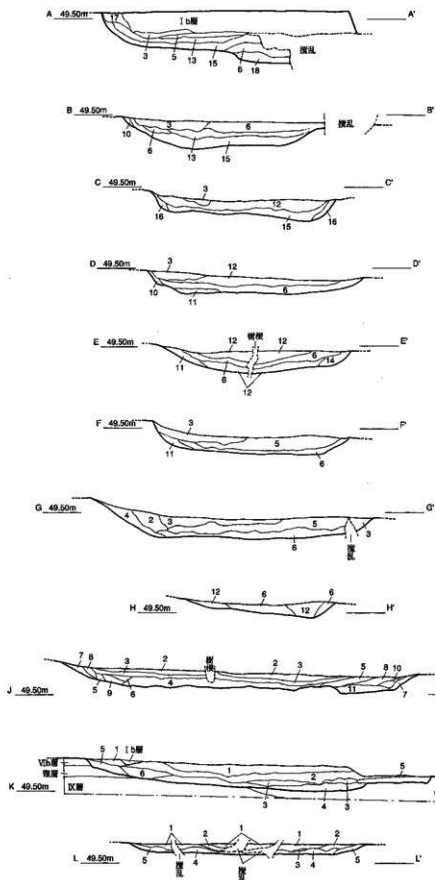
第98図 全面調査(2次) SD16 南壁土層断面図

があり、床面の状態がSD14と似ていることからSD14とSD15は同一遺構であり繋がっていた可能性がある。遺構内から遺物は確認できなかった。

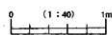
#### ⑩ SD16 (第97図)

SD16はF7・8区、G8~10区、H-10・11区、I11・12区、J12~14区、K14・15区、ML16・17区の広範囲で検出された。検出層は概ねVia層であるが、削平よりVIII層上面で検出された所も見られた。南南東から北北西軸に延び、北北東端から調査区外に延びていく様相が見られる。遺構の形状は帯状に延びるが、I10・11区クランプ状に屈曲し、また同軸状に延びている。これはSD6に見られた「SD6の東北東端が南東方向にほぼ直角に曲がる形状」がこの構造に似ていると思われ、これらの遺構は道としての使用が考えられるが、道の中途を意図的に屈曲させている。遺構幅は幅広なところで5.04mであり、北北西端はやや窄まる様相を見せその幅は1.40mを測る。またこの遺構からも埋土上位からボラ層が確認されており、使用時期は近世以降の可能性がある。床面はそれほどの硬化は見られないものよく締まった面が続き、I-I'断面(第98図)の床面に見られる「層中にAh(7.5YR6/8 粒径2~5mm大)粒とAh(7.5YR6/8 粒径10~30mm大)ブロックを含む締まった層」はSD14、SD15の床面に見られる層と酷似していることから、SD14、SD15、SD16は同一遺構であり繋がっていた可能性がある。

なお、SD16からは86点の遺物が確認された。礫類(焼礫を含む)30点、石器片8点、縄文晩期土器4点、弥生土器43点、古代須恵器1点である。これらの遺物は、遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものである。またボラ層直上より、仏飯器と思われる龍門司系甕摩坑(100)が出土している。



- aa: AA → H: 断面は第99図の層番号に对应。  
AA: 腐乱  
17: 暗褐色(2.5Y3/1)土  
18: 暗褐色(10YR5/1)土  
腐の棒子は8層に穿るが、より浅なる層。
- JJ: 断面  
2-6は第99図の層番号に对应  
7: 暗褐色(2.5Y3/1)土  
層中にMn/Feを含む、よく耕された層。  
8: オリーブ褐色(5Y4/3)土  
腐の棒子は5層に穿るが、層がやや柔らかい。  
9: 暗灰色(2.5Y4/2)土  
腐の棒子は4層に穿るが、層がやや柔らかい。  
10: オリーブ褐色(5Y4/3)土  
腐の棒子は8層に穿るが、より浅なる層。  
11: オリーブ褐色(5Y4/3)土  
腐の棒子は10層に穿るが、より浅なり層中にMn/Feを含む。
- KK: 断面  
1: 灰褐色(2.5Y7/2)土  
層中に灰白ボウ(5Y8/1 粒径2-5mm大)を多く含む層(耕された層、(赤土層))  
2: 灰白色(5Y8/1)ボウ  
層中に灰白ボウ(5Y8/1 粒径2-5mm大)層、結るとが硬く割れやすい。  
3: 黄灰色(2.5Y4/1)ボウ  
層中に灰白ボウ(5Y8/1 粒径2-5mm大)を含む耕された層。  
4: 黄灰色(2.5Y4/1)土  
腐は3層と向深であるが、灰白ボウを含まない耕された層。  
5: 暗灰色(2.5Y4/2)土  
層中にクワ砂を含む層(耕された層)。  
6: 暗灰色(2.5Y4/2)土  
層中に黄褐色(10YR6/6 粒径5mm大 Ah7)を含む耕された層。



第99図 全面調査(2次) S D 16 断面図

## SD16 出土遺物

100は湘門司系薩摩焼の仏飯器底部である。施釉は底部上位まで施され、施釉された外面の一部に白化胚土がコーティングされる。底面端部はきれいな平坦面をつくり、底部内面は上底を呈する。

第31表 全面調査(2次) SD16 出土遺物

検出 番号	遺物 番号	出土区 域(場所)	遺物 種類	年代	分類	出土		層位		位置 (m)		備考	
						層位	出土	上段・F1a 下段・F1b	上段・F1a 下段・F1b	北緯	東経		
第17遺	30	一帯	須弥土器	奈良	陶器	須弥土器	須弥土器	須弥土器	須弥土器	—	3.7	3.4	須弥土器 F1a-F1b(須弥土器)

## ⑫ SD17 (第100図)

SD17はB4～6区、C5～7区、D7区で検出された。検出層はVIa層である。SD21、SD24を切っており、SD19とはほぼ平行に並んで検出された。遺構の形状はL字状であり、L字の長軸部分は南東から北西軸に延び、南東端は調査区外に延びる。南東端はL字の短軸部分は西北西から東北東軸に延び、西北西端も同様に先細りの様相を見せ、L字の屈曲部分がSD19と重なる。検出レベルの埋土状況はよく似た状態であり、同一時期の使用、関連遺構の可能性も否めない。SD19の遺構の横幅は長軸方向が、調査区外に近い南東端が最も広く1.90mであり、そこから北西方向に窄まり、0.2～0.4mの幅で屈曲部まで延びる。短軸方向の横幅は西北西端が0.35mを測り、東北東に向かって幅広となり、屈曲部で最大幅となり1.7mを測る。遺構深度は長軸方向がごく浅く、短軸方向は0.2mを測る。床面の硬化は南東端側には硬化面に近い硬さをもち、北西方向に行くにつれて、使用頻度によるものかその硬化は緩くなるように思える。従ってSD17は道としての使用の可能性がある。

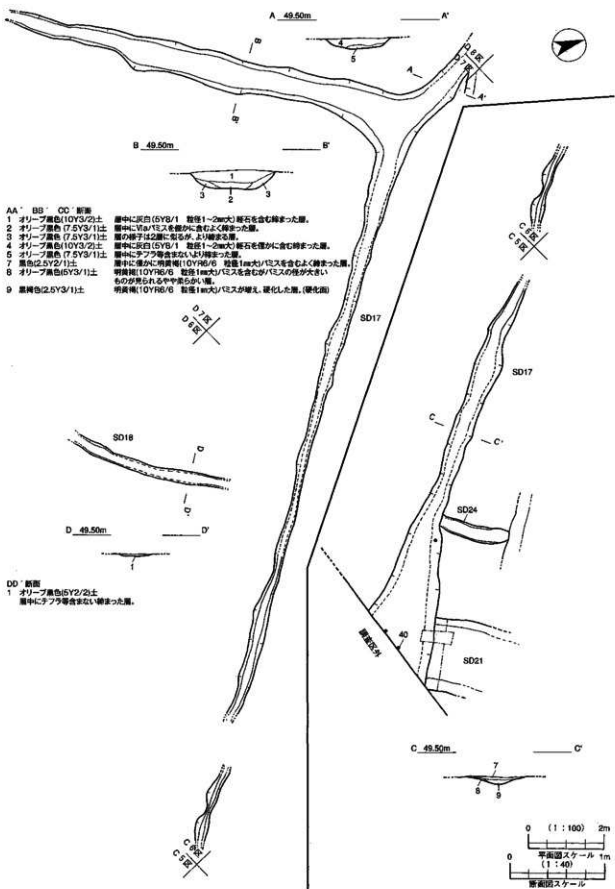
なお、SD17からは3点の弥生土器が確認されたが、流入の可能性も否めない。

## ⑬ SD18 (第100図)

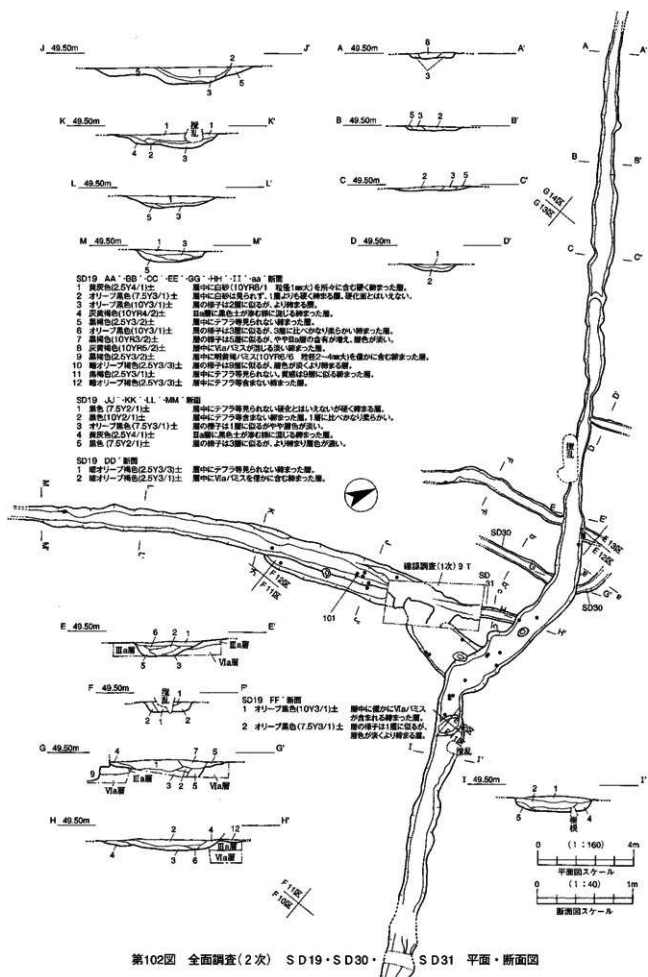
SD18はCD6区で検出された。検出層はVIa層である。SD17の短軸方向に並ぶように西北西から東北東軸に延びる。SD17の長軸方向と同様に遺構深度はごく浅く、遺構の横幅は0.6mであり、多少の起伏はあるがその幅を維持している。床面に硬化は見られず、遺物も確認されなかった。遺構の性格・使用時期は不明である。

## ⑭ SD19・30・31 (第101・102図)

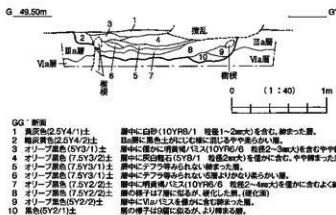
SD19はB5～8区、C6～8区、D7～9区、E9～12区、F12～14区、G11・12・14区の広範囲で検出された。検出層は概ねIIIa層であるが、削平によりVIa層上面で検出された所も見られた。遺構は南東から北西軸に延び、EF12区で二手に分れる。一つは南南西に延び、もう一つはやや内湾気味に屈曲しながら北西に延びる。SD20・21に切られ、遺構の北西端は窄まるように先細る。遺構の横幅は最も幅広で3.7mの部分もあるが、その他は0.8～1.7mの範囲の横幅で検出された。所々に枝別れする部分が見られる。床面には硬化が見られ、特にBC5・6区、C6・7区は顕著に硬化が確認された。道として使用された可能性があり、また後述するこの検出層の直上から硬化面であるSX4・5が検出されていることから、比較的長期に且つ頻繁に使用されている可能性が高い。







第102図 全面調査(2次) SD19・SD30・SD31 平面・断面図



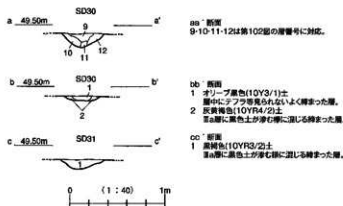
第103図 全面調査(2次) SD19 土層確認トレンチ 土層断面図

SD30はE12区、SD31はF12区から検出された。検出層はⅢa層で、SD30・31ともSD19に切られる。SD19の枝線部分かと思われたが、遺構埋土に合致する部分が見られなかったため、別の遺構として整理した。SD30は西北西から東南東軸に延びてから、北西軸にせり上がる。SD31は西北西から東南東軸に延びる。いずれの遺構の横断は0.3~0.42mであり、遺構深度もごく浅い。SD30・31からは遺物は確認されていないが、SD19に切られていることから、その使用時期は少なくともSD19以前であることがわかる。

なお、SD19からは33点の遺物が確認された。礫類(軽石を含む)6点、石器3点、縄文晩期土器6点、弥生土器7点、土師器1点、古代須恵器5点、苗白川系黒磁摩4点(101)、鉄器1点である。これらの遺物は、遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと認められ、出土結果から遺構の使用時期は近世以降と思われる。

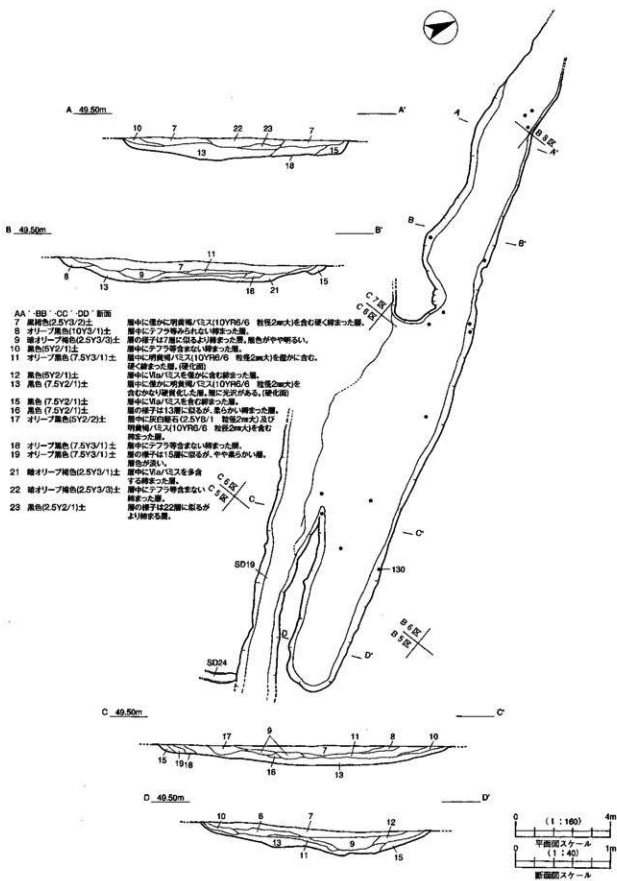
### SD19出土遺物

101は苗白川系黒磁摩焼の大甕である。口縁部から胴部が残存する。口唇部平出面に施軸はなく、口縁部から胴部は内湾するように大きい張りが見られ、胴部外面に三角突帯1条、刻目突帯1条が並び廻る。外面の施軸にてかりが見られ、19C後半の遺物と思われる。



第104図 全面調査(2次) SD30・SD31 断面図





第105図 全面調査(2次) S D20 平面・断面図

第32表 全面調査(2次) SD19 出土遺物

発掘 番号	番号	発掘 時期	出土 層	遺物 種別	位置	分類	出土		出土 層	出土 層	出土 層	計量 (cm)			備考
							長さ	幅				高さ	長さ	幅	
第117号	311	2006-2008 400-402	F10 F11 F12 F13	土器	F10 F11 F12 F13	土器	土器	土器	土器	土器	土器	3.4	—	17.0	2017年度調査 F10層にて出土
							土器	土器	—	土器	—	—	—	—	—

## ⑭ SD20 (第105図)

SD20はB5～8区、C7・8区で検出された。検出層はVIa層である。遺構は南東から北西軸に延び、SD19を切っている。遺構の横幅はやや幅広く4.4mを測り、北西に延びるにつれて少しずつ窄まるように横幅が狭くなる。遺構床面に硬化が見られ、またSD19と同様にこの検出層の直上から硬化面であるSX3・6が検出されていることから、比較的長期に、且つ頻繁に道として使用されている可能性が高い。

なお、SD20からは20点の遺物が確認された。礫類(焼礫を含む)12点、五角形礫1点(1430)、弥生土器7点である。

## ⑮ SD21・22・23・24 (第106図)

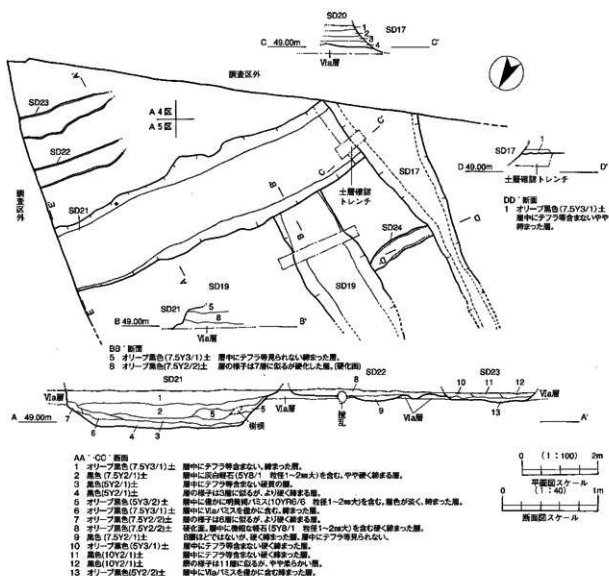
SD21はA5区、B4・5区で、SD22はA5区で、SD23はA4・5区で、SD24はB5区で検出された。検出層はいずれの遺構もVIa層であり、南西から北東軸に延び、SD21は溝17に切れ、SD19を切っている。またSD24はSD17・19とも切られていることからSD24は前後関係から古い遺構と言える。

SD21は遺構の横幅は2.0～2.4mを測り、その幅が維持されている。遺構床面の硬化が見られ、またこの検出層直上からは硬化面であるSX1が検出されていることから、道としての利用の確みであることが考えられる。またSD22・23は、SD21と比べて遺構の横幅は狭く0.55～0.60mの幅であり、硬化面も確認することができた。従って、SD22・23も道としての使用の可能性が指摘でき、ほぼ平行に並んで検出されたこれらのSD群は同一時期に存在していたことは考えにくく、ある程度長期の間に付け替え等の理由により存在した可能性も考えられる。なお埋土内から遺物は確認されなかった。また土層断面(第107図)上で遺構の切りあいを見ると、SD23がSD22を切っていることから、SD22、SD23の使用時期の前後関係については判断できるが、詳細な使用時期については言及できない。

## ⑯ SD25 (第108図)

SD25はFG11区で検出された。検出層はVIa層である。遺構は南から北軸に延び、途中から北東軸に曲がる。遺構幅は南端部分が最も狭く、0.45m、北東軸に屈曲した所から、やや幅広となり1.4mを測る。床面に硬化は認められず、道としての使用の可能性は低いと思われる。

なお、SD25からは51点の遺物が確認された。礫類3点、縄文晩期土器2点、成川式土器2点、弥生土器22点、土師器16点、古代須恵器6点であり、これらの遺物は、遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと思われ、出土結果から遺構の使用時期は古代以降まで遡る可能性がある。



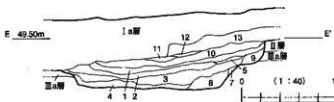
第106図 全面調査(2次) SD21・SD22・SD23・SD24 平面・断面図

### SD25出土遺物

102・103は土器である。102は坏であり、口縁部がわずかに外反し、底部から口縁部に向って緩やかに立ち上がる。底面は筒切り離しを行った後ナゲ若しくは使用による磨滅が見られる。器壁はやや薄く、胎土中に明黄褐色(5YR5/6)粒を多含する。103は高坏と思われ、口縁部が残存する。口縁部がやや肥厚気味であり、口縁端部で小さく外反する。胎土は硬質である

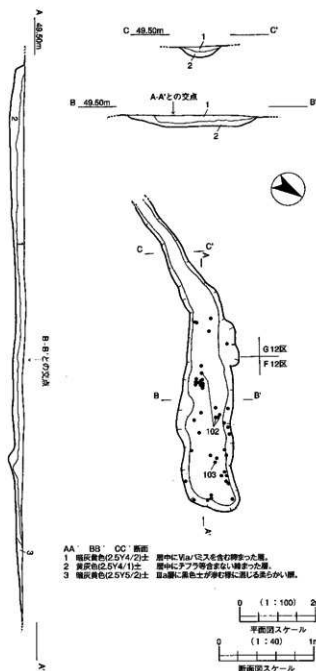
第33表 全面調査(2次) SD25 出土遺物

発掘 番号	番号	図記 番号	出土位置 (図面参照)	種類	形状	分類	土質							組成 (%)			備考		
							石 瓦	瓦	片 瓦	片 瓦	砂	色 澤 上段: P4a 下段: P4b	気孔・層理 上段: P4a 下段: P4b	比重	吸水	透水性			
第102号	102	440-441	101区 500号上	坏	円錐	上段器													底面筒切り離し 胎土の明黄褐色 5YR 5/6を多含む
第103号	103	240-241	P11区3号 500号上	高坏?	口縁部	上段器													硬質(9)1 色(9)2を多含む



- EE'断面  
 1~7は第106図の層番号に対応  
 8 オリーブ黒色(7.5Y2/2)土 層中にVla/Vc土が含まれるやや硬まった層、微干涸に濡りがある。  
 9 黒褐色(2.5Y3/1)土 層中にテフラ等見られない、微に若干濡りが見られる硬まった層。  
 10 オリーブ黒色(5Y3/1)土 層中に僅かに準炭質/Vc土(10YR5/6 約概2~4mm)を含むよく硬まった層。  
 11 黒褐色(2.5Y3/2)土 層の様子に10層に似るが層色が深く10層同様によく硬まった層。  
 12 黒褐色(2.5Y3/2)土 層の様子に11層に似るがより黒みが強い層、層中にテフラ/Vc土等含まない硬まった層、3層に比定。  
 13 黒色(10Y2/1)土

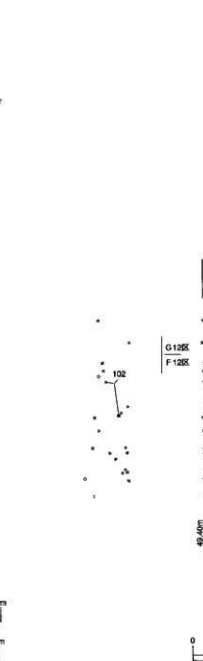
第107図 全面調査(2次) S D21 東壁土層断面図



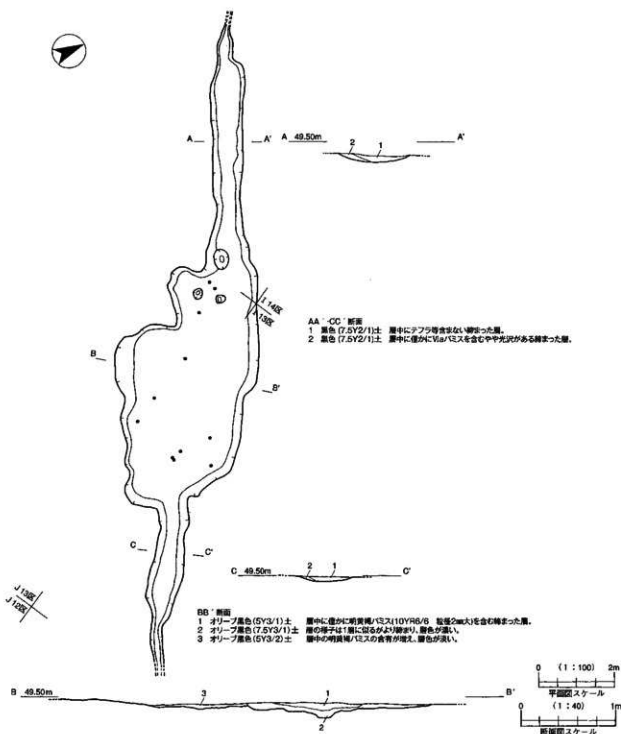
- AA' BB' CC'断面  
 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)土 層中にVla/Vc土を含む硬まった層。  
 2 黄灰黄色(2.5Y4/1)土 層中にテフラ等含まない硬まった層。  
 3 暗灰黄色(2.5Y5/2)土 土壌に黒色土が混む層に近しい黒みが強い層。



第108図 全面調査(2次) S D25 平面・断面図



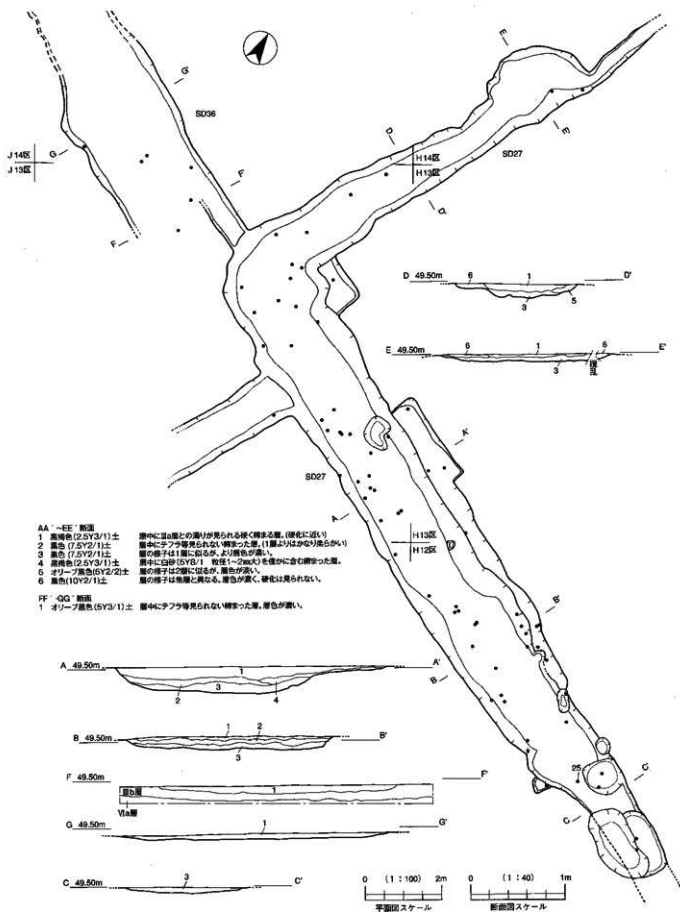
第109図 全面調査(2次) S D25 遺物出土状況図



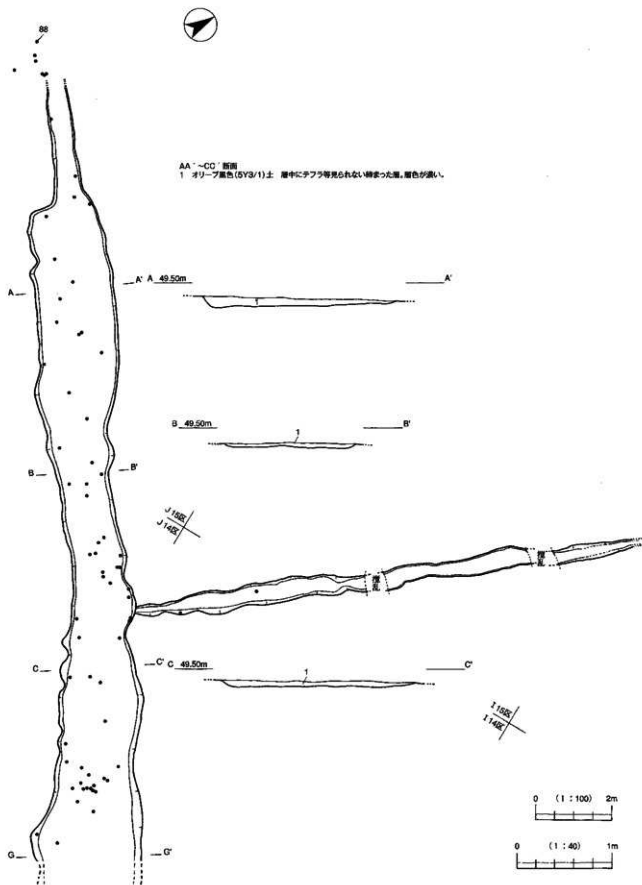
第110図 全面調査(2次) SD26 平面・断面図

⑧ SD26 (第110図)

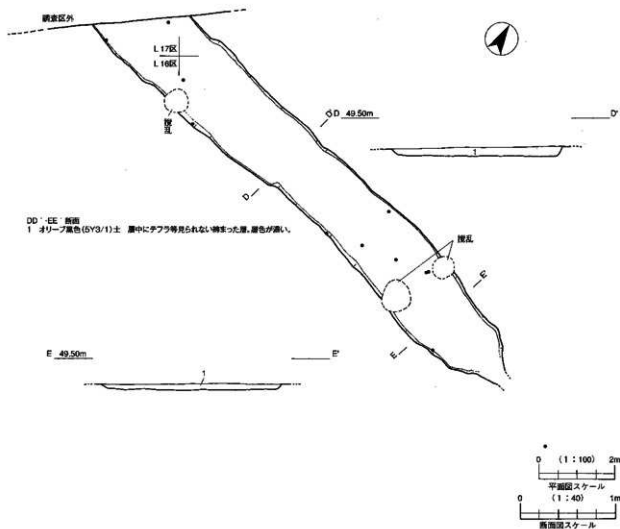
SD26はI13区、J13・14区で検出された。検出層は概ねVIa層であるが、削平によりⅧ層上面で検出された所も見られた。遺構はSD16・SD27とほぼ平行に並び、南東から北西軸に延び、遺構の横幅は最も幅広く3.8mを測り、南東端、北西端に向かって急に窄まる形状である。遺構深度はごく浅く、床面に硬化は見られなかったがほどよく締まる層であった。遺構の性格は不明



第111図 全面調査(2次) SD27・SD36 平面・断面図



第112図 全面調査(2次) SD36 平面・断面図 1



第113図 全面調査（2次） SD36 平面・断面図 2

である。

なお、SD26からは11点確認された。礫類3点、縄文晩期土器2点、弥生土器6点である。これらの遺物は、遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと思われる。

⑨ SD27・36 (第111～113図)

SD27はH112～14区で検出された。検出層はVIa層である。遺構はSD16・SD26とほぼ平行に並び、南東から北西軸に延び、北西端から北東軸にほぼ直角に屈曲し、北東端は先細りに窄まる。遺構の横幅は南東-北西軸は2.62～2.75mで、その横幅は維持されているが、北東軸に延びると、やや幅狭となり北東端で0.4mを測る。遺構深度は0.06～0.28mで、その床面には埋土上位に硬化に近い層が見られ、道としての使用の可能性も考えられる。

なお、SD27からは68点の遺物が確認された。礫類（焼礫を含む）4点、縄文晩期土器16点、弥生土器47点、土師器1点である。これらの遺物は、遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階での流入したものと思われ、出土結果から遺構の使用時期は古代以降の可能性がある。SD36はH15区、I13～15区、J14・15区、K15～17区で検出された。検出層は概ねVIa層であるが、削平によりⅢ層上面で検出された所も見られた。SD27の長軸方向とはほぼ並び、遺構は南東から北西軸に帯状に延び、南東端が調査区外に延びる。遺構の横幅はSD27とほぼ同じであるが、遺



構深度はごく浅い。またJ14区付近で溝状遺構が北東方向に延び、その横幅は0.22mと幅狭である。南東から北西軸の床面にはやや硬化が見られ、SD27と同様に道としての使用の可能性も考えられる。

なお、SD36からは90点の遺物が確認されたが、遺構埋土に複数時期の遺物があり埋没段階で流入したものと思われる。

㊸ SD28 (第114図)

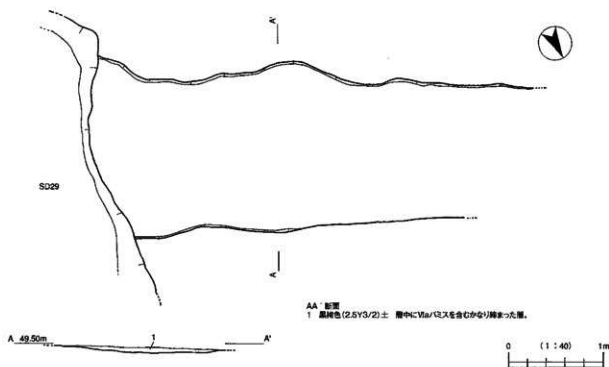
SD28はF14区で検出された。検出面はVIa層である。遺構は東南から北西軸に延び、東南端はSD29に切られる。遺構の横幅は1.7mを測り、遺構の深度はごく浅いものである。床面に硬化は見られず、遺物も確認されなかった。遺構の性格・使用時期は不明である。

㊹ SD29 (第115図)

SD29はE12~14区、F13・14区で検出された。検出層はVIa層である。遺構はSD28とほぼ同じ軸に並び、東南から北西軸に延びる。遺構の横幅は、当南端が狭く2.4mを測り、北西軸に延びるにつれて、遺構の横幅は広くなり、最も幅広なところで6.7mを測る。遺構の深度も南東から北西軸に延びるにつれて深くなり、北西端で浅くなる。遺構埋土には埋土上位からボラ層が確認されており、使用時期は近世以降の可能性がある。

㊺ SD33・34 (第116図)

SD33はE11・12区、SD34はDE11・12区で検出された。検出層はVIa層である。SD33は、南東から北西に延び、途中から遺構が二手に別れ、一方はやや蛇行しながら北北西軸に延び、一方はそのまま北西軸に延び、さらに途中から蛇行するように西南西軸に延びる。遺構の深度は浅く、床面に硬化は見られない。SD34は南南東から北北西軸に延びる。遺構の深度はD11・12の辺りで急に深くなるが、これは別の遺構が絡んで、その掘り込みによるものと思われる。S



第114図 全面調査(2次) SD28 平面・断面図

D33からは弥生土器1点が出土したが、遺構の埋没段階での流入したものと思われ、SD33・34の性格・使用時期については不明である。

㊦ SD35 (第118図)

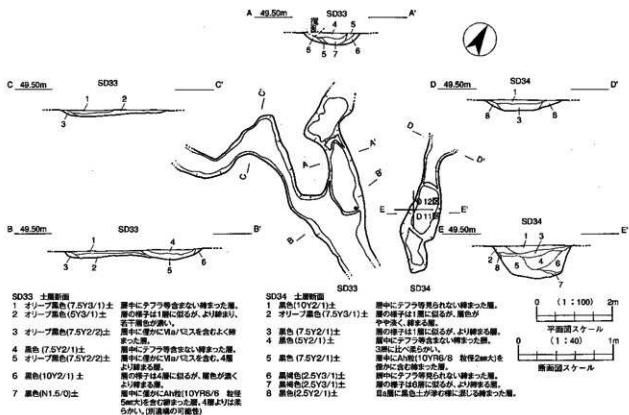
SD35はC11・12、D12区で検出された。検出層はVIa層である。遺構は南東から北西軸に帯状に延び、遺構の横幅はやや狭く、南東端で30cmを測り、北西軸に延びるにつれやや広がるが、北西端で窄まりを見せる。遺構の深度も浅く、床面に硬化は見られない。遺構の性格・使用時期については不明である。

㊧ SD37・38 (第119図)

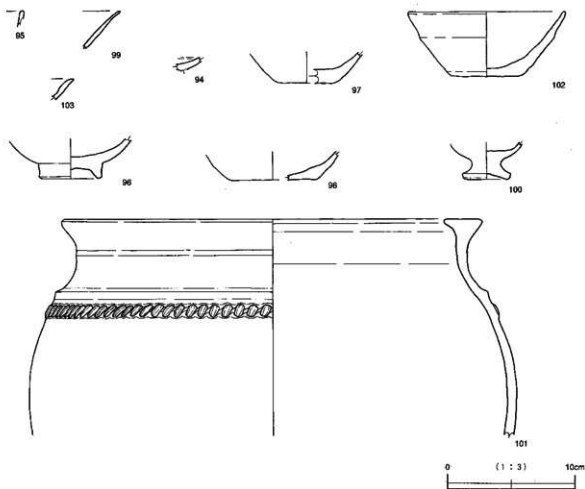
SD37・38はI16・17区で検出された。検出層はIIIa層である。2つの遺構とも南東から北西軸に延び、いずれの端部も調査区外に延びる。またSD19とほぼ同軸に並び、SD36とほぼ平行に延びる。SD38がSD37を切っているため、遺構の前後関係はSD37が古いといえる。遺構の横幅も2つの遺構とも同様で、一定の幅は維持しないが、0.45～1.2mの幅である。遺構の床面にはやや硬化が見られ、道としての使用が考えられる。

なおSD37からは11点の遺物が確認された。縄文1点、縄文晩期土器3点、弥生土器7点である。またSD38からは4点の遺物が確認され、縄文晩期土器3点、弥生土器1点が出土した。これらの遺物も、遺構の埋没段階での流入したものと思われ、SD37・38の使用時期については不明である。

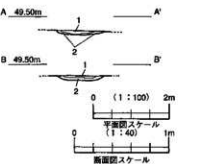
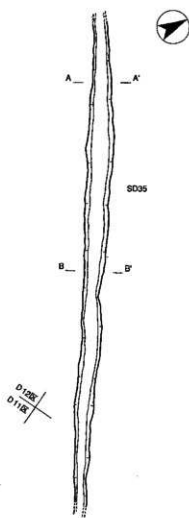




第116図 全面調査(2次) SD33・SD34 平面・断面図

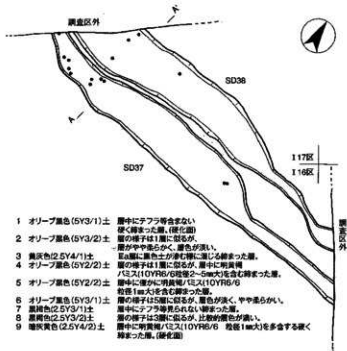


第117図 全面調査(2次) SD内 出土遺物

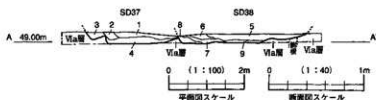


1 オリーブ黒色(SY2/2)土 層中にテフラ等含まない層だった層。  
2 黒色(SY2/1)土 層中にVla/Vc土を含む層だった層。

第118図 全面調査(2次)  
SD35 平面・断面図



- 1 オリーブ黒色(SY3/1)土 層中にテフラ等含まない層だった層。(緑化層) 層の厚さは1m程度あり、層がやや柔らかく、色が濃い。
- 2 オリーブ黒色(SY3/2)土 同上層に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 3 黄褐色(SY4/1)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 4 オリーブ黒色(SY2/2)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 5 オリーブ黒色(SY2/2)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 6 オリーブ黒色(SY3/1)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 7 黒褐色(SY3/1)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 8 黒褐色(SY3/2)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。層の厚さは1m程度あり、層中に明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度2-5mm程度の土を混入した層。層中に僅かに明黄褐色/1土(S10YR6/6)程度1mm程度の土を混入した層。
- 9 暗灰黄色(SY4/2)土 層中に黒土が多少堆積している層だった層。(緑化層)

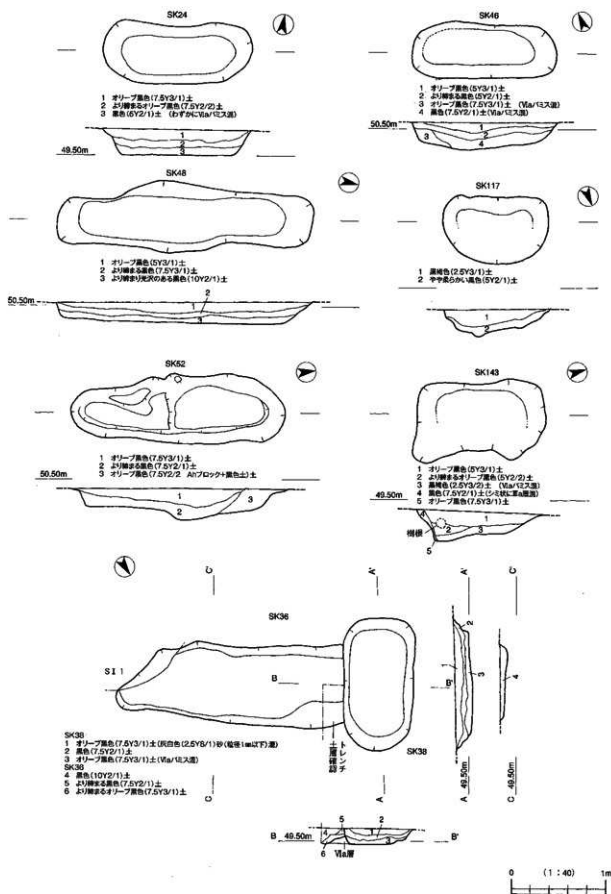


第119図 全面調査(2次) SD37・SD38 平面・断面図

### (3) 土坑

全面調査(第2次)で確認された土坑は調査範囲のほぼ全域にわたって143基確認された。

全面調査(第1次)の調査結果同様に、近年実施された構造改善により、場所により遺物包含層が削平を受け、VIb・VII層まで削平を受けているところが見受けられた。そのため遺構深度により検出面から遺構床面までが比較的浅い土坑もあり、また溝状遺構と同様に灰白色ボラが堆積する土坑も見られた。比較的堆積状況の良い土坑の分類を ①埋土にバミス・テフラの含有の有無(I群・II群) ②埋土に明黄褐色バミスの含有の多寡(III群) ③埋土に灰白色軽石の含有の多寡(IV群) ④埋土にVIaバミスの含有の多寡(V群) ⑤埋土に灰白色砂の有無(VI群)に分け、さらに各群の内IV群、V群は含有するバミス・テフラの多寡、粒径の差異によりさらに細分化した。



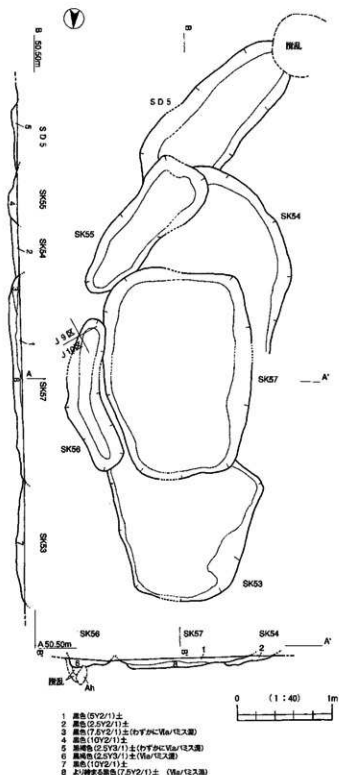
第120図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 1

以下土坑埋土の詳細及び各土坑の計測値は下記のとおりである。

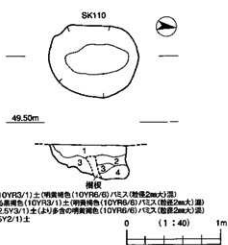
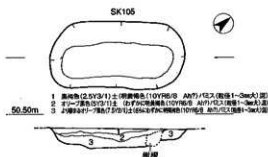
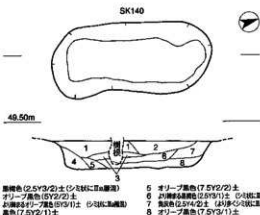
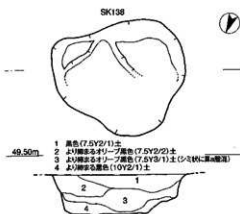
① I群土坑群

I群の土坑は、層色がオリーブ黒色若しくは黒褐色を呈し、層中にテブラ・バミスの混入が見られない締まった埋土で、検出面からの層の残存状況も良好な土坑である。17基検出された。長径が長い土坑で2.53m、短い土坑で0.85m、検出面からの深さも0.07~0.42mと比較的浅く、法則性が見られない疎らな形状・規模の土坑群である。平面プランは主に長楕円形、隅丸長方形を呈す。

SK36はK13区で検出された。遺構の南側をS11に切られることから弥生時代の土坑の可能性がある。SK57はK9、JK10で検出された。長径2.20m、短径1.57mを測り、平面形は隅丸長方形であり、遺構内に柱穴等の付属遺構は確認できなかった。埋土中からは弥生高坏口縁部(79)、高付式の新段階タイプ、土師器坏底部等17点の遺物が確認されたが、床着遺物は確認できなかった。遺物は遺構の埋没段階での流入したものと推われ、SK57の使用時期については判然としない。



第121図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 2



第122図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 3



第34表 全面調査(2次) I群 土坑計測表

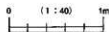
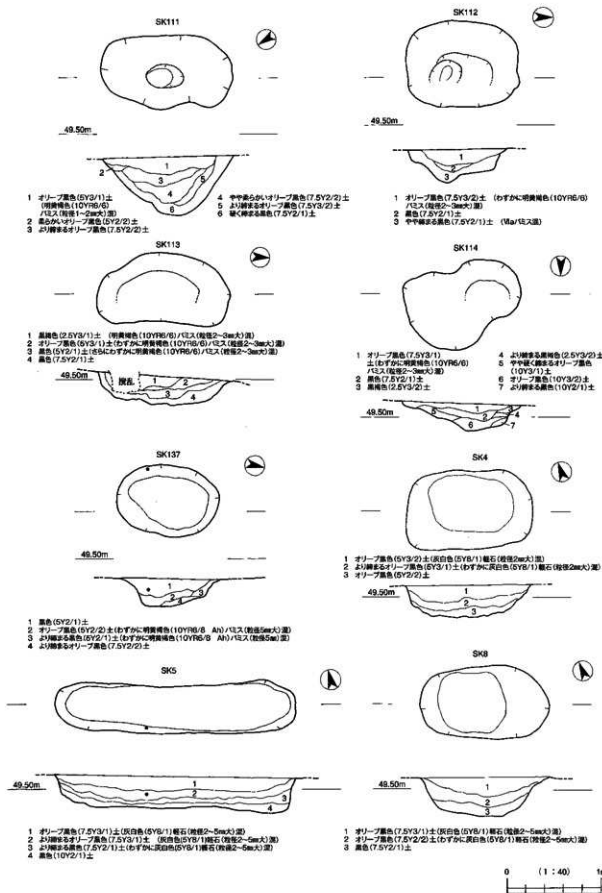
土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
SK21	—	M11	(長楕円形)	(2.30)	0.30	0.07	SK19に切られる
SK24	第120図	L12	長楕円形	1.57	0.64	0.28	
SK36	第120図	K13	(長楕円形)	(2.40)	0.87	0.17	SI1・SK39に切られる
SK46	第120図	K8	長楕円形	1.52	0.55	0.28	
SK48	第120図	K7	隅丸長方形	2.70	0.76	0.23	
SK52	第120図	K10	長楕円形	2.27	0.73	0.33	
SK57	第121図	J K10 K9	隅丸長方形	2.20	1.57	0.12	SK56に切られる 遺物あり
SK62	—	I9	長楕円形	2.05	0.59	0.25	
SK65	—	I8	楕円形	1.38	0.92	0.27	
SK67	—	J8	長楕円形	2.00	0.50	0.31	
SK68	—	I8	隅丸長方形	2.53	0.75	0.42	
SK68	—	J7	長楕円形	1.93	0.76	0.16	
SK106	—	I6	長楕円形	1.28	0.62	0.19	
SK108	—	E8	長楕円形	1.64	0.70	0.16	
SK115	—	C7	楕円形	0.85	0.40	0.32	
SK117	第120図	D8	楕円形	1.11	0.70	0.29	
SK143	第120図	G10	変形楕円形	1.36	(0.85)	0.32	

## ② II群土坑群

II群の土坑は、層色がオリーブ黒色・黒色を呈し、層中にテフラ・バミスの混入が見られないが、層の一部にシミ状にIIIa層が混入する締まった埋土で検出面からの層の残存状況も良好な土坑である。4基検出された。長径が長い土坑で1.68m、短い土坑で1.40mであり、検出面からの深さも0.30～0.38mとほぼ同規模の土坑群である。平面プランは主に隅丸長方形、変形楕円形を呈する。

第35表 全面調査(2次) II群 土坑計測表

土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
土坑127	第122図	H12	隅丸長方形	1.58	0.84	0.34	
土坑130	第122図	H I 14	隅丸長方形	1.60	0.61	0.38	
土坑138	第122図	E12	変形楕円形	1.40	1.21	0.43	
土坑140	第122図	E11・12	隅丸長方形	1.66	0.76	0.30	



第123図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 4

### ③ III群土坑群

III群の土坑は、層色はオリーブ黒色土を呈し、層中にわずかに明黄褐色（10YR6/6）バミス（バミス径 2～5mm）が見られる土坑である。埋土内のバミスはAh粒に近いものであるが、粒径が微細であり、攪乱とも取れない遺構であったため、遺構によっては検出面からの深さが浅い土坑もある。長径が長い土坑で1.74m、短い土坑で0.65mであり、検出面からの深さも0.12～0.62mと法則性が見られない疎らな形状・規模の土坑群である。平面プランは主に長楕円形、変形楕円形を呈する。

第36表 全面調査（2次） III群 土坑計測表

土坑番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK50	J10	(変形楕円形)	1.74	1.02	0.14	SK69・81に準拠される
SK58	I9	長楕円形	1.07	0.40	0.08	
SK59	I9	隅丸長方形	1.03	0.69	0.14	
SK63	J8	長楕円形	1.48	0.49	0.16	SK64に準拠される
SK66	J8	楕円形	1.10	0.87	0.24	
SK79	J7	長楕円形	1.47	0.64	0.26	
SK87	J6・7	長楕円形	1.80	0.79	0.39	
SK89	J7	隅丸長方形	1.13	0.70	0.26	
SK104	J6	楕円形	1.28	0.82	0.12	
SK105	J6	長楕円形	1.43	0.72	0.22	
SK109	D8	楕円形	0.83	0.76	0.26	
SK110	D7	楕円形	0.94	0.76	0.36	
SK111	D6	長楕円形	1.37	0.78	0.62	
SK112	C6	楕円形	1.17	0.91	0.35	
SK113	B7	長楕円形	1.40	0.73	0.30	
SK114	B8	変形楕円形	1.24	0.82	0.29	
SK116	C8	楕円形	0.65	0.44	0.24	
SK118	B8	楕円形	0.83	0.51	0.17	
SK120	C8・9	楕円形	0.95	0.62	0.19	
SK137	E12	楕円形	1.08	0.75	0.30	

### ④ IV群A土坑群

IV群の土坑は埋土に灰白色軽石の含有が多寡・粒径によりA～Gに細分化した。IV群は層色がオリーブ黒色を呈し、層中に灰白色軽石が混じる土坑である。層中に含まれる灰白色軽石は桜島起源と思われるが、堆積時期については不明である。ただ、埋土は層の変化が顕著に見られるほど分層が可能であり、下層にはテフラ・バミスの混じりの見られない層が堆積していることから土坑として捉えた。IV群Aは長径が長い土坑で8.22m、短い土坑で0.57mであり、検出面からの深さも0.05～0.44mと法則性が見られない疎らな形状・規模の土坑群である。平面プランは主に楕円形、長楕円形、変形楕円形を呈する。

SK101はK5、JK6区で検出された。長径8.22m、短径3.10mを測り、比較的規模の大きい土坑である。遺構の南東側をSD8に切られ、平面形は判然としない。遺構内に柱穴等の付属遺構は確認できなかった。埋土中に弥生土器21点、山ノ口Ⅱ式土器1点(60)弥生後期土器3点(31)、軽石1点等が確認された。弥生後期土器(31)についてはSK102、S14、包含層と接合しており、弥生後期土器の包含層はSK101、SK102、S14の北側に遺物の広がりが見られ、遺構の埋没段階での流入したものと思われ、SK101の使用時期については判然としない。

SK136はE12区で検出された。長径6.33m、短径4.27mを測り、SK101と同様に比較的規模の大きい土坑である。南西側の遺構深度が深く、北東側に向けて浅くなる。レンズ状堆積をした遺構埋土の中位にかなりの硬質層と硬化面が幾重に堆積し、遺構の埋没段階で道として使用していた可能性がある。また埋土下位において、苗白川系黒鹿摩の大甕口縁～胴部(101)、波佐見焼(105)が出土していることから、SK136は近世の土坑の可能性がある。さらに苗白川系黒鹿摩の大甕口縁～胴部(101)は遺構の南側にあるSD19埋土内で出土した遺物と接合し、その上レベルはSD19からSK136に向けて緩やかに下ることから、SD19とSK136は溝状遺構として繋がっていた可能性も考えられる。

#### IV群A土坑出土遺物

104は弥生後期土器の甕である。胴部が残存し、台形突帯が貼り付けられる。台形突帯の上辺に細い窪みが見られる。105は波佐見焼の皿である。口縁部から底部が残存する。口唇部は丸くまどまり、底部内面に釉の掻き取り痕が見え、高台は低い。108後半のものと思われる



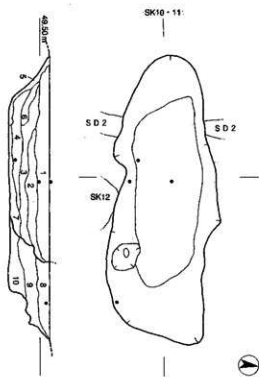
第124図 全面調査(2次) SK101・136 出土遺物

第37表 全面調査(2次) SK101 出土土器

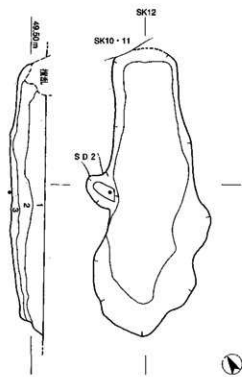
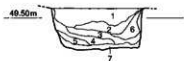
発掘 番号	番号	発見 番号	出土区 別(層)	種類	形状	分属	胎土					色 質 上段: 内面 下段: 内面	窯文・刷目 上段: 内面 下段: 内面	形長 (cm)		備考
							心	底	肩	口	底			口径	底径	
第124図	101	202・214	JK6区 600cm層上	甕	胴部	弥生土器	○	○				0.80x0.15 0.80x0.15	破片 アブ	-	-	埋土内層1 未 検出

第38表 全面調査(2次) SK136 出土土器

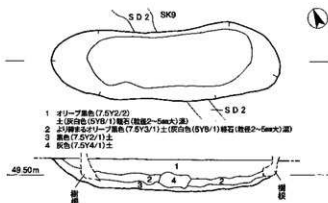
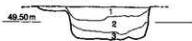
発掘 番号	番号	発見 番号	出土区 別(層)	種類	形状	分属	胎土					窯文・刷目 上段: 内面 下段: 内面	形長 (cm)		備考		
							胎土色	胎土質	胎土色	胎土質	胎土色		胎土質	口径		底径	
第124図	105	403	E12区 1035cm層上	皿	胴部	波佐見焼	胎土色	胎土質	胎土色	胎土質	胎土色	胎土質	胎土色	胎土質	胎土色	胎土質	埋土内層1 埋土内層2 埋土内層3 埋土内層4



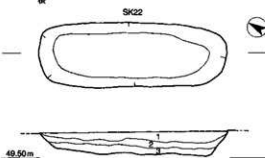
・注記はP1244に有



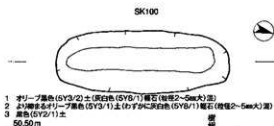
・注記はP1244に有



- 1 オリーブ黒色(7.5Y2/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2~5mm)混)
- 2 赤褐色オリーブ黒色(7.5Y3/1)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2~5mm)混)
- 3 黒色(7.5Y2/1)土
- 4 灰色(7.5Y4/1)土



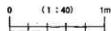
- 1 オリーブ黒色(10Y3/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径1mm)混)
- 2 赤褐色オリーブ黒色(10Y3/1)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径1mm)混)
- 3 オリーブ黒色(7.5Y3/1)土



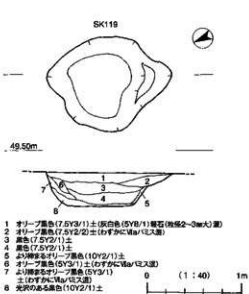
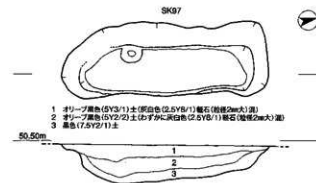
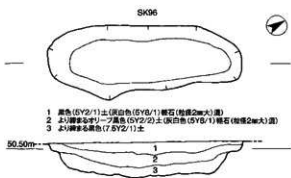
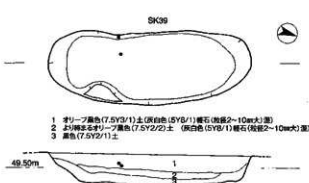
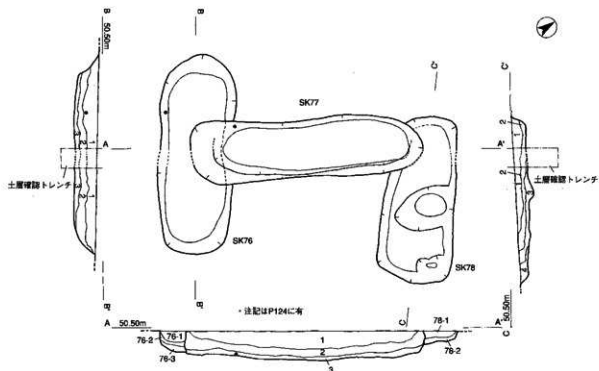
- 1 オリーブ黒色(SY3/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2~5mm)混)
- 2 赤褐色オリーブ黒色(SY3/1)土(わずかに灰白色(SYB/1)礫石(粒径2~5mm)混)
- 3 黒色(SY2/1)土



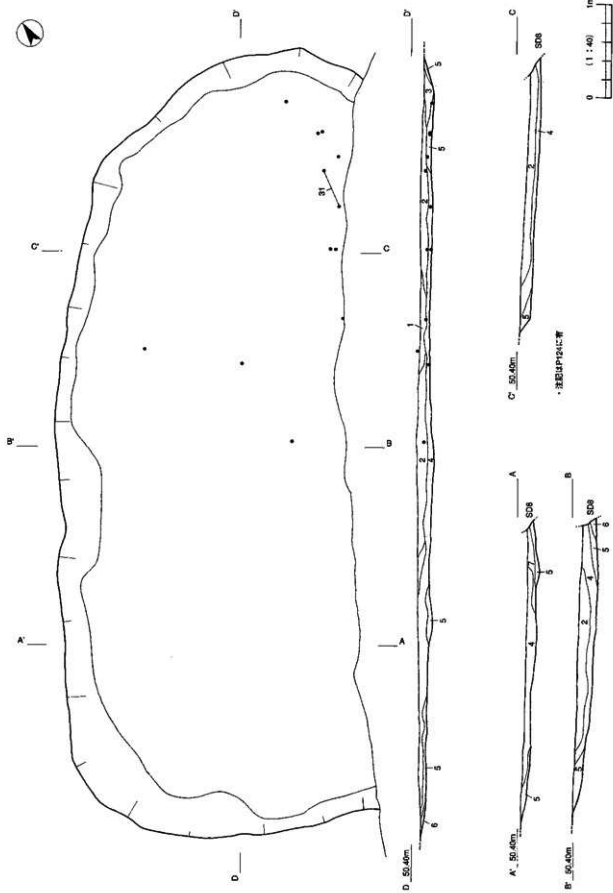
- 1 オリーブ黒色(7.5Y3/1)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2~5mm)混)
- 2 赤褐色オリーブ黒色(7.5Y2/1)土(わずかに灰白色(SYB/1)礫石(粒径2~5mm)混)
- 3 赤褐色オリーブ黒色(10Y3/1)土
- 4 赤褐色黒色(10Y2/1)土



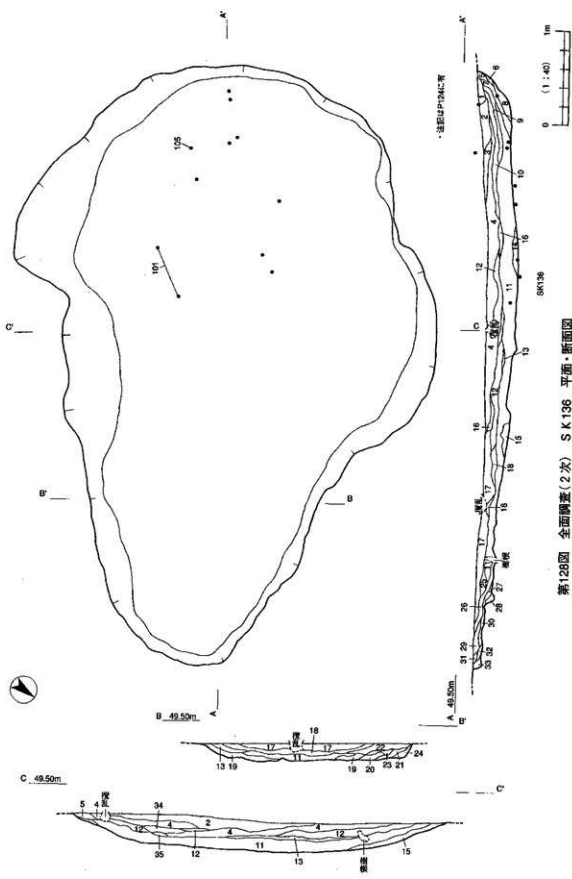
第125図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 5



第126図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 6



第127図 全面調査(2次) S K 101 平面・断面図



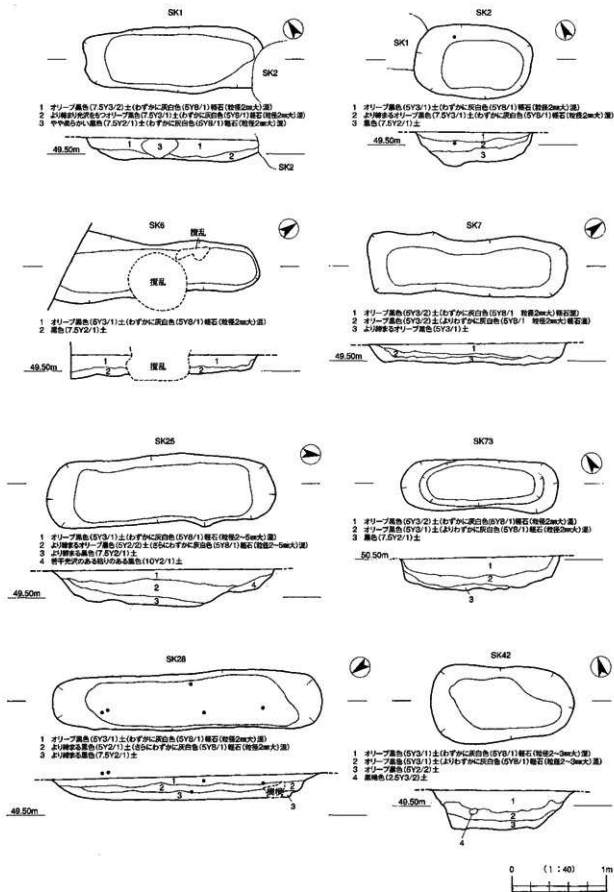
第128図 全面調査(2次) SK136 平面・断面図



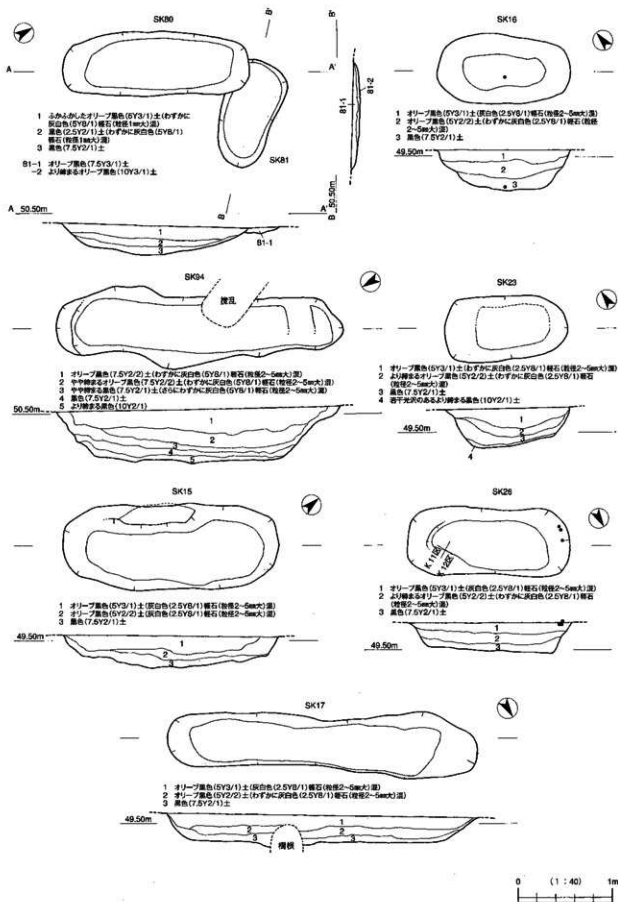
第39表 全面調査(2次) IV群A 土坑計測表

土坑番号	押函番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK4	第123区	LM15	楕円形	1.33	0.83	0.33	
SK5	第123区	L15	長楕円形	2.53	0.48	0.38	
SK8	第123区	M14	楕円形	1.35	0.78	0.41	
SK9	第125区	L13・14	長楕円形	2.42	0.73	0.34	
SK10	第125区	L13	長楕円形	2.97	1.14	0.43	
SK12	第125区	LM13	長楕円形	3.05	1.15	0.37	SK10に切られる
SK14	—	L13	(長楕円形)	(3.13)	0.77	0.26	
SK22	第125区	L11・12	長楕円形	1.98	0.67	0.25	
SK33	第125区	K12・13	隅丸長方形	1.66	0.64	0.25	
SK39	第126区	L13	楕円形	2.14	0.77	0.30	
SK40	—	L13	楕円形	1.40	0.77	0.37	
SK41	—	L13・14	楕円形	2.17	1.00	0.30	
SK43	—	L14	隅丸長方形	2.03	0.65	0.39	
SK44	—	L14	長楕円形	1.52	0.96	0.44	
SK60	—	I J 9	長楕円形	1.70	0.54	0.24	
SK61	—	I 9	(長楕円形)	(0.57)	0.52	0.23	
SK76	第126区	J 7	長楕円形	2.10	0.80	0.25	SK77に切られる
SK77	第126区	J 7	長楕円形	2.44	0.64	0.31	
SK78	第126区	J 7	長楕円形	1.78	0.77	0.19	SK77に切られる
SK83	—	I 7	楕円形	1.13	0.53	0.12	
SK84	—	I 7	隅丸長方形	1.06	0.56	0.06	
SK91	—	I 6・7	楕円形	1.41	0.83	0.34	
SK95	—	K 6・7	長楕円形	1.73	0.55	0.38	
SK96	第126区	K 6	長楕円形	2.03	0.78	0.37	
SK97	第126区	L 6・7	長楕円形	2.18	0.77	0.41	
SK100	—	L 5	長楕円形	1.82	0.66	0.26	
SK101	第127区	JK6 K5	(楕円形)	8.22	(3.10)	0.17	SD8に切られる
SK103	—	J 5	長楕円形	1.77	0.57	0.05	
SK119	—	C 8	変形楕円形	1.31	1.00	0.35	
SK136	第128区	E12	変形楕円形	6.33	4.27	0.32	





第129図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 7



第130図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 8

⑤ IV群B

IV群Bの土坑群は、層色がオリーブ黒色を呈し、層中にわずかに灰白色（5Y8/1）軽石（粒径2mm）を混じる土坑である。長径が長い土坑で3.03m、短い土坑で0.78mであり、検出面からの深さも0.15～0.57mと法則性の見られない疎らな形状・規模の土坑群である。平面プランは主に隅丸長方形であり、その他楕円形、長楕円形を呈する。

第40表 全面調査（2次） IV群B 土坑計測表

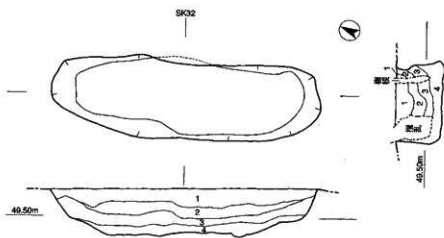
土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK1	第129図	MN15	(隅丸長方形)	1.77	0.71	0.24	SK2に切られる
SK2	第129図	M15	隅丸長方形	1.23	0.78	0.36	
SK3	—	M15	(楕円形?)	0.78	0.57	0.15	
SK6	第129図	N14	(長楕円形)	2.00	0.53	0.25	調査区外に及びる
SK7	第129図	N14	隅丸長方形	2.08	0.61	0.23	
SK25	第129図	L11・12	隅丸長方形	2.42	0.75	0.39	
SK28	第129図	K12	隅丸長方形	2.85	0.58	0.24	
SK29	—	K12	長楕円形	1.66	0.72	0.17	
SK42	第129図	L14	長楕円形	1.51	0.83	0.41	
SK70	—	J8	長楕円形	2.05	0.58	0.30	
SK73	第130図	I J 8	長楕円形	1.66	0.53	0.36	
SK80	第130図	J 7・8	隅丸長方形	1.98	0.67	0.32	
SK93	—	K7	隅丸長方形	1.64	0.44	0.35	
SK94	第130図	K7	長楕円形	3.03	0.75	0.57	
SK98	—	L6	長楕円形	1.90	0.59	0.27	

⑥ IV群C

IV群Cの土坑群は、層色がオリーブ黒色を呈し、層中に灰白色（2.5Y8/1）軽石（粒径2～5mm）混を含む土坑である。長径が長い土坑で3.25m、短い土坑で1.12mであり、検出面からの深さも0.13～0.51mと法則性の見られない疎らな形状・規模の土坑群である。平面プランは主に長楕円形であり、その他楕円形、隅丸長方形を呈する。

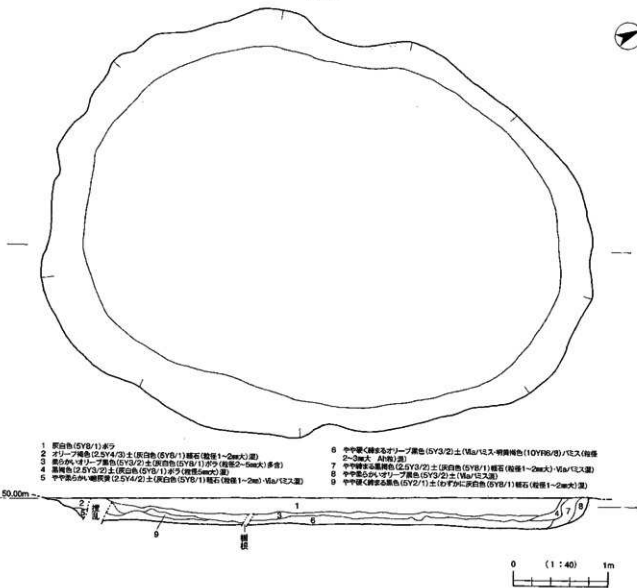
第41表 全面調査（2次） IV群C 土坑計測表

土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK15	第130図	N13	長楕円形	2.28	0.88	0.34	
SK16	第130図	N13	楕円形	1.40	0.73	0.43	
SK17	第130図	N12	長楕円形	3.25	0.54	0.34	
SK18	—	N12	隅丸長方形	3.08	0.55	0.27	
SK23	第130図	M11	楕円形	1.30	0.69	0.40	
SK26	第130図	K L11・12	隅丸長方形	1.72	0.72	0.32	
SK32	第131図	L12	長楕円形	2.81	0.88	0.51	



- 1 オリーブ黒色(SY3/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2-5mm)混)
- 2 赤褐色のオリーブ黒色(SY3/1)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2-5mm)混)
- 3 オリーブ黒色(TSY3/1)土
- 4 若干粒のある赤褐色のオリーブ黒色(TSY3/1)土

SK107



- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1 灰白色(SYB/1)赤土</li> <li>2 オリーブ黒色(SY4/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径1-2mm)混)</li> <li>3 赤褐色のオリーブ黒色(SY3/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径2-5mm)多量)</li> <li>4 黒褐色(SY3/2)土(灰白色(SYB/1)赤土(粒径5mm)混)</li> <li>5 中層から赤褐色の土(SY4/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径1-2mm)・Msa/1混入)</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>6 中層から赤褐色のオリーブ黒色(SY3/2)土(Msa/1混入・明褐色土(10YR5/8)・Vt土(粒径2-3mm大 Ah土)混)</li> <li>7 中層から黒褐色(SY3/2)土(灰白色(SYB/1)礫石(粒径1-2mm)・Msa/1混入)</li> <li>8 中層から赤褐色のオリーブ黒色(SY3/2)土(Msa/1混入)</li> <li>9 中層から赤褐色の土(SY4/2)土(赤褐色(SYB/1)礫石(粒径1-2mm)混)</li> </ol> |
|--|--|

第131図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 9

SK72	—	J 8	長楕円形	1.58	0.60	0.23	
SK121	—	M 5	(長楕円形)	(1.52)	0.56	0.13	検出面は埋層上面
SK122	—	MN 6	長楕円形	1.12	0.43	0.27	検出面は埋層上面

#### ⑦ IV群D

IV群Dの土坑は、埋土上位の層色が淡く暗灰色気味の埋土であり、埋土層中に灰白色(5Y8/1)軽石(粒径 2~10mm)を含む埋土である。混入する軽石の粒径が大きくなる傾向が見られる。長径が長い土坑で2.52m、短い土坑で1.75mと比較的大きく、検出面からの深さも0.30~0.39mと深く、この種の検出数は4基と少ないが、他の土坑群と比べ比較的大きい土坑群である。平面プランは主に隅丸長方形を呈する。

第42表 全面調査(2次) IV群D 土坑計測表

土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
SK13	第132図	M13	隅丸長方形	1.81	0.81	0.33	
SK27	第132図	K11・12	隅丸長方形	2.52	0.79	0.39	
SK71	—	J 8	長楕円形	1.75	0.50	0.31	
SK75	第132図	J K 7	隅丸長方形	2.42	0.58	0.30	

#### ⑧ IV群E

IV群Eの土坑は、層色がオリーブ黒色を呈し、層中に灰白色(5Y8/1)軽石(粒径 2~5mm)を含む。平面形は長楕円形を呈し、土坑断面は丸底に近い形状であり、埋土層下層にAhブロックが混じる土坑である。

第43表 全面調査(2次) IV群E 土坑計測表

土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
SK30	第132図	K12	長楕円形	(1.39)	0.94	0.41	SK29に切られる
SK69	第132図	I 8	長楕円形	2.02	0.76	0.73	

#### ⑨ IV群F

IV群Fの土坑は、層色が淡く黄灰色味の埋土層中に、灰白色(5Y8/1)軽石(粒径 2~5mm)を含む土坑である。土坑10に遺構の大半を切られていると思われる。

第44表 全面調査(2次) IV群F 土坑計測表

土坑番号	押図番号	検出区	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
SK11	第125図	L13	(長楕円形?)	(0.80)	1.04	0.44	SK10に切られる

⑨ IV群G

IV群Gの土坑は、層上面にボラ層が顕著に堆積し、その下層にオリーブ黒色・黒色を呈す層に灰白色（5Y8/1）軽石（粒径 1～2mm）が混じる土坑である。

SK107はII7区で検出され、楕円形を呈する大きな土坑である。土坑の長軸方向は西北西から東南東に延び、その西北西軸方向にSD8が同軸状に並んでいる。遺構上面にボラの顕著な堆積とSD8との配置から、SK107は近世以降の土坑の可能性はある。

第45表 全面調査（2次） IV群G 土坑計測表

土坑番号	挿図番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK107	第131図	H7	楕円形	5.73	4.52	0.32	

⑩ V群A

V群の土坑は埋土にVIaバミスの含有の多寡によりA・Bに細分化した。V群Aの土坑は、層色がオリーブ黒色を呈し、層中にVIaバミスの混入が見られる締まった埋土をもつ。長径が長い土坑で1.67m、短い土坑で1.16m、検出面からの深さも0.28～0.42mと、ある程度の深さをもつ、ほぼ同規模の土坑である。平面プランは主に隅丸長方形を呈する。

第46表 全面調査（2次） V群A 土坑計測表

土坑番号	挿図番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK129	第132図	H14	隅丸長方形	1.50	0.93	0.31	
SK131	第131図	I15	隅丸長方形	1.67	0.73	0.42	
SK133	第131図	I16	長楕円形	1.66	0.65	0.39	
SK135	—	E12・13	変形楕円形	1.64	0.68	0.28	
SK139	—	F12	隅丸長方形	1.16	0.88	0.38	

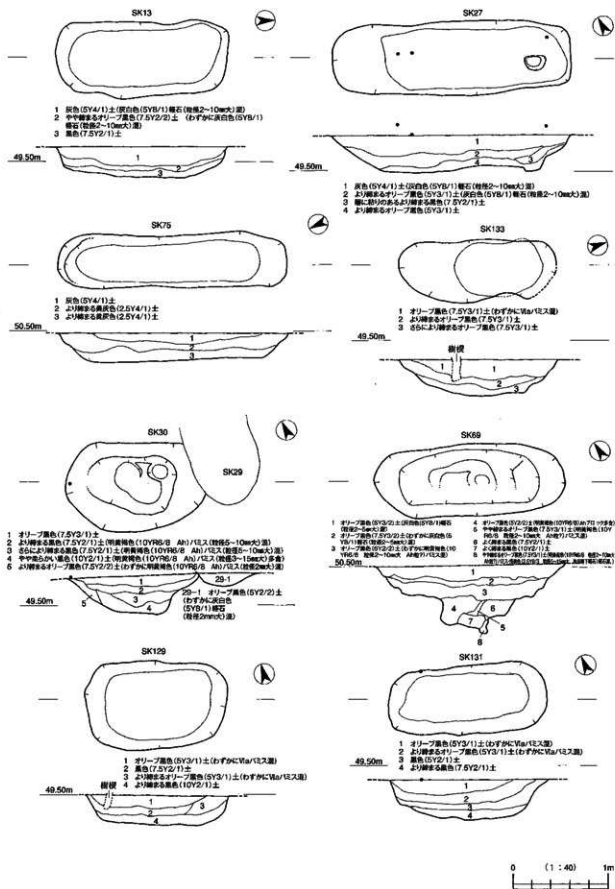
⑪ V群B

V群Bの土坑は、層色は暗オリーブ褐色・黒褐色であり、層中にVIa層バミスが混ざる土坑である。土坑の規模はV群Aの土坑とほぼ同規模であるが、やや検出面からの深さが浅く、層の落ち込みの可能性も考えられる。

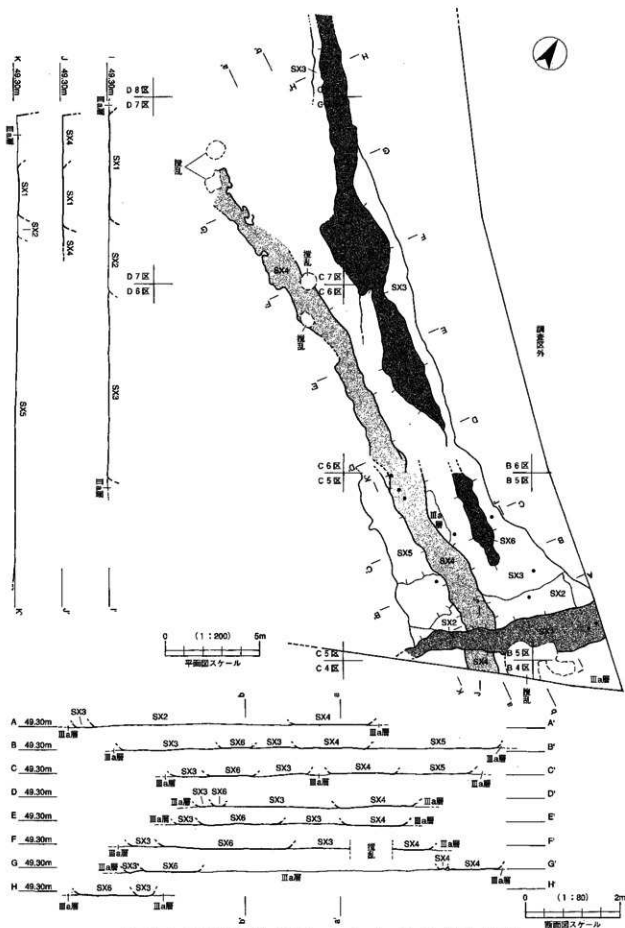
第47表 全面調査（2次） V群B 土坑計測表

土坑番号	挿図番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK49	—	K10	?	(3.04)	1.08	?	
SK56	第121図	J K9・10	長楕円形	1.50	0.40	0.27	
SK125	—	K16	隅丸長方形	2.14	0.47	0.22	
SK126	—	J15	隅丸長方形	1.79	0.68	0.38	





第132図 全面調査(2次) 土坑 平面・断面図 10



第133図 全面調査(2次) SX1・2・3・4・5・6 平面・断面図

⑬ VI群

VI群の土坑は、層色がオリーブ黒色・黒色を呈し、層中に灰白色（2.5Y8/1）砂（粒径1mm以下）が混じる土坑である。この灰白色砂は、後述する畝状遺構の硬化面上に検出され（第136図）、畝状遺構との関連性がある。

第48表 全面調査（2次）VI群 土坑計測表

土坑番号	押洞番号	検出区	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SK38	第120図	K13・14	楕円形	1.40	0.73	0.18	

(4) 硬化面

硬化面（以下「SX」と表記）はⅡ層上面で7基検出された。SX1～6（第133図）はAB4・5、BC6～8区の範囲で重なるように検出された。SX7（第134図）はF11・12区で検出された。SX1～6の検出は硬化面の硬さと検出面の土色により便宜的に分けたものである。検出プランは帯状に延び、硬化面が連続と続くことから道としての使用が考えられる。

① SX1（第133図）

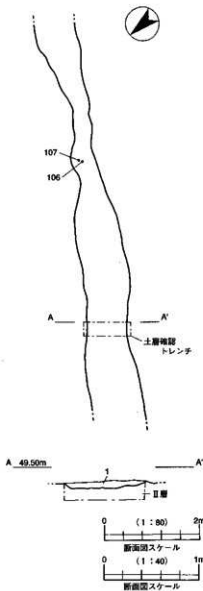
SX1はB4、AB5区で検出された。遺構の長軸方向は南西から北東軸に延び、南西端から北東端に向って少しずつ幅広になる様相をみせ、南西端で2.4m、北東端で7.8mを測る。SD21・22の直上で検出され、SX1の長軸方向はSD21・22の長軸方向にほぼ並ぶようにみえる。SD21の埋没段階で形成された硬化面の可能性があり、硬化面の直上に弥生土器1点、焼礫1点が出土したが、流れ込みと思われ、SD21との重なりと、SX2との切り合いを考えると、SX2よりも新しく、近世以降に使用された可能性が考えられる。

② SX2（第133図）

SX2はA5、B5・6、C7・8区で検出された。遺構の長軸方向はSX1と並列若しくは重なるように延びているように思われ、またSX4に分断されるように切られている。SD19・21の直上で検出され、SX2の長軸方向はSX1と同様にSD21の長軸方向にほぼ並ぶようにみえる。硬化面の直上に弥生土器1点出土したが流れ込みと思われ、SD21との重なりを考えると、近世以降に使用された可能性が考えられる。

③ SX3（第133図）

SX3はB4～6、C6・7区で検出された。遺構の長軸方向は南南東から北北西軸に延び、SX1・2に重なるように検出された。SX1・2・6と比べても硬化は顕著ではなく、検出段階で遺構の途中の硬化面が見失われる所も見られる。SD20の直上で検出され、SD20の埋没段階で形成された硬化面の可能性があり、硬化面の直上に入来Ⅱ式土器口縁部1点、土師器1点、礫2点が出土したが、流れ込みと思われ、SD20の重なりを考えるとSX2よりも古い近世以降に使用された可能性がある。



AA 断面  
1 灰色(7.5Y4/1)土 層中にテフラ等含まない硬く締まった層。(硬化面)

第134図 全面調査(2次) SX7  
平面・断面図

#### ⑦ SX7 (第134図)

SX7はF11・12区で検出された。SD19の西側を沿うように、南東から北西軸に延び、硬化面の厚さは0.07mでやや硬化が強い。硬化面埋土内に須恵器残断部1点(106)、白磁碗口縁部1点(107)が出土しており、SX7の使用時期は中・近世まで遡る可能性がある。

#### ④ SX4 (第133図)

SX4はB4・5、C6・7区で検出された。遺構の長軸方向は南東から北西軸に延び、SX2・3・5に重なるように検出され、またSX4に分断されるように切られている。SX3・5と比べてやや硬化する面であり、SD19の直上で検出され、SD19の埋没段階で形成された硬化面の可能性があり、硬化面の直上に弥生土器3点が出土したが、流れ込みと思われ、SD19の重なりを考えるとSX1よりも古く、SX2よりは新しい近世以降に使用された可能性がある。

なおSX4の北西軸の延長上には、削平を受けてか、プランを検出できなかったがSD19に沿う或いは重なるように所々に硬化面が点在しており、さらにこの延長した先にSX7(第134図)が確認されている。

#### ⑤ SX5 (第133図)

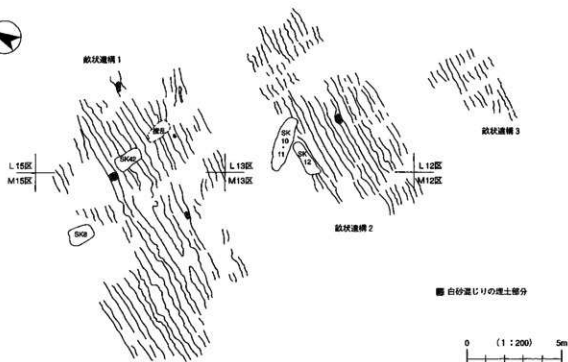
SX5はB5区で検出された。遺構の長軸方向は北西軸に延び、SX1・2・4に重なるように検出され、またSX4に沿うように北東側が切られている。SX5はSX3と同様な硬化面であり、SD19とSD17の間を通る硬化面である。硬化面の重なり具合から、SX2・4よりも古い近世以降に使用された可能性がある。

#### ⑥ SX6 (第133図)

SX6はB5~8、C7・8区で検出された。遺構の長軸方向は南南東から北北西軸に延び、SX3に重なるように検出された。硬化が顕著でやや隆起したような硬化面であり、所々は削平によるものか検出が出来ない所も見られる。SX3と同様にSD20の直上で検出されており、SX3よりも新しい近世以降に使用された可能性がある。



第135図 全面調査(2次) SX7 出土遺物



第136図 全面調査（2次） 畝状遺構 1・2・3 平面図

#### SX7 出土遺物

106は須恵器碗である。胴部が残存し、口唇部が欠損する。口縁部はわずかに外反する様相を見せ、内外面に自然釉らしい付着物が見られる。107は白磁碗である。口縁部が残存し、口縁端部が大きく外反する。内外面に貫人が見られる。

第49表 全面調査（2次） SX7 出土須恵器

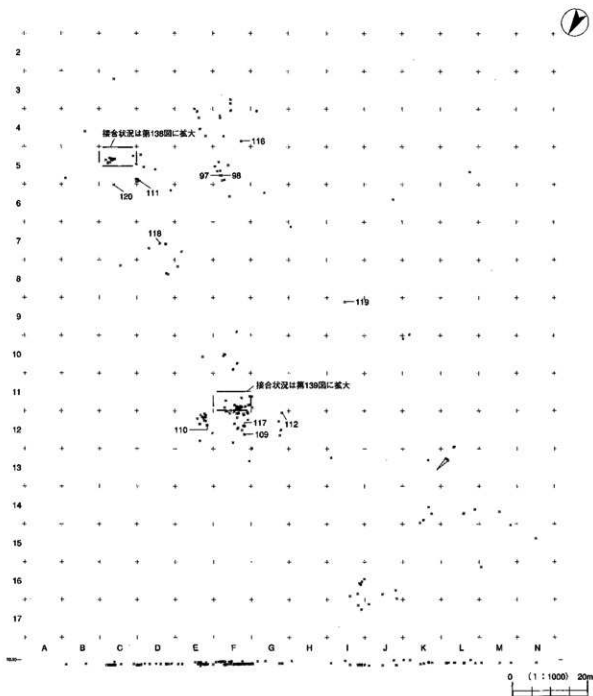
調査 番号	検出 番号	出土区 出土層 位置	種類	形状	分類	胎土		陶磁結合面		底文・脚文		断面 (cm)		備考	
								上段・外周	下段・内周	上段・外周	下段・内周	口径	底径		高さ
第136区	106	470・55	311区307 灰土 278号土層	碗	7	須恵	粘土色 05/7	灰色	2.25/1	0.6/0	ツツコナデ	---	---	3.7	内外面に自然釉: 認められず
									0.01	0.06	ツツコナデ	---	---		

第50表 全面調査（2次） SX7 出土磁器

調査 番号	検出 番号	出土区 出土層 位置	種類	形状	分類	胎土		陶磁結合面		底文・脚文		断面 (cm)		備考	
								上段・外周	下段・内周	上段・外周	下段・内周	口径	底径		高さ
第136区	107	430	311区 307号土	碗?	7	須恵	粘土色 05/9	灰色	---	---	0.06	---	---	1.8	内外面に貫人
									---	---	0.06	---	---		

#### (5) 畝状遺構

畝状遺構はM112～14区に3基検出された。検出層はⅢA層上面である。検出段階では0.6～0.8m幅の硬化面が、同様の幅の未硬化面と交互に検出され、その硬化面は削平によるものか凹凸はほとんど見られない。3基の畝状遺構の長軸方向は南西から北東軸に延び、並ぶ。畝状遺構1・2には、SK38の埋土中に見られた灰白色砂が硬化面上に見られ、SK10・11・12・4・2に切られていることから、灰白色砂の堆積と灰白色軽石の堆積には時期差があり、灰白色砂の堆積が古いことが考えられる。



第137図 土師器 遺物出土状況図

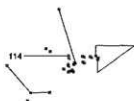
(6) 包含層出土遺物

① 土師器 (第141図)

土師器はB4・5、C3・5～7、D5～8、E3・4・7・8・10・12、F3～6・9～13、G4・6・11・12、H7、I9・13・16・17、J6・16・17、K9・10・13・14、L5・12～14、M14～16、N15区で208点出土し、(第137図)うち接合した遺物13点を図化した。遺物は調査範囲の南東側、北東側、北西側に三分するように出土し、とりわけCD4・5区、EF11・12区、IJ16・17区に遺物が集中する。

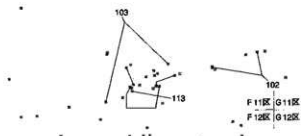


C 4 区	D 4 区
C 5 区	D 5 区



0 (1:100) 2m

第138図 土師器 C 5区 (拡大) 接合状況図



0 (1:100) 2m

第139図 土師器 F 11区 (拡大) 接合状況図

108から115は土師器壇である。108は口縁部から胴部が残存する。口縁端部がわずかに外反し、胴部はわずかに内湾する。109は胴部が残存する。外面に墨書が施され、残存部位が少ないため記された文字は判然としない。110から115は高台をもつ底部が残存する。110は底部中心内面がやや肥厚気味で、底面は筧切り離しの痕跡が見られる。脚端部がやや肥厚気味で、作出された脚は「八」の字に広がり、比較的長めである。111は体部が直線的に延びて立ちあがる様相が見られ、底面の切り離し痕はきれいにナデ消されている。脚は「八」の字に広がり、作出された脚が比較的短い。脚端部は丸くまとまる。112は底面が筧切り離しの痕跡が見られ、作出された脚は「八」の字に広がり、断面四角形の短脚である。113は体部が口縁部に向かって内湾する様相を見せ、底部内面中央はやや肥厚し、筧切り離しの痕跡が見られる。脚はほぼ直立に近い立ち上がりであり、脚端部外面の成形は明瞭な稜をもち、脚端部は丁寧なナデでまとめられる。114は体部が口縁部に向

て内湾する様相を見せ、脚は「八」の字に広がり、作出された脚が外反し、脚端部が丸みを帯びて尖る。器壁は比較的薄手で、小振りの埴である。115は高台が極端に低く、脚は「八」の字に大きく広がり、作出された脚は薄く短く、脚端部は丸くおさめられる。116から119は坏底部が残存する。116・117は底面に篋切り離しの痕跡が見られ、底面端部に張り出しはなく、丸くおさめられ、稜は見られない。117の底部内面は窪むように器壁が薄くなる。胎土が硬質である。118・119は底面に切り離しの痕跡が見られず、底面端部に弱い張り出しが見られる。118は内面に焼成によると思われる橙色(7.5YR 6/6)の変化が見られ、高台部分を意識的に作り、充実高台埴の範疇と言える。119は成形が手摺ね気味で、器面の調整は粗である。118に比べても高台部分が意図的に作られ、充実高台埴の範疇であり円柱状の高い高台である。10C頃に見られる柱状底部を形成している。120は土師器皿である。底部が残存し、体部の立ち上がりが先細りであり、口唇部の近いところで欠損している。底面は篋切り離しの痕跡が見られ、底面端部に張り出しはなく、丸くおさめられる。全体的な成形が粗であり、器形に歪みが見られる。

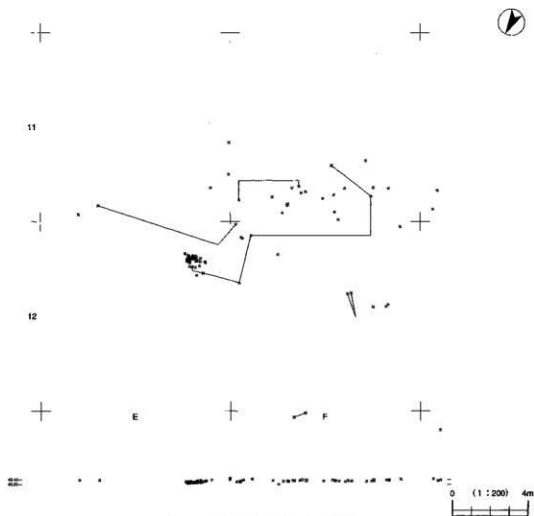
第51表 土師器 出土遺物

調査番号	発掘番号	出土状況(層位)	器種	形状	分類	胎土					色調 (土質:内裏 下段:内面)	底文・調整 (土質:内裏 下段:内面)	数量		備考	
						赤	黄	灰	青	砂			口数	破片		
第140図	108	1981-108	F13瓦 敷目	埴	口縁部 土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	109	2016-109	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	110	2016-110	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	111	2016-111	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	112	2016-112	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	113	2016-113	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	114	2016-114	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	115	2016-115	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	116	2016-116	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	117	2016-117	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	118	2016-118	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	119	2016-119	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部
第140図	120	2016-120	F12瓦 敷目	埴	土師器							0	0	1	1	内湾が顕著な土師器 の坏底部

② 須恵器 (第141図)

須恵器はE11・12、F11~13、G11、K12・13・15区で94点出土し、遺物は主にEF11・12区に出土し、(第140図)SU1及びSD19付近で多く確認されている。121は壺であり、胴部が残存する。外面に斜位の平行敷目が交差する様に施され、内面には当て具痕が見られる。器壁は頸部に向って薄くなる様相を見せる。122は碗であり、底部が残存する。脚が細く、脚端部で大きく外反し、外面に自然釉らしいものが付着する。123は大甕であり、胴部が残存する。外面に格子状の敷目が施され、内面はナデで調整をしている。





第140図 須恵器 遺物出土状況図

第52表 須恵器 出土遺物

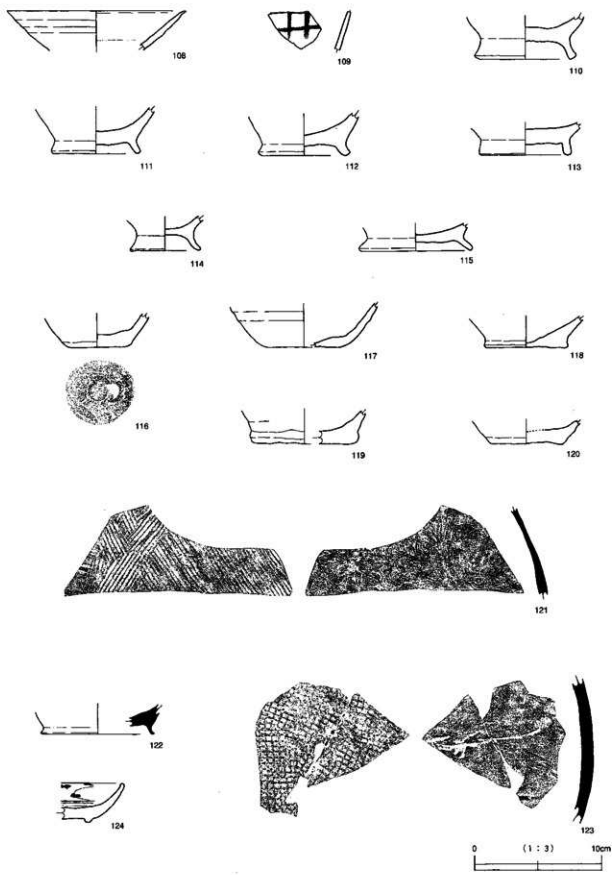
発掘 番号	発掘 番号	出土区 出土層 (遺物)	種類	形状	分類	胎土		名 量		出土・調査		位置 (m)		備考	
						胎土色	成分	上段：外周 下段：内周	上段：外周 下段：内周	口径	底径	高さ			
第140図	121	914	須恵器	須恵器	須恵器	胎土色	0772	灰白色	1.8kg	須恵	須恵	須恵	須恵	6.8	
第140図	122	237	須恵器	須恵器	須恵器	胎土色	2.9kg	灰白色	0.7kg	須恵	須恵	須恵	須恵	2.4	
第140図	123	303・ 55	須恵器	須恵器	須恵器	胎土色	2.9kg	灰白色	2.9kg	須恵	須恵	須恵	須恵	11.4	須恵器 出土

### ③磁器 (第141図)

124は波佐見焼の皿である。口縁部から底部が残存する。口唇部は丸くまわり、底部内面に釉の掻き取り痕が見え、高台は低い。18C後半のものと思われる。

第53表 磁器 出土遺物

発掘 番号	発掘 番号	出土区 出土層 (遺物)	種類	形状	分類	胎土		名 量		出土・調査		位置 (m)		備考	
						胎土色	成分	上段：外周 下段：内周	上段：外周 下段：内周	口径	底径	高さ			
第140図	124	301	磁器	皿	須恵器	胎土色	0409	灰白色	—	—	須恵	須恵	須恵	3.1	須恵器 出土 須恵器 出土
						胎土色	0791	灰白色	—	—	須恵	須恵	須恵	—	



第141图 包含層出土 土師器 須惠器 磁器

(7) 包含層出土石器 (第142・143図)

打製石斧はC8、J13・14、K14、L5・7区で9点出土し、うち1点(125)を図化した。125は砂岩製の有所打製石斧の完形品である。肩部はやや省略気味で、頭部に左右対称に近い挟りがあり、刃部は丸みを帯びる。

横刃形石器はG15、I15、J16区で3点出土し、うち2点(126・127)を図化した。126・127は砂岩製の完形品である。126は頭部左側に挟りが見られ、刃部は丸みを帯びる。裏面は自然面であり、僅かに擦痕が見られる。127は表面に削痕が見られる。

石匙はJ16区で1点出土し、その1点(128)を図化した。128は砂岩製であり、一部に欠損部分が見られる。刃部は1面と思われ、刃部に微細な剥離は見られるものの加工は少ない。裏面には自然面と摩耗が見られる。

石鎌はJ15区で1点出土し、その1点(129)を図化した。打製であり砂岩製の、やや小型の石鎌と思われ、半分が欠損し、刃先の部分が残存する。刃部に微細な剥離が見られるが、刃部が丸みを帯び、使用による摩耗と思われる。

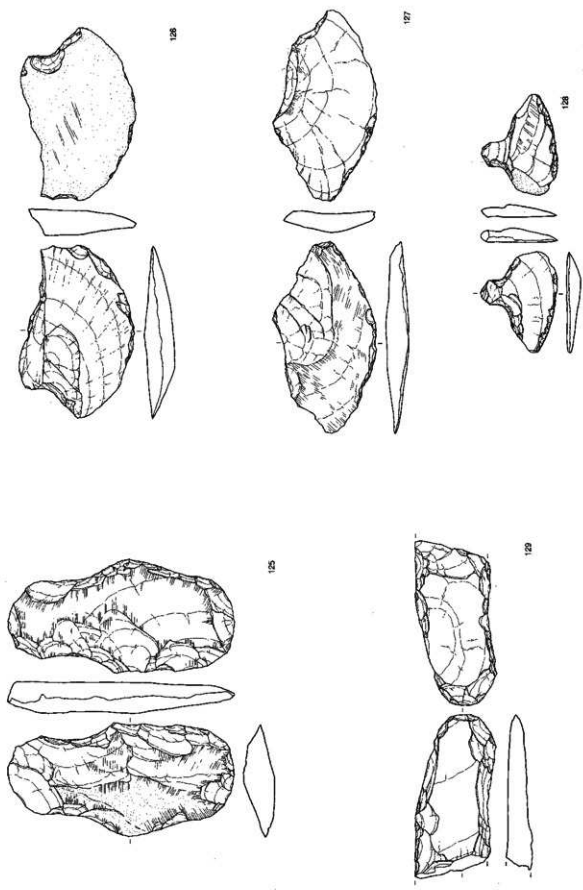
打製石鏃はB6、G14、J15、L12・14区で9点出土し、うち8点(130~137)を図化した。130はチャート製である。五角形鏃であり、縄文時代晩期特有の形態を呈している。挟入部がほとんど見られない薄手の石鏃である。131は黒色安山岩製であり、長手で先端角も狭く、挟入部が深い挟りをもつ薄手の石鏃である。132は安山岩製であり、先端角が狭く、挟入部が浅い挟りをもつ薄手の石鏃である。133は黒色安山岩製であり、片脚が欠損し、挟入部が浅い挟りをもつ薄手の石鏃である。134は黒曜石製であり、挟入部が深い挟りをもつ薄手の石鏃である。135・136はチャート製である。挟入部がほとんど見られない薄手の石鏃である。137は安山岩製であり、挟入部がほとんど見られない薄手の石鏃である。

磨製石鏃はJ16区で1点出土し、その1点(138)を図化した。黒色安山岩製であり、片脚部が欠損する。先端部から側縁が研磨され、刃部を形成する。

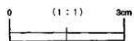
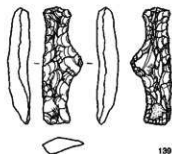
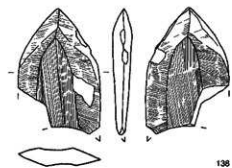
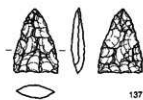
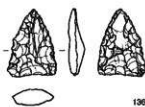
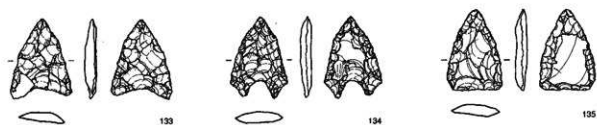
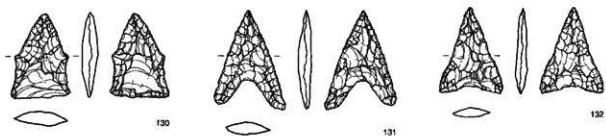
異形石器はI16区で1点出土し、その1点(139)を図化した。黒曜石製であり、左右側面に刃部を形成し、微細な剥離が見られる。

第54表 包含層出土 石器計測表

神田番号	番号	出処番号	出土区	出土層 (図層)	部類	材質	数量 (cm・g)			備 考	
							最大長	最大幅	重量		
第142区	125	190	L7区	Ⅲa層	打製石斧	砂岩	11.9	6.0	1.66	136.8	刃部
第142区	126	2720	J16区	Ⅲa層	横刃形石器	砂岩	6.45	9.1	1.4	75.7	
第142区	127	1840	L14区	Ⅲa層	横刃形石器	砂岩	5.1	12.1	1.19	56.0	側面に擦痕
第142区	128	2715	J16区	Ⅲa層	石匙	砂岩	4.0	5.15	0.75	17.2	裏面、側面に自然面
第142区	129	1485	J15区	Ⅲa層	石鎌	砂岩	4.35	6.65	1.1	66.1	平直
第142区	130	4094	B6区	1400層上	打製石鏃	チャート	2.2	1.50	0.4	1.2	
第142区	131	5444	L13区	Ⅲa層	打製石鏃	黒色安山岩	2.6	1.95	0.28	1.1	
第142区	132	3636	L14区	Ⅲa層	打製石鏃	安山岩	2.25	1.65	0.2	0.8	
第142区	133	2202	G14区	Va層	打製石鏃	安山岩	2.1	1.6	0.3	0.9	片脚部に欠損
第142区	134	460	H5区	Ⅲa層	打製石鏃	砂岩	2.25	1.5	0.2	0.7	
第142区	135	464	H5区	Ⅲa層	打製石鏃	チャート	2.1	1.45	0.2	1.0	
第142区	136	2000	H5区	Ⅲa層	打製石鏃	チャート	1.75	1.25	0.4	0.9	片脚部に欠損
第142区	137	一併	L6区	Va層	打製石鏃	砂岩	1.65	1.2	0.25	0.6	
第142区	138	366	H5区	Ⅲa層	磨製石鏃	黒色安山岩	3.3	2.15	0.9	3.3	片脚部に欠損
第142区	139	1961	F13区	Ⅲa層	異形石器	黒曜石	3.05	1.05	0.56	1.4	



第142図 包含層出土石器 1



第143圖 包含層 出土石器 2

## 第Ⅵ章 井手上A遺跡における自然科学分析

株式会社 古蹟研究所

### 第1節 井手上A遺跡全面調査（1次）における放射性炭素年代測定

#### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や植実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

#### 2. 試料と方法

試料名	地点・層番号	種類	前処理・調整	測定法
No.1	C 2区, II層, 土器付着45	炭化物	acid/alkali/acid	AMS
No.2	B 3区, 方形周溝1, 埋土512	炭化物	acid/alkali/acid	AMS
No.3	B 3区, 方形周溝1, 埋土513	炭化物	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid: 酸-アルカリ-酸洗浄, AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

#### 3. 測定結果

試料名	測定値 (Beta-)	未補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 (較正年代) (2 $\sigma$ :95%確率, 1 $\sigma$ :68%確率)
No.1	275471	2140 $\pm$ 40	-26.1	2120 $\pm$ 40	交点: Cal BC 170 2 $\sigma$ : Cal BC 350-300, 210-40 1 $\sigma$ : Cal BC 200-90
No.2	275472	2070 $\pm$ 40	-26.4	2050 $\pm$ 40	交点: Cal BC 50 2 $\sigma$ : Cal BC 170-AD 30 1 $\sigma$ : Cal BC 100-10
No.3	275473	2150 $\pm$ 40	-27.7	2110 $\pm$ 40	交点: Cal BC 160 2 $\sigma$ : Cal BC 340-320, 210-40 1 $\sigma$ : Cal BC 190-60

BP: Before Physics (Present), Cal: Calibrated, BC: 紀元前, AD: 紀元後

#### (1) 未補正 $^{14}\text{C}$ 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,730年であるが、国際慣例によりLibbyの5,568年を用いている。

#### (2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することで同位体分効効果を補正する。

#### (3) $^{14}\text{C}$ 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分効効果を補正して算出した年代。暦年代較正はこの年代値を使用する。

#### (4) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値およびサンゴの $\text{U}/\text{Th}$  (ウラン/トリウム) 年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線 (IntCal04) を使用した。

暦年代の交点は、 $^{14}\text{C}$ 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し、1 $\sigma$  (68%確率) と2 $\sigma$  (95%確率) は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1 $\sigma$ ・2 $\sigma$ 値が表記される場合もある。

#### 4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1では2120 $\pm$ 40年BP (2 $\sigma$ の暦年代でBC 350~300, 210~40年)、No.2では2050 $\pm$ 40年BP (BC 170~AD 30年)、No.3では2110 $\pm$ 40年BP (BC 340~320, 210~40年) の年代値が得られた。

### 第2節 井手上A遺跡全面調査（2次）における放射性炭素年代測定

#### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や植実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

#### 2. 試料と方法

次に、測定試料の種類、放射性炭素年代測定の前処理・調整および測定法を示す。

試料No.	地点・層序	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	SJ1-6L, 土器土層 (外層)	炭化物	超音波洗浄, 酸-7441-酸処理	AMS
No.2	E-14地区VIa層, No488	炭化種実 (コナラ属)	超音波洗浄, 酸-7441-酸処理	AMS
No.3	Xa層, 茂 No.192~196	炭化材	超音波洗浄, 酸-7441-酸処理	AMS
No.4	Xa層, 藤一浜, No1500	炭化材	超音波洗浄, 酸-7441-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

### 3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた<sup>14</sup>C濃度に基づき同位体分佈効果の補正を行い、放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代および暦年代 (校正年代) を算出した。次にこれらの結果を示し、図1に暦年校正結果 (校正曲線) を示す。

試料No.	測定No. (PDB)	$\delta^{13}C$ (‰)	<sup>14</sup> C年代: 年BP (暦年校正前)	暦年代 (校正年代)	
				1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
No.1	19397	-27.93±0.19	2945±20 (2944±22)	BC1260-1240 (1.7%) BC1220-1120 (68.9%)	BC1260-1050 (96.4%)
No.2	19412	-26.31±0.16	2900±25 (2899±25)	BC1125-1025 (68.2%)	BC1200-1000 (96.4%)
No.3	19398	-27.89±0.14	8390±25 (8388±27)	BC7460-7390 (30.9%) BC7390-7310 (67.3%)	BC7470-7250 (87.1%) BC7230-7190 (8.3%)
No.4	19399	-26.90±0.13	8890±30 (8890±28)	BC8210-8160 (16.1%) BC8120-8030 (68.7%) BC8030-7970 (16.4%)	BC8220-7960 (96.4%)

BP: Before Present (Present), BC: 紀元前

#### (1) $\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比 (<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は試料物質 (試料) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}C$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分佈効果を補正する。

#### (2) 放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、現在 (AD1950年基準) から年数前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は5730年であるが、国際的慣習によりLibbyの5568年を用いた。統計精度 (±) は1σ (68.2%確率) である。<sup>14</sup>C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣習であるが、暦年校正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めた 暦年校正暦年代値も併記した。

#### (3) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地磁気変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動および<sup>14</sup>Cの半減期の違いを校正することで、放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年校正には、年毎の樹木年輪の精確な<sup>14</sup>C濃度およびサンゴのLi7h (ウラントリウム) 年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。校正曲線のデータはIntCal09、校正プログラムはOxCal3.1である。

暦年代 (校正年代) は、<sup>14</sup>C年代値の偏差を校正曲線に投影した暦年代幅で表し、OxCalの推定法より1σ (68.2%確率) と2σ (95.4%確率) で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が記載される場合もある。( ) 内の%表示は、その範囲内に暦年が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

### 4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1では2945±20年BP (2σの暦年代でBC1260~1050年)、No.2では2900±25年BP (BC1200~1000年)、No.3では8390±25年BP (BC7470~7250, 7230~7190年)、No.4では8890±30年BP (BC8220~7960年) の年代値が得られた。

## 第3節 井手上A遺跡全面調査 (2次) における炭化種実特定

### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強耐久のものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構土などから種実を抽出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

### 2. 試料

試料は、縄文時代晩期土器が出土したE14地区VIa層から抽出された炭化種実 (No.4886, No.4888, No.4697, No.4601) である。

### 3. 分析法

種実について形態および双極対称性観察と観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果が可視レベルにより、写真・図像で示した。

### 4. 結果

種実同定の結果、樹木1分類群が同定された。表1に学名、和名および粒数を示し、以下に形態的特徴を記載する。また、主要な個体を写真に示す。

表1 井手上A遺跡における種実同定結果

学名	和名	部位	E-14 地区 VIa 層			
			No4596	No4598	No4597	No4601
Arbor	樹木					
<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(炭化破片)	1	1	3 *	1
Total	合計		1	1	3	1

\* 同一個体有り

コナラ属 *Quercus* 子葉 (炭化破片) プナ科

炭化して黒色で、楕円形を呈する破片である。堅果類の果皮や殻斗が欠落した子葉の破片で、表面が傷み痕形をとどめていないことからコナラ属の同定にとどめた。

### 5. 所見

種実同定の結果、縄文時代後期上層に出土したE-14 地区 VIa 層から検出された炭化植物は、いずれもコナラ属の子葉と同定された。コナラ属は、暖温帯に分布する樹種であり、特に冷温帯に分布する落葉広葉樹類と区別される。コナラ属は堅果の中の子葉の部分でしか検出されるが、地域的分布から照葉樹帯のアカシガ属 (イチイガシなどが含まれる) の可能性が考えられる。

### 文献

- Brink Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.  
 Brink Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.  
 Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP, Radiocarbon 46, 1029-1058.  
 Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p.1111-1150.  
 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.  
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代, p.3-20.  
 南木隆彦 (1993) 葉・果実・種子。日本第四紀学会編, 第四紀資料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.  
 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食。雄山閣, pp.187.

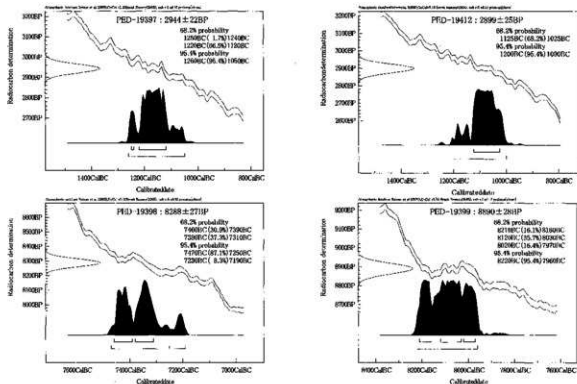


図1 暦年校正結果



井手上A遺跡の種実



1 No.4586  
コナラ属子葉(破片)



2 同左



3 No.4588  
コナラ属子葉(破片)



4 同左

— 1.0mm



5 No.4597  
コナラ属子葉(破片)



6 同左



7 No.4601  
コナラ属子葉(破片)



8 同左

— 1.0mm

## 第Ⅶ章 井手上A遺跡（2次）S J 2出土土器について

中村 直子

### 1 はじめに

井手上A遺跡（2次）S J 2には土器が埋納されており、そのうち3点は破損しているものの残存状況が良好で、出土状況から埋納されたのはほぼ同時であると判断できた。3点に共通して見られる特徴もあることから、これらの土器の共時性は高いと思われる。大隅半島でも数少ない弥生時代後期の共存資料であり、東南部九州の弥生土器編年に有用な資料である。ここでは、これらの土器の編年の位置づけについて検討したい。

### 2 井手上A遺跡S J 2出土土器の特徴

S J 2出土土器のうち、甕形土器・壺形土器・鉢形土器（以後、「形土器」を省略する）各1点が良好な残存状況であった。鉢の胎土は精製され、器面調整は丁寧なナデ（ミガキか？）だが、肉眼観察では混和材が他の土器と共通しており、在地土器と判断した。甕・鉢の胴部上半部から口縁部の形態は、両者ともS字状に屈曲しながら外反する形態を呈している。甕内面には不明瞭な稜線が認められるが、両者とも内外面に明瞭な稜線をもたない。口唇部は強いヨコナデが施され、MF字状にくぼむ。甕の脚台は低く、脚端部は丸い。

甕と壺下半部は底に向かって細くすぼまる形状が共通しており、どちらも胴部下半部外面は、ケズリによって最終的な成形が行われている。両者とも上半部の外面最終調整はナデであり、ケズリ痕は観察できない。これらの成形時における特徴を見ると、甕・鉢、壺一壺と器種を横断して共通したものが、3点の製作時における共時性は高いと考えられる。

甕の底部形態は時期を知る上で有効な属性であるが、S J 2出土壺は、少し丸みを帯びた平底状を呈し、底部と体部との境界には稜線を有する。

### 3 編年の位置づけ

S J 2出土土器は高付式である。高付式は大隅半島を中心に分布する土器様式で弥生時代後期に位置づけられているが（中村, 1987）、高付式の細分はほとんどなされていない。S J 2出土土器の甕が脚台化していることや、甕の底面が平底ながら小さく、少し丸みを帯びていることなどから、高付式土器の中でも比較的新しい段階に属するものと推定される。

他地域との並行関係を見るために有効と思われる属性は、甕・鉢の口縁部形態、甕の脚台、甕の底部形態である。これらの属性に着目し、類似する土器群として、名主原遺跡6号住居跡・土器溜1号、熊野原遺跡SA4、下那珂遺跡SA114を提示した。

名主原遺跡は鹿児島県鹿屋市、熊野原遺跡と下那珂遺跡は宮崎県宮崎市に所在する。熊野原遺跡と下那珂遺跡の甕脚部形態は、名主原遺跡や井手上A遺跡に比べると低い傾向にあるが、宮崎平野と大隅半島との地域差であろう。

これらの土器群は、谷口・津隈（1988）では下那珂貝塚Ⅱ期・Ⅲ期、河野（2011）では高付式、下那珂式2期、熊野原B式1期として位置づけられている。したがって、S J 2出土土器は、弥生時代後期中葉から後葉古段階に位置づけられるものと考えられる。

本論を執筆する機会を与えてくださった出口順一朗氏、そして資料調査にあたり、相美伊久雄氏・志布志市教育委員会には多くのご協力をいただきました。末筆ながら感謝申し上げます。

#### 引用参考文献

池畑耕一・稲村博文・山下博文・河野賢太郎 (2008) 『名主原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財調査報告書 84 鹿屋市教育委員会

甲斐 貴光編 (2004) 『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 90 宮崎県埋蔵文化財センター

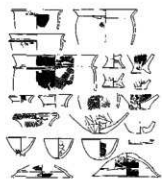
河野裕次 (2011) 「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究」『地域政策科学研究』8 39-73頁

谷口武範・津隈久美子 (1988) 『下那珂貝塚』埋蔵文化財調査研究報告Ⅱ 宮崎県総合博物館

永友良典 編 (1988) 『熊野原遺跡 A・B 地区・前原西遺跡・降ノ内遺跡・前原南遺跡・前原北遺跡・

今江城 (仮称) 跡・車坂西ノ城跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集 宮崎県教育委員会

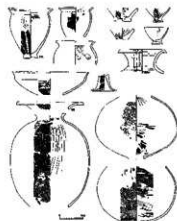
中村直子 (1987) 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 57-76頁



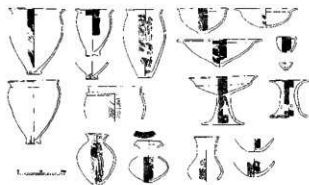
名主原遺跡 6号住居跡



名主原遺跡土器溜1号



下那珂遺跡 SA114



熊野原遺跡 SA4

名主原遺跡：池畑他 (2008) より抜粋  
下那珂遺跡：甲斐 編 (2004) より抜粋  
熊野原遺跡：永友編 (1988) より抜粋

第144図 S J2出土土器に類似する土器群

## 第Ⅶ章 調査のまとめ

### 第1節 遺物

今回の発掘調査では、確認調査(1次)98点、確認調査(2次)499点、全面調査(1次)563点、全面調査(2次)6573点の、合計7733点の出土が確認された。確認調査1次から全面調査(2次)までの調査面積は10,000㎡を超える調査であったが、接合が可能だった遺物は確認調査(1次)0点、確認調査(2次)10点、全面調査(1次)56点、全面調査(2次)561点であり、それぞれの接合率は、確認調査(1次)0%、確認調査(2次)2%、全面調査(1次)9.9%、全面調査(2次)8.5%と高いとはいえない接合率であった。これは遺物包含層であるⅡ、Ⅲa層の上位が削平を受け、遺物の散逸が招いた結果と思われる。また、井手上A遺跡における遺物出土は人別して、縄文時代早期、縄文時代前期～晩期、弥生時代前期～後期末、中世に分類された。ここでは弥生時代前期から後期末にかけて出土した土器群の出土状況について述べたい。弥生前期に比定される弥生前期土器、刻目突帯文土器の範疇タイプの出土状況は、遺物の集中は見られないもの、主に調査区の南側、北側に延びる舌状台地の基部中央にその範囲があるように思われる。次に弥生中期初頭から前半に比定される入来Ⅰ式、入来Ⅱ式土器の出土状況は主に調査区の南東側、調査区の西側に存在する迫に沿うような舌状台地の東端の位置に、その範囲が存在する様に見える。次に弥生時代中期後半に比定される山ノロⅡ式土器、山ノロⅡ式・黒変式土器折衷タイプ、高付式・山ノロⅡ式土器の範疇タイプ、分類不可能の弥生中期土器の遺物は、調査区の北西側、北側に延びる舌状台地の北端に近い位置に、その範囲が存在する様に見える。弥生中期後半、弥生後期土器に比定される土器群の出土状況は、遺物の集中は見られないもの、調査区の南側と北西側、北側に延びる舌状台地の基部中央と北側に延びる舌状台地の北端に近い位置に点するように見える。弥生後期後半に比定される高付式の新段陸、中津野式土器は調査区の北西側、北側に延びる舌状台地の北端に近い位置に、その範囲が存在する様に見える。

従って、弥生時代前期の遺物は舌状台地の基部中央、弥生時代中期初頭から前半にかけての遺物は舌状台地の東端、北側に延びる舌状台地の北端に近い位置、弥生時代中期後半から後期にかけての遺物は北側に延びる舌状台地の基部中央と北側に延びる舌状台地の北端に近い位置、弥生後期後半以降は北側に延びる舌状台地の北端に近い位置に生活城の変化があったように思える。

### 第2節 遺構

#### ① 竪穴建物・方形周溝

今回の発掘調査において、方形周溝が2基、竪穴建物5基が確認されている。弥生時代の使用時期と思われる、方形周溝についても竪穴建物の可能性が高い遺構であるが、今回10000㎡を超える調査を実施し、これまでの発掘調査の実績によれば弥生時代の住居は切り合いが多く重なり、密集する形で検出されることが多いが、今回においては、多少の時期差はあると思われるがあまりにも少ない検出数である。定住が始まったとされる弥生時代において、ムラを形成しつつあるはずであるが、今回の調査地は定住にそぐわない立地であったのか、あまり例のない調査結果に今後の調査により類型をまとめてみたい。

#### ② 溝状遺構

全面調査(1次)において溝状遺構は3基、全面調査(2次)においては37基確認されている。これらの遺構は主に近世以降に使用されたと思われる結果を述べているが、鹿児島県教育委員会発行「大隅地域の道筋 歴史の道調査報告書 第五集」(1997年3月刊行)に面白い記録が残されている。「また馬場から右折して坂を下り、蓬原橋を渡り野井倉開田の北側を馬草原、小松を通り体育館前から五反田商店前を早馬へ通る安楽の道も志布志街道と呼ばれた」との記録があり、「蓬原橋を渡り野井倉開田の北側を馬草原、小松を通り」と表現されている所が、今回発掘調査を実施した井手上A遺跡の隣接地であり、その街道から派生した小道である可能性が考えられる。

図版1 確認調査(1次・2次)



確認調査(1次) 7T IIIa層 遺物出土状況



確認調査(1次) 9T IIIa層 遺物・遺構状況



確認調査(1次) 6T 南壁 土層断面状況



確認調査(2次) 4T IIIa層 遺物出土状況



確認調査(2次) 3T Xa層 遺物出土状況



確認調査(2次) 1T Xa層 遺物出土状況



確認調査(2次) 2T 遺構検出状況



確認調査(2次) 3T 東壁 土層断面状況

図版2 全面調査(1次) 方形周溝1



方形周溝1 焼土・Pit 検出状況



方形周溝1 周溝部分完掘状況



方形周溝1 焼土断面状況



方形周溝1 検出状況



方形周溝1 周溝部分断面状況

図版3 全面調査(1次) 方形周溝2 SD1 SK1



方形周溝1・2 SD1 SK1 VIb層上面 検出状況



方形周溝2 SD1 SK1 完掘状況



方形周溝2 東壁ベルト土層断面状況



方形周溝2 周溝部分完掘検出状況



方形周溝2 完掘検出状況

図版4 全面調査(1次) SD2 SD3



SD3 完掘状況



SD3 検出状況



SD2 検出状況



SD2 完掘状況



SD2 南壁土層断面状況



図版5 全面調査(1次) SK1 SK6 土層断面 遺物出土状況



東壁土層断面状況



SK1 完掘状況



A1区 遺物出土状況



SK6 完掘状況



遺物出土状況 近撮(56)

図版6 全面調査(2次) 竪穴建物 I



S14・5 SD8 SK102 遺構検出状況



S11 検出状況



S13 完掘状況

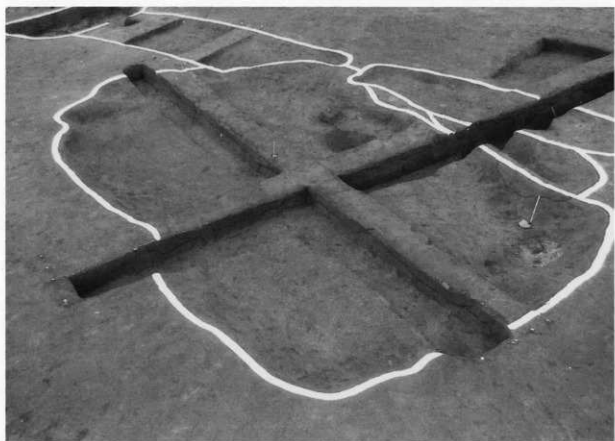


S11 完掘状況

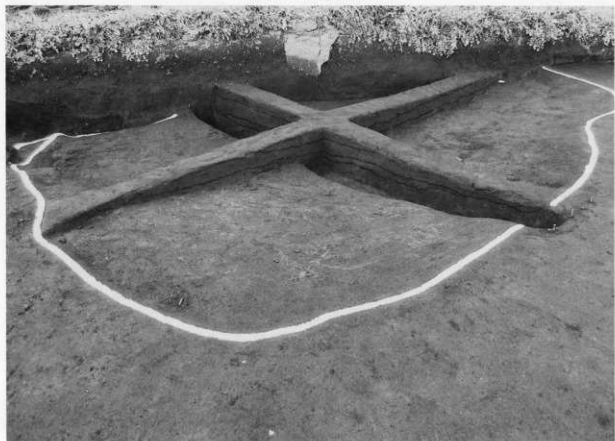


S15 完掘状況

図版7 全面調査(2次) 竪穴建物 II



S11 土層断面状況



S12 土層断面状況

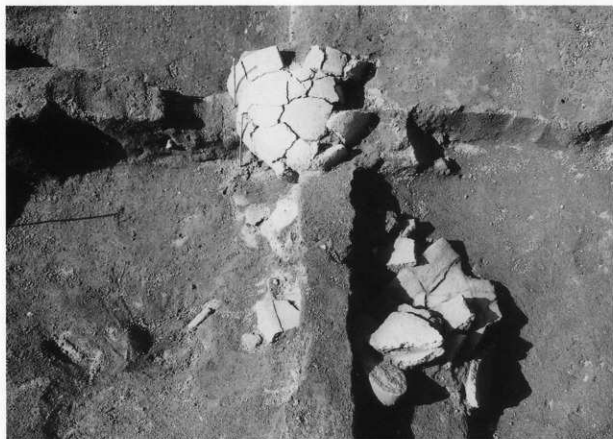
図版8 全面調査(2次) 竪穴建物 III



S I 3 土層断面状況



S I 5 土層断面状況



SJ1 出土状況



SJ1 入佐式土器断面出土状況



SJ1 東西ベルト断面状況



SJ1 入佐式土器出土状況

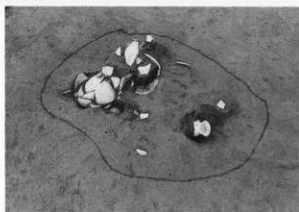
図版10 全面調査(2次) SJ 2



SJ 2 出土状況



SJ 2 出土状況 接写1



SJ 2 掘り込み面検出状況



SJ 2 出土状況 接写2

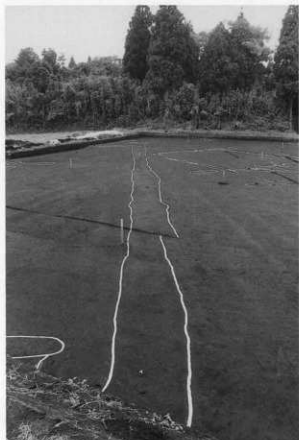


SJ 2 掘り込み面完掘状況

図版 1 1 全面調査(2次) 溝状遺構 I



SD 17~20 遺構検出状況



SD 1 検出状況



SD 1 完掘状況

図版12 全面調査(2次) 溝状遺構 II



SD6・7 検出状況



SD6・7 完掘状況



SD6 土層断面状況1



SD6 土層断面状況2



図版13 全面調査(2次) 溝状遺構 III



溝状遺構群(SD8~12) 検出状況



SD8 検出状況



SD9~12 検出状況



SD2 検出状況

図版14 全面調査(2次) 溝状遺構 IV



SD13 完掘状況



SD14~16 完掘状況



SD13 土層断面状況



SD14 土層断面状況

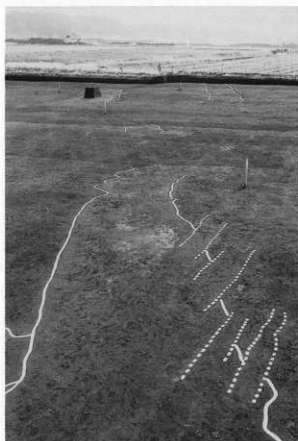


SD13~15 検出状況



SD21~23 完掘状況

図版15 全面調査(2次) 溝状遺構 V



SD16 南側 検出状況



SD16 北側 検出状況



SD16 土層断面状況



SD16 北側 完掘状況



SD16 南側 完掘状況



SD16 クランプ部分 完掘状況

図版16 全面調査(2次) 溝状遺構 VI



SD17・19・20 検出状況



SD19 南側 検出状況



SD17・19・20 完掘状況

図版 17 全面調査(2次) 溝状遺構 VII



SD19 南側 完掘状況



SD19 北側 完掘状況1



SD29 土層断面状況



SD19 北側 完掘状況2



SD37・38 完掘状況

図版18 全面調査(2次) 溝状遺構 VII



SD26・27・36 検出状況



SD27 完掘状況



SD27 土層断面状況



SD25 検出状況

図版19 全面調査(2次) 土坑 I



SK136 土層断面状況



SK10・11 半掘状況



SK10~12 完掘状況

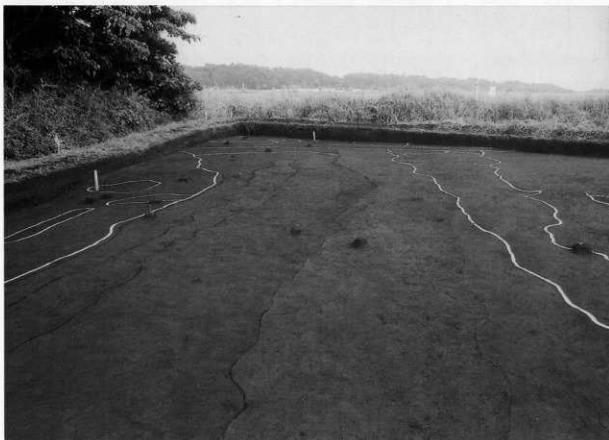


SK12 半掘状況



SK33 半掘状況

図版20 全面調査(2次) 土坑Ⅱ 硬化面 畝状遺構



SX1-6 検出状況



畝状遺構 検出状況



SK101 検出状況



SK101 土層断面状況



図版21 全面調査(2次) SS1・3 SUI 土層断面状況



SS1 検出状況



SS3 検出状況



SUI 検出状況



E14区 縄文晩期土器及び炭化物 出土状況



J~L8区 縄文早期層 土層断面状況



FG11区 土層断面状況

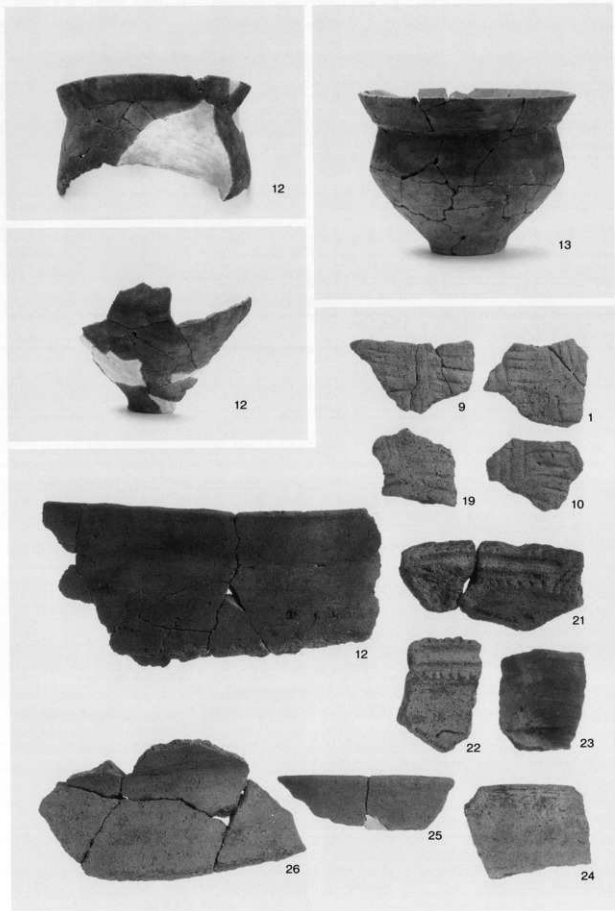


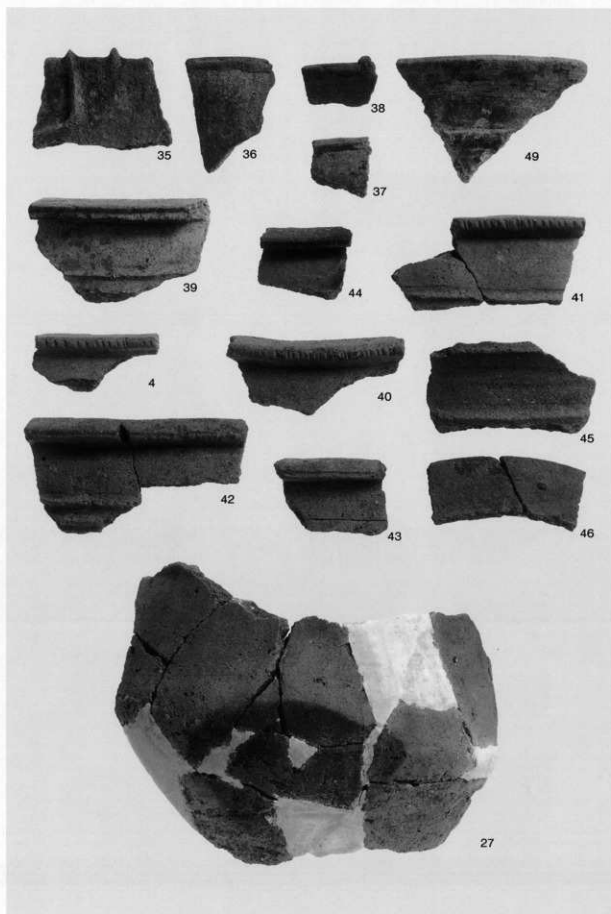
市立蓬原小 発掘体験風景



作業風景

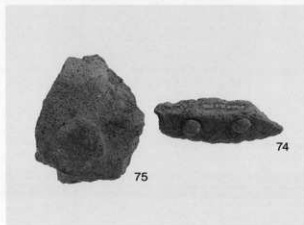
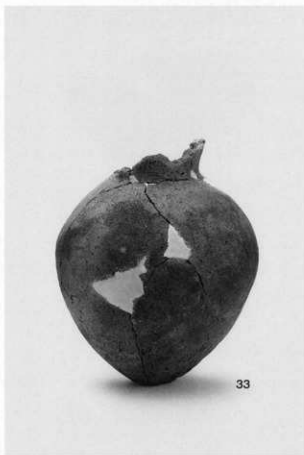
図版 2 2 縄文土器 I



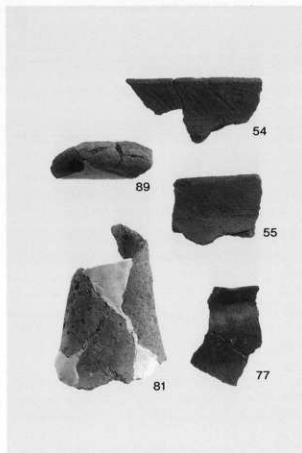


图版 24 弥生土器 II

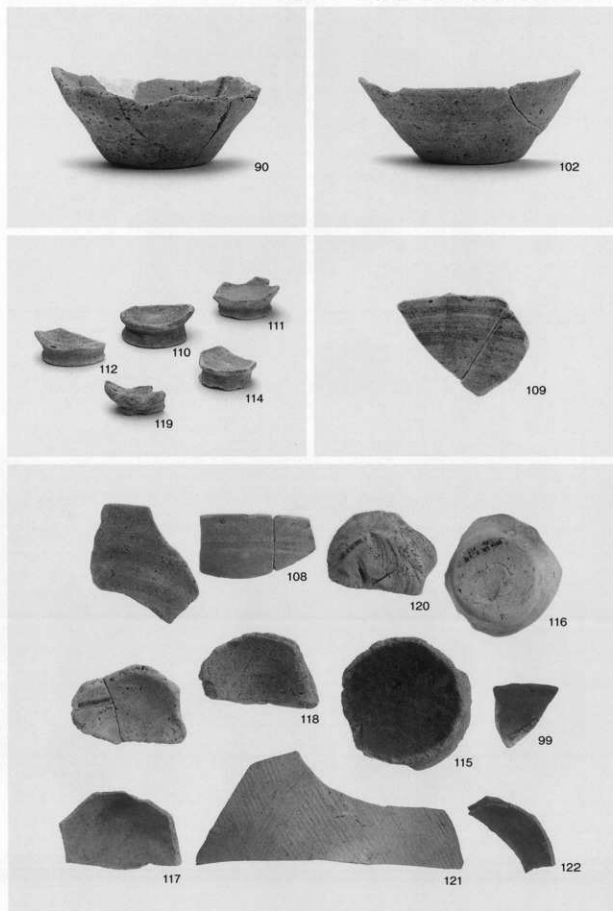




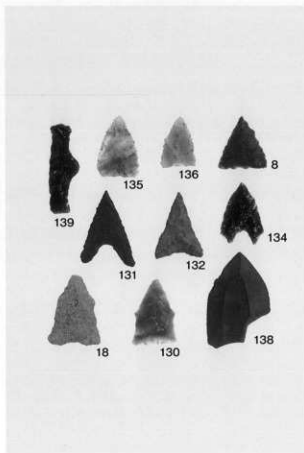
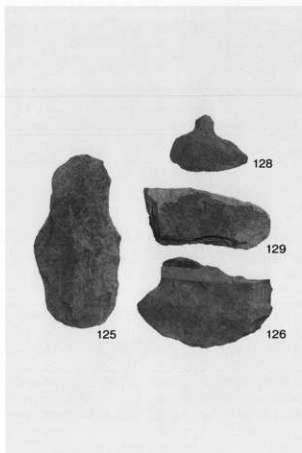
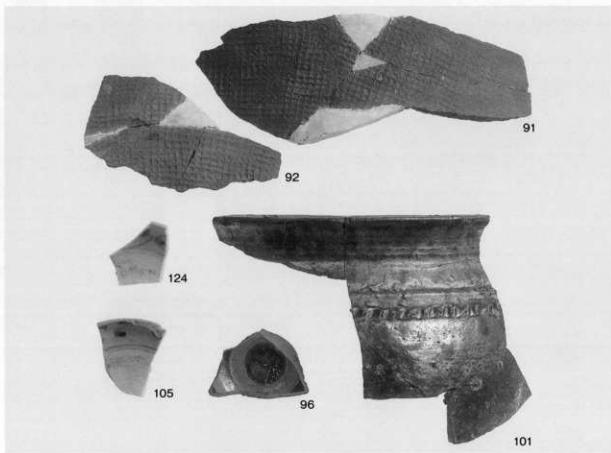
图版26 弥生土器 IV



図版 27 土師器・内黒土師器・須恵器 I



図版28 須恵器 II・石器





## 報告書抄録

ふりがな	いでうええーいせき							
書名	井手上A遺跡(1・2次)							
副書名	経営体育成基盤整備事業野井倉下段地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編著者名	出口順一郎 中村直子							
編集機関	志布志市教育委員会							
所在地	〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志2-1-1 Tel 099-472-1111 fax 099-473-1880							
発行年月日	2012年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いでうええーいせき 井手上A遺跡 (第1次)	かごしまけんしよしし 鹿児島県志布志市 ありあけちよう 有明町	462217	69-196	131° 2′ 2.7″	31° 29′ 28.8″	20091104 ～ 20100204	2,000	果樹園湯 整備事業に伴う 記録保存調査
いでうええーいせき 井手上A遺跡 (第2次)	かごしまけんしよしし 鹿児島県志布志市 ありあけちよう 有明町	462217	69-196	131° 2′ 0.4″	31° 29′ 30.7″	20100601 ～ 20110223	12,000	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
井手上A遺跡	散布地	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 弥生時代後期末 古墳時代 古代 近世		集石3、堅穴建物5、方形 竪溝2、溝状遺構40、土 器埋設遺構2、遺物集積 1、焼化面7、土坑多数		筒形土器、市来式土器、入笠式 土器、縄文晩期土器、弥生前期・ 中期・後期・晩期・後期末土器、 入来1式土器、入来2式土器、中 津野式土器、成川式土器、佐賀式 土器、古代土師器、古代須恵器、 陶磁器		弥生時代集落跡 近世道跡
要約	弥生時代前期から後期末にかけての遺物が、出土数は少ないものの出土したが、それに伴う堅穴建物は7基と通常考える弥生時代集落跡の様相はなく、多時期の出土遺物の割には小規模な集落である。また、近世と思われる道跡は、調査区全体を網羅するように検出された。							

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

## 井手上A遺跡(1・2次)

発行日: 2012年2月28日

発行: 鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号

Tel. 099-472-1111

印刷所: 西文社印刷株式会社 志布志支店

〒899-7103 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目16番21号

Tel. 099-471-1328